蕎麥の花

913.6
H461s8
00369062

小説

蕎麦の花

<かつぱ小説集>

●

国立国会図書館
30.1.11

火野葦平著

河出新書

（毎日新聞社提供）

913.6H46128

帝国図書館蔵書

国立国会
30.7.-7
図書館

著者略歴

明治四〇年福岡縣若松市に生まる。本名玉井勝則。大正一二年小倉中學から早稲田大學英文科に入學、入營のため中退。在學中、丹羽文雄、中山省三郎等と「街」に據つたが、除隊後、家業の沖仲仕玉井組親分となり、文學を一時やめた。昭和一一年、詩集「山上軍艦」を發表、再び筆をとるや「山芋」「河豚」「糞尿譚」を矢繼早に發表し、一三年二月「糞尿譚」で第六回芥川賞を受けた。同年五月、徐州會戰に加はり「麥と兵隊」更に「土と兵隊」「花と兵隊」を發表、一世を風靡した。戰後、追放をうけたが、その間にもインパール作戰を主題にした「青春と泥濘」を書き、戰爭と敗北の體驗を誠實に生々と描いた。二八年夏ヨーロッパ周遊、二九年二月琉球、三〇年四月インドから中共、北鮮を訪歴。他に「幻燈部屋」「赤道祭」「花と龍」「小說歐羅巴」「琉球舞姫」「戰爭犯罪人」等の作品がある。

369062

目次

石と釘……六
千軒岳にて……一三
水紋……一七
魚眼記……二三
十三夜……三三
皿……四四
昇天記……七二
人魚……七八
南と北……九〇
胡瓜と戀……一〇三
李花……一一八

珊瑚礁……一二五
手……一二九
月かげ……一四四
清流……一四九
亡霊……一五五
海御前……一六七
蕎麥の花……一八二
あとがき……二〇一

蕎麥の花

〈かつぱ小説集〉

石と釘

一

鍛冶屋はいそがしかつた。汗をたらしてまつ赤に灼けた鐵をうつた。火花が散つた。鞴(ふいご)が喘息のやうな聲で鳴り、小さい空氣窓を、ぱくりぱくりと動かしてゐた。

「ごめんよ。たのみがあるんぢやが」

一人の乞食のやうな山伏が表に立つた。

「たのまれんよ。今仕事がいつぱいだ」

鍛冶屋はふりむきもせず答へた。

「釘を一本つくつて貰ひたいのぢやが」

「釘なら釘屋に行きなさい」

「そんな釘ぢやない。一尺くらゐの大釘ぢやが」

鍛冶屋はふりむいた。

「なんするんぢや」

「河童を封じるんぢやが」

「ほうろく言ふとけ」

鍛冶屋は唾を吐いた。まつ赤な鐵を打つた。火花が散つた。

二

「ごめんよ、たのみごとがあるんぢやが」

その翌日も山伏は一本齒をひきずつて來て、鍛冶屋の表に立つた。赤鼻に水ばなを垂らして山伏は嗄れ聲で言つた。鍛冶屋は相手にしなかつた。その翌日も山伏はやつて來た。その翌日も山伏はやつて來た。鍛冶屋は灼けた鐵を冷やすよごれた水をぶつかけた。その翌日も山伏はやつて來た。鍛冶屋は灼けた鐵を埋める砂を浴びせた。その翌日も山伏はやつて來た。鍛冶屋は立ち上り、向う槌をふり上げて山伏を打つた。打たうとした。すると彼の手は痺れて向う槌はかへつて彼の頭を打つた。鍛冶屋は水ばなをたらした蒼白の山伏のために、丹念に鍛へた一本の釘を作つた。

三

喊聲をあげて、河童の群は香木川の土堤のかげから、手に手に葦の葉を太刀のごとくひらめか

して飛び立つた。天に高く上るにつれてそれは無數の蜻蛉の群のごとく見えた。やがて星のない夜空の中に吸ひこまれ見えなくなつた。まもなく空間にあつて異樣な物音が起つた。ひようひようと風の音のごとく、藤の實の啄(ついば)まれて裂ける音のごとく、硝子のかち合つて破れる音のごとく、鳥の羽ばたきのごとく、さまざまの音が起つた。地上にあつてこの物音を聞いた人々は、そらガラツパさんの合戰だといつて、仕事をしてゐるものは仕事をやめ、話をしてゐるものは話をやめて、その音の止むのを待つた。

島郷の河童群と修多羅群とが時折り繩張爭ひのために空中で戰鬪をまじへた。征覇の心に燃える傳說の動物達は、その果敢なる攻擊の精神をみなぎらせて、空間を飛び、ひるがへり、たたかつた。

「また、やられてゐるぞや」

朝になつて、百姓達はきまつてさう呟きながら、彼等の耕地にやつて來る。

田や畠の中に、例のごとく點々と青苔のやうなかたまりが出來てゐた。折角丹精こめて作つた野菜畠の中の各所に、どろどろの青い液體が一間四方位に流れ淀み、鼻をさす臭氣を放つてゐた。それは昨夜の空中戰鬪で戰死した河童が地上に落ち、青い水になつて溶けてしまつたあとである。かくして河童の合戰のたびに農作物の被害はおびただしいものであつた。

四

「申しあげます。申しあげます」

一匹の河童が嘴を鳴らし息を切つて注進して來た。當時、島郷軍の部隊長は筑後川に棲んでゐた頭目九千坊の二十七騎の旗頭であつた。彼は北九州永遠の平和のためには、どうしても修多羅軍を壓倒殲滅しなければならないと確信してゐるのである。

「なにごとぢや」

「實はたいへんなことを聞き及びました。堂丸總學といふ破れ山伏が、小癪にも、我々河童を法力をもつて地中に封じてしまふ祈禱をはじめたさうでございます」

「それは大變だ。あいつは先年日向の名貫川で、我々一族の目痛坊(めいたばう)をちまの葉でまきこんだ男だ。同文同種の河童同志で戰爭をしてゐる場合でない」

そこで、修多羅、島郷、兩河童群の和平聯合が成立した。彼等は大根と胡瓜と茄子とをさかなにその和睦の式典をすませ、彼等の新しい共同の敵への鬪志をはらんで、おのおのの頭の皿にまんまんと水を滿たした。

五

高塔山の頂上に風が荒れた。雨に朽ちた御堂の中に石の地藏尊があつた。山伏堂丸總學はその前に端坐し、護摩をたき、狂人のごとく身體をうちふるはせながら、高らかに經文を誦した。この赤鼻の修驗者は石の地藏の冷たい體軀を豆腐のごとく柔軟にするために祈禱をしてゐるのである。彼は汗にぬれ、眼は血走つた。彼は立ち上り、地藏尊に手をふれた。地藏尊は冷たく堅かつた。彼は吐息をついてまた坐つた。またはげしい祈りが初まつた。しばらくしてまた立ち上り、地藏にふれた。地藏は柔くなつてゐなかつた。このやうにして山伏の祈禱はくりかへされ盡きることがなかつた。日は上り、沈み、また上り、また沈み、彼はなにも食べなかつた。

六

河童の中から優秀なる連中が選拔され、祈禱の妨害が初まつた。經文の威力にとりまかれてゐる總學に對して、河童達は手をふれることが出來なかつた。術を好くするものが窈窕たる美女となり、ふくらはぎをあらはにして山伏の面前を徘徊した。金銀を積み立ててその黃金の光を山伏の眼の前に浴びせた。怪異なるものの形になり、山伏の周りを飛び交ふて恫喝した。はては、數百の河童が山伏の周圍にくまなく糞尿をたれながし、そのたへがたき臭氣の中に山伏をつつんだ。しかしながら、堂丸總學はみぢんも動搖せず、祈禱をつづけたのである。

七

何日かが過ぎ、山伏は線香のごとく痩せ細つたが、そのはげしい祈禱の精神は毫もひるまなかつた。また、河童たちの必死の妨害も止むことがなかつた。

何千べん目かに堂丸總學が立ち上つて石の地藏の肌にふれた時、石は山伏の指の下にへこんだ。山伏の顏が朝日のごとくかがやいた。彼は膝の前においてあつた一本の釘と金槌とを取り上げた。そうして地藏の背後に廻り、その釘を背にあてた。この時、今まで彼の手から離れることのなかつた經文が下に置かれた。經文を持つてゐたために近づくことの出來なかつた河童たちが、その隙をうかがつて山伏のからだに群がりついた。山伏は金槌をふるつて釘をうちこんだ。その手に河童たちはすがり、他の河童は山伏の身體にするどい爪を立てた。或る者は嘴をもつてその肉を啄んだ。山伏は血にまみれ、傷だらけになりながらも、必死に經文を唱へ釘をちよう〳〵と打つた。一尺の釘がやうやく半分入つた時、山伏は力つきてそこにたふれた。しかしながら、もはや彼の一念は成就してゐたのである。山伏がたふれるとともに、多くの河童たちも地藏尊のまはりにはら〳〵と木の葉のごとく落ちてたふれ、青いどろどろの液體となつて溶けながれた。

八

私は高塔山に登り、その頂上の石の地藏尊の背にある一本のさびた釘に手をふれる時には、奇妙なうそざむさを常におぼえるのである。さうして、その下に無數の河童が永遠に封じこめられてゐるといふ土の上に、やうやく萌えはじめた美しい青草をつくづくながめるのである。

千軒岳にて

草の葉を咽にしてこころよい晝間のまどろみに落ちてゐた河童たちは、突然自分たちのからだが土の上に投げだされ、はつとおどろいた耳におどろおどろして鳴る山の音をきいて、方角もわかたず思ひ思ひの方向にむかつて飛びたつた。鋸のやうにぎざぎざのある千軒岳の絶頂からは、天に沖するごとく噴煙がまきあがり、巨大な岩石が毬のごとくに無數に飛び、煮えかへる轟音をとどろかして眞紅の焰が噴きあがつた。飴をとろかすやうに頂上の山形を崩し、いろいろの姿に變へながら溢れだして來た熔岩が、樹をたほし、草を燒き、眞紅のかがやきを長々と曳きながら、凹凸のある山腹の斜面を流れくだつていつた。數千尺の高さに噴きあげられた煙の中に、嵐が生じ、雷鳴が起り、電光が青白い焰のごとく間斷なく閃いた。この豪宕なる火山の圏外に逃げだした多くの河童たちは、もはやそのすさまじい物音もほとんどかすかにしか聞きとることが出來ぬ堤のかげに來て、はじめてその馬鹿馬鹿しく大仰の自然の振舞を嗤つた。爆發の刹那に起つたはげしい地震のために、背中の甲羅にひびが入つたり、皿を割つたりした河童たちは、自然の愚劣な行爲に對しておさへがたい輕侮の念を抱いたのである。夜になるとなほ火を噴く山のために、

空は眞赤に染まり、河童たちが水をのみにおりて行つた溪谷の谷川は血のながれのやうに見えた。勇氣のあるものはその水をのんだが、さうでないものは、川のながれが赤いのは赤いのではなく、ただ火山の光を映じて赤く見えるだけで、水はなんともなつてゐないのだといふことを信ずることができず、からからに咽喉がかはいてゐたのにもかかはらず水をのむことができなかつた。千軒岳は數日ののちに火を噴くことをやめたが、その擴がつた火口から火山灰をふくことをやめなかつた。千軒岳の裾野をふくむ高原の青草は火山灰のため萎れ、河童たちが夏の强い日ざしを避けて晝間のまどろみのときの廂にした叢の多くは枯れた。降りくる火山灰が眼にしみて河童たちは顏を洗ふためにたびたび谷間に降りて行かなければならなかつた。また、うかつにうたたねをして居ると、火山灰が頭の皿にたまつて水分を吸收し、氣分が惡くなり力が拔けてしまふやうなこともあつた。地上が灰でざらざらと坐り心地がわるくなると、河童たちは牧場にゐる多くの黃牛の背中に休んだ。黃牛は河童が背中に乘ると、蠅を追ふ時とおなじやうに尻尾を動かしてこれを追ふ。輕くあしらはれたことで甚だしく自尊心を傷つけられた河童たちは、牛の背中をひつかいて飛び立つ。牧場の人たちはときどき黃牛の背中についてゐる奇妙な搔き傷がどうして出來たものか理解することができない。さうして熔岩でも降つて來て牛の背に落ちたのでもあらうかと、さかんに噴煙をつづけてゐる千軒岳のいただきをはるかに望むのである。河童たちはついに千軒岳の噴火口の上を飛びあるくやうになつた。いたづらに千軒岳を遠望してゐることが彼等の

矜持に添はず、勇氣ある一匹の河童が或る日千軒岳の頂上に飛んで行つて、はるか高いところからその絕頂の火口を見下し、或る程度の高度を保つてをれば絕對に危險はないといふことを冒險の果に證明してから、多くの河童たちはいづれも千軒岳の眞上を飛翔するやうになつた。それはあたかも無數の蜻蛉の群のやうに見えた。火口からは見あぐる高さに火山灰を噴きあげ、火山灰は風のまにまに山脈の上を這ひ流れて行つたが、河童たちの飛んでゐるところには一片の灰も來ず、河童たちは澄みきつた青空の中を悠々と自由自在に飛び交うた。或るものは口笛を鳴らし、或るものは木の葉落しをやり、或るものは唄をうたひ、或ひは眼下に見える柘榴のごとき噴火口の中に糞尿をたれおとし、自然を征服した軒昂の氣を負うて、自分たちの眼下に屈從し果てた大自然の意氣地なさをさんざんに嘲笑したのである。そのやうな輕快な飛翔のつづけられた幾十日かの後に、千軒岳はふたたびすさまじい鳴動とともに爆發をした。おどろおどろしく鳴りひびいたとどろきとともに、天に沖した火煙は、そのとき天にあつて輕快な亂舞をつづけてゐた多くの河童たちをこともなげに卷きこみ、山脈の膚に向つて落下していつた。逃れんとして飛びたつた河童たちもその熱氣にあてられ、力つきて木の葉のやうにはらはらと火口の中へ落ちていつた。鋸のやうにぎざぎざのある千軒岳の絕頂からは、天に沖するがごとく噴煙がまきあがり、巨大な岩石が毬のごとく無數に飛び、煮えかへる轟音をとどろかして眞紅の焰が噴きあがつた。飴をとろかすやうに頂上の山形を崩し、いろいろの姿に變へながら溢れだして來た熔岩が、樹をたふし、

草を燒き、眞紅のかがやきを長々と曳きながら、凹凸のある山腹の斜面を流れくだつていつた。數千尺の高さに噴きあげられた煙の中に、嵐を生じ、雷鳴が起り、電光が青白い焰のごとく間斷なく閃いた。燒けおちた河童たちを熔かし含んだ熔岩は、火の流れとなつて山腹をくだり、高原によどみ、しばらくの間たぎる焰となつて消えなかつた。そのときから永い年月が流れた。千軒岳の高原にはいちめんに熔岩の間から不思議なかたちをした青黑い花が咲きいでた。その花は誰も名前を知らないが、雨のときにはいつぱいにその花びらをひろげてゐるけれども、千軒岳から火山灰(よな)でも降るやうな天候の時には、たちまちにして花びらを閉ぢてしまふのである。また、夜になれば、千軒岳の高原は無數の星によつて滿される。それはしかし星ではない。また螢でもない。熔岩の中に身體は熔けてしまつたけれども、いかなる高熱をもつてしても熔けることのない河童の眼玉のみが、鏤(ちりば)められた寶石のごとく、今もなほ夜ともなれば熔岩の中に青白い光を放つのである。

水紋

曇つた日にはよくわからないが、晴れた日に、川の水面を透かしてみると、恰度、一錢白銅を浮べたやうに、そこだけ丸く光つてゐる部分のあることに氣づくことがある。それはひとつの場合もあり、數個のときもあり、また、あられ模樣のやうに數をかぞへることのできない折もある。また、さめ小紋に似てあまり密集してゐるので、かへつて、それと氣づかないことも珍らしくない。なほ、よく氣をつけてみると、それは小さい渦のやうに、つねに廻つてゐる。さういふものを、水面に認めた場合には、その下に河童が居るものと考へてよい。しかし、河童が水中に居れば、そのまうへの水面にさういふ標識があらはれるといふことは、河童自身は知らないのである。もつとも、すべての河童がさうであるといふのではなく、種族によつてはその標識をあらはさないものもある。河童は種族によつてその出生の歷史を異にしてゐることは周知のことであるが、その水紋をあらはすものは、概して出のよい種族の場合が多い。壇の浦に沈んで亡びた平家の末裔が、男は蟹となり女は河童となつたことは有名な話であるが、われわれは關門海峽の水面にこの水紋を發見することはたびたびである。

ところで、あるとき、小倉にある陸軍橋からすこし上流の紫川の水面に、二十よりは少くない水紋がゆるやかに舞ひながら、冬には珍らしく晴れわたつた太陽の光を受けて、鈍銀色に光つてゐた。しかしながら、橋を通る人も、岸を通る人も、たれひとりそれに注意する者はなく、そればかりではなく、さつきから傳馬船や、筏などがその水紋のうへを何度も往き來した。そこは川がすこし曲つてゐるところで、水流のあたる部分が深く底を掘り、淵のやうになつてゐる個所だ。そこへ、さつきから水紋と同じ數の河童たちが集まつて、熱心になにか語り、とがつた嘴を鳴らしては悲しんだり、怒つたり、笑つたりしてゐた。

まづ、彼等は自分たちの望みのかなはないことがなによりも遺憾に耐へぬ風であつた。彼等は地上で起つてゐることに對して、じつとしてゐることができず、自分たちもその闘ひに參加したいことを念願したのであるが實現されなかつた。彼等は傳說による祖先の光榮を自負して、いささかの疑義もなく、現在の神話に參畫できることを信じたのであつたが、その希望は達せられなかつたのである。

何日か前に、彼等のうちの思慮と勇氣とを有するものが提議した。

「いま、地上では壯大な戰爭が始まつてゐる。これは昔、この國ができるときに行はれた神話が、新しい規模をもつて、ふたたび始められたに外ならぬ。われわれもこの國に棲む河童として、是が非でもこの神聖な戰ひに參加したい。きつと役に立つことができるに相違ない。われわれは傷

を癒す術はもちろん、手足の落ちたのをつぐこともできる。またもつとも得意とする水中遊弋によつて敵の部隊や艦隊の動靜をさぐり、また、そのほかのいかなる情報をも手に入れることができる。日清、日露の兩役には屋島に棲む九十六匹の狸が出陣して、功をあらはしたことも聞いてゐる。下賤なる狸ですらさうであるから、われわれがじつとしてゐるわけにはゆかない。われわれは落ちぶれたりとはいへ、祖先の名はあきらかに古事記にその名をとどめられてゐるのだ。山田の曾富騰といへば、もとは山や田や水を治める神であつた。殘念にも、子孫に心がけのよくないものが居つたために、山中では山わろになり、水中では河童になつたが、それはわれわれとはまつたく關係のないことだ。われわれは、心のなかではすこしも古事記の尊嚴を失つてゐないと確信してゐる。出陣しよう。そして、大いに闘はう」

ところが、彼等の希望はそのさかんなる意氣込みにもかかはらず實現しなかつた。彼等の代表が軍に申し出たところ、その志は壯とし協力の意は謝すも、日本軍は力が足りなくて河童の應援まで受けたと思はれたくない。といふ理由で拒絶されたのである。それが、河童たちが悲しんでゐたわけである。

おこつてゐたのは、このごろ、怪しい形のものが水中を徘徊して水をにごすといふのである。それはごく最近氣づいたことであるが、このごろ、嘗て知らなかつた異樣の鳴き聲をときどき聞く。河童の聲はふたつの皿をたたくときに出る音に似てゐるのであるが、その聞きなれぬ聲は、

恰度、二本の木の板をゆるくかち合はしたときの音に似てゐて、鈍重で、卑屈に聞える。その正體をはじめは見たものがなかつたが、やがて、あるとき、勇敢なる河童がしきりに異様な調子で鳴いてゐる聲をたよりに近づいていつてそれを捕へた。

水面から光の透して來ない水底に、岩や木屑や竹片などの堆積した場所がある。さういふところに好んでその怪しい形のものは潛んでゐる。彼等はひつそりと靜まりかへつてはゐるのであるが、どうしたものか、しきりににぶい聲で鳴く。いくら隱れてゐても、聲を立てればそのありかがわかるのに、生れつき暗愚なのか、また鳴かずに居られないのか、鳴く。そして、たれかが近づく氣配がすると、あわてて逃げだす。さういふ風に、暗いところばかりに居て、臆病に逃げ廻ることを仕事にしてゐるので、その姿を明瞭に見たものがない。ただ、咄嗟に見た印象で、變てこな形のものであることだけはわかる。紫川の河童たちの間では、この怪しい闖入者が問題になり、時節柄、棄ておけないと云ふことになつた。

そのとき、遂に捕へられたものははげしい聲で鳴きわめいた。彼のながす涙は水中に二本の青い帶をながしたやうに、下流の方へのびていつた。龜にも似た身體に、棕櫚のやうに長い毛をはやし、蛙のやうに臍のない褐色の腹をあふむけにして、短い手足をばたばたさせた。嘴は信天翁(あはうどり)に似、眼は深い毛にかくれて、どこにあるかわからなかつた。しかし、それがやはり河童にちがひないことだけは、頭に皿のあることによつて理解できたのである。

やがて、謎がとけた。これらの怪しい恰好の河童たちは、どこか、遠い南の方から移住して來たのであつた。それは、南の方ではげしい戰爭が始まつて、身邊が危險になつて來たからである。彼等は安全地帶をもとめて右往左往し、つひに、この邊の川や沼に落ちついた。移住の途中でも、あるものは彈丸や爆彈にあたつて死に、あるものはあわてふためいて戰車に衝突してたふれた。長い恐しい旅であつた。彼等はまつたく一身の安全のために平穩の地を求めてやつて來たのであつて、なんら他意はなかつたのである。

紫川の河童たちはこの寄るべない南方の河童たちを輕蔑した。同情するやうになつたのは、ずつと後のことである。輕蔑したのはその勇氣のなさと、自分のことより外にはなにも考へない態度に對してである。彼等も南方の國に棲んでゐたものであれば、何故、南方の國のために闘はないのか。その土地と運命をともにしないか。さう考へたのだ。しかし、よく考へてみると、彼等が闘つて殉ずべき國を持つてゐなかつたことがわかつた。彼等が生れ育つたところは、彼等が祖先となんの關係もない者によつて犯されてゐる。遠くから來た皮膚の白い人間たちが、暴力と金力とをもつて、南方の島々を自由にしてゐたのだ。いかに河童が暗愚とはいへ、それらの者のために闘ふことができようか。さう聞けばさうである。はじめ輕蔑した紫川の河童たちも、のちにはさう思ふやうになつた。

ところが、この氣の毒な遠來の河童たちの態度は、紫川の河童たちの考へが變つてからも、す

こしも變ることがなかつた。相かはらず陽の透さぬ場所にひそみ、癖になつたやうに鈍い聲で鳴き、ちよつとの物音にも逃げだしてゆく。これが紫川の河童たちが笑つてゐたわけである。

やがて、話しつかれた河童たちがその淀みの淵から出て、別れてゆくと、陽のあかるい水面を多くの鈍銀色の水紋が、風にふき散らされる花びらのやうに、散つていつた。

魚眼記

だいぶん風があるやうですが、わたしの聲が聞きとれますか。わたしはあまり大きな聲を出すことはこのまないので、どうぞもつと近くに寄つて下さい。そこの石には錢苔（ぜにごけ）がたくさんくつついてゐますから、用心をしないと着物が穢れます。この椎の實でも嚙（かじ）りながら聞いて下さい。月の出にはまだすこし間がありませう。

わたしが昔この里に住んでゐた頃、やつぱりこの大きな椎の木がこの庭に立つてゐて、枝がはびこり、鬱蒼と葉が茂り、椎の實の熟（な）る時分、風のある日を選んでこの樹の下に來ると、雨の降るやうな音を立てて椎の實が無數に落ちて來たものでした。子供であつたわたしは竹の竿を持つて行つて椎の實を落すことを考へつきましたが、わたしのその計畫を母が顏色を變へて怒り、折角わたしが氣味の惡い思ひをして淋しい裏山の竹藪から切つて來て拵へた竿を、父がほとんど五寸おき位に微塵にへし折つてしまひました。一節づつ碎かれて行く靑竹の音を聞きながら、小さいわたしは悲しみで胸がいつぱいになりましたが、無口な父母はただ怒つただけでわたしにその理由を聞かせてくれませんでした。夕方になると、向ふの地藏山の巔邊（てつぺん）の峰の間から眞横（まよこ）にさし

かけて來る太陽の光りのために、數知れぬ椎の實は蓊鬱と繁茂した梢の間から無數の寶石のごとくきらきらと光ります。その美しい椎の實を得るためにはいつとも知れぬ風の日を待たなくてはならぬといふことは、なんといふ頼りないことでありましたらう。しかし、わたしはある日、もう壽齡をずつと昔に越えて今は自分も人もその年を覺えてゐることが出來なくなつてゐたわたしの曾祖母から、椎の木についての言ひ傳へを聞かされたのです。その椎の木には古くから河童が棲んでゐるといふのです。さうしてこの椎の木に熟る無數の椎の實はこの樹の持主である河童の食餌であつて、その椎の實を取るものは河童の怨みを買ふことがある、ただ風の日に吹かれて落ちる椎の實が河童の食膳から除かれてしまふけれども、やつぱりその地上に落ちた椎の實すらも心ある人はこれを拾はうとはしないのだ、といふのです。それを話しながら曾祖母はがくがくと齒のない口を袋のやうに開けたり閉ぢたりしながら、その椎の木を見るのももつたいないといふやうに、それだけの話をする間中、ただ最初にちらと一瞥しただけでその後は一度も樹の方を振りむかうとしませんでした。その話を聞くとすぐにわたしはそつと土藏の中に入りました。生意氣な小さいわたしは科學者のやうにその曾祖母のをかしな話を信用せず、古い傳說が曲りくねつた平假名やけばけばしい色彩の江戸繪などで書きあらはされたたくさんの古ぼけた書物が土藏の長櫃の中に藏つてあつたことを思ひ出し、曾祖母の學說をくつがへすやうな反證を得るために土藏の階段を登つたわけでありました。黴(かび)くささと根太(ねだ)のゆるんだ天井裏の板の間に辟易しながら

も、わたしは丹念に數千卷の古書を繙きました。するとわたしは次第に曲りくねつた平假名の字や原色あざやかな江戸繪の世界に惹きこまれ、やがて表が暗くなつて來て、わたしが掌にのせてゐる寫本の大きな文字も判讀し難くなつた時、わたしは曾祖母(おんばあ)ちやんは嘘つきではなかつたと思はず歎息を洩らしたのでありました。さうして太い鋼鐵の鎖格子も見わけがたくなつた鎧窓の方を見た時に、ほんたうはそんなに太陽が落ちてゐたわけではなく、鎧窓のすぐ際に椎の木があつて、その密生した葉のために窓が蔽はれてゐたことを知りましたが、その時わたしは椎の木が少しの風にざわめき幾つかの椎の實がぱらぱらと落ちる音を聞いて、逃げるやうに蟲の食つて撓む土藏の梯子段を降りたのです。

わたしは或る日近くの町に行つて魚を求めて來ました。そのやうな祕密な計畫を家の者に覺られないやうに注意しながら、貰ふたびに蓄めておいた小遣錢をそつと土壺の貯金箱を割つて取り出し、市場に行つたのです。わたしの家は相當の舊家で、女中も何人も居ることなのに、市場に魚を買ひに行つたわたしを市場の人たちははじめは不思議さうにして居りました。しかしわたしが學校で圖畫の寫生に使ふのに自分の好きな魚を自分で買ひに來たのだといつたので、はじめて市場の人も納得し、そこにあつたたくさんの魚のうちで一番美しい鱗の剝げてゐないめばるを選んでくれました。買つて來た魚をわたしは小さい竹籠に入れて紐をつけ、椎の木のわたしが背のとどく枝の一番高い枝に吊しました。わたしは土藏の中の文獻によつて得た知識によつて、河童

といふものが概ね水中に棲むものではあるが、何かのために樹木に棲息するやうになつても、生理的に木の實よりも魚類の方を好むに違ひないといふことを信じたからです。わたしが魚を河童に進呈したことを曾祖母が見つけましたが、わたしの頭を撫でて笑ひながら、昔自分たちの小さい時分にはよく河童が出て來て自分たちと遊んだものだが、今はもう居るかどうかねえ、といひました。曾祖母の小さい時にはよく線香遊びといふことをやつたさうです。この椎の木の下の水たまりに火をつけた線香を立てる。それから十間ばかり離れてこちらから、河童さん河童さん出ておいで、と聲を揃へて呼ぶ。するとその線香の火がふつと見えなくなる。それは河童が兩手で火を包んでしまふからだ。それからまた、河童さん河童さんお歸りよ、といふ。すると今まで見えなかつた線香の火がまたぱつと赤く見えて來る。河童が兩手を開けるからだ。曾祖母はそんな話をしましたが、最後に今はそんな遊びを誰も忘れてしまつて、果して河童が今でも居るものやら居ないものやら自分も知らないといふのでした。翌る朝になつてわたしはまた背伸びをしながらその魚籠を下してみました。その籠の中には昨日入れておいた魚の姿はなく、ただ底の方に硝子の玉のやうに二つの眼玉だけが殘されて居りました。もう河童がこの椎の木に今もなほ居るといふことは疑ふ餘地がありません。さうして父母が血相を變へてわたしが竹竿で椎の實を叩き落さうとしたことを咎めたことの意味がはじめてはつきりと諒解されました。それからわたしは毎日のごとく市場に通ひ魚を買つて來ては椎の木の梢に吊しました。魚は或る時は鰯になり鱸になりひ、こぜになり小鯛になり鯉になり茅渟鯛になり鯖になり秋刀魚になりました。さうしてわたしが籠を下してみるたびに必ず魚の眼玉だけが食ひ殘されて居りました。河童が魚の眼玉が嫌ひであることは私が黴くさい土藏の中で得た知識と全く一致して居りました。

さあ、椎の實をたくさんおあがりなさい。甘くて齒にあたらず嚙みわるとよい音がするでせう。こんなおいしい椎の實はよそでは食べられませんよ。風が出たせゐかいくらでも椎の實が落ちて來ます。

さて、もう秋もかなり深く風なども時折りは膚に冷たく感ぜられるやうになつた頃の或る夜、わたしは深い眠りに落ちてゐたのですが、ふと誰かわたしを呼ぶ者があるやうな氣がして眼を醒ましました。天井には薄暗い電燈が點り、寢る前に枕元にひろげたままにしてあつた小學校の讀本があるほかには、別に誰もゐる樣子はありません。外にはいろいろな秋の蟲の鳴いてゐる聲がします。わたしはなにか思ひ違ひであつたと思つて、ふたたび寢床の中にもぐりこみますと、また確かにわたしの名を呼ぶものがあります。それがどうも家の中ではないやうに思ひましたので、何氣なく開き窓の方を見ますと、竹のつつかい棒で屋根のやうに半分開けた窓の向ふに誰かがゐるのがわかりました。外は月が明るく煙つたやうな月光の中に、頭を振りみだした妙に口の尖つたものがゐて、小首を振りながら、小さく皿をたたくやうな聲を立てて何かいひ、しきりに手まねきをしてゐるのです。わたしはすぐにそれが椎の木に棲んでゐる河童であることがわかりまし

たので、着物を着なほし帶を締めてその開き窓の方にゆきました。河童はわたしを見ると身體ごとお辭儀をするやうに二三度屈みましたが、皿をたたくやうなからんからんした聲で、日頃から度々魚の御馳走になることの禮を述べ、今宵は月もよいし海の方に出てみたいと思ふのだが、いつしよに行きませんか、といふのでした。なんによらず河童の申し出を斷るとよいことがないといふことをわたしは知つてゐましたし、それでなくともわたしは河童の勸誘をうれしく思ひましたので、それはたいへん愉快なことだといひますと、河童はそれではわたしがおんぶして行つてあげますからこの開き窓の閾にお上んなさいといひます。小さいわたしはその高い窓に上ることが出來ませんので、襖を開けて脚達を出し、窓の下まで引きずつて來て、やつとのことで開き窓の閾に乘ることが出來ました。さあといつて河童が向ふをむきましたので、わたしは背中に負ぶさりました。河童は見たところそんなに大きくはなく、どちらかといふと子供のやうに小柄であつたので、わたしは果して子供としては大柄であつたわたしを河童が負へるだらうかと危ぶんでゐたのですが、わたしが負ぶさつても河童は別に重さうにはせず、それどころではなく、まるで背中に乘つた瞬間に突然わたしの身體の重量といふものがすつかり消えてなくなつてしまつたやうに、河童は樂々として居るのでした。今夜は海岸に出て海をわたり島まで行つて見ませう。まあこれでも嚙りながらついておいでなさい、と河童はいつて、わたしの掌にひと摑みの椎の實をのせて月光の中を歩きだしました。歩くといひますが、足が地についてゐるものやらゐないもの

やら背中のわたしにはわかりません。それよりもわたしは河童の背中の甲羅がわたしの身體の蕊にまでも傳はつて來るやうなきびしい冷たさで、その上生ぐさい臭氣のある青黑い苔のやうなもので一面に掩はれ、うつかり手をゆるめるとずるりと辷り落ちてしまひさうなのに閉口しながらも、月光の中にあらはれる景色にうつとりとなつて、無意識のやうに椎の實を嚙つてゐたのです。河童はなんにもいはずに進んでゆきます。野をわたり川をすぎ丘を越えてゆくうちに、煙のやうに霞む竹林が爽やかに鳴つてゐる音を聞き、空には月光を受けた雲がちぎれながら走るのを見、やがて白絹のやうに光る海濱に出ました。河童は汀にうちよせて飛沫をあげてゐる波の中にどんどん入つてゆきましたが、やがて渚の音も後の方に遠ざかり沖へ沖へと出て行きます。河童は海の上を歩いてゐるのですが、足はいくらか水の中に入つてゐるのか時々下の方で水を切るかすかな音がします。月に霞む水平線にぽつんと一つの島が見えますが、そこまでが今夜の旅の行程のやうです。海上を渡る風がさはやかに頰をなぶり、なんともいへずよい氣持です。河童はときどき突然のやうに身體を蹋めます。そのたびにわたしは落ちさうになつて慌てて河童の肩をしつかりと摑みますが、河童は進んでゆくうちに水面近くを泳いでゐる魚を見つけるとそれを捕へるために蹋むのでした。時には捕へ損じて皿をはじくやうなぺちぺちといふ舌打を洩しますが、概ねはうまく捕へそのまますぐにむしやむしやと食べてしまひます。やはりわたしが信じたやうに河童といふものは椎の實のやうな植物よりも生臭い魚類の方が比較にならぬほど好きなのです。河

童は魚を頭から尾から骨まで殘らず丹念に食べてしまふのですが、眼玉だけは棄ててゆきます。とぽんとぽんと眼玉の落ちる音が波の上でします。わたしは曾祖母から聞いた話を思ひだしました。昔古い頃の漁師は海上に魚の眼玉が浮いてゐるのを見ると、それは河童が魚をとつた場所であることを知つてゐて、早速そこの附近に網を入れると必ず大漁があつたといふことでした。星が降り落ちるやうに輝いてゐることが周圍にはなにもない迥かな海原に出て來た時に珍しいもののやうにわたしの眼にうつりました。こんなにも天に多くの星があるといふことをわたしはそれまで知らなかつたのです。水平線の上の島影がだんだんせり出して來るやうに大きくなつて來ます。河童は相かはらずなんにもいはず、まるでわたしが背中にゐるといふことを忘れてしまひでもしたやうに、一心に魚を捕へることに熱中して、時々わたしを駭かせては身體を曲げて魚を捕へ、これを食べて眼玉をすてながら波の上をゆきます。

ところが次第にわたしは困惑の頂上に達して來ました。はじめのたのしさはもはやすつかりなくなつて、わたしはほとんど色青ざめて來ました。それはわたしの腹の中が妙に張つて來るとともに、わたしは迂濶にもそれまで忘却してゐた嚴しい傳說の掟に愕然として氣づいたのです。それは河童がなによりも人間の放屁が嫌ひであるといふことでした。それはわたしには嘗ては笑ひだしたいやうな剽逸な傳說でしたが、今この海上に來て河童の背の上で現實となつてあらはれて來た時に、わたしはほとんど膚に粟を生じ心は冷え切る思ひでありました。無意識のやうに口に

含んでは嚙んだ椎の實がわたしの腹の中で次第に瓦斯を釀成しはじめたことにわたしはやつと気づいたのです。この時にならねばこの恐るべき掟を想起しなかつたとは、なんといふ迂愚なことでありましたらう。河童はいかにも親しくして居るものであつても、ひとたび放屁の音を聞く時には最大の冷酷の仕打をするといふことは、わたしは充分に知つてゐたのです。わたしが今ここで放屁をすれば河童は怒つてたちまちわたしを海中に放棄して顧みないことは火を見るよりも明らかであります。わたしは腹を押へ、いかにしても島まで我慢しなくてはならぬと思ひました。河童はそんなことは無論氣づく筈もなく、しづかな水かきの音を立て相かはらず魚を捕へるために屈伸しながら月光に光る海上を進んでゆきます。しかしながら人間の身體の生理はいかなる運命を誘致するとも避けがたいものでありませうか。わたしはもはや齒を喰ひしばり色青ざめて我慢して居つたにもかかはらず、もうあまり遠くないと思はれる沖の島が眼前に大きくあらはれて來た時に、遂に最後の忍耐を失ひました。わたしは腹をしつかりと押へ、月と星との光る天を仰いで涙をたらし、父母と曾祖母との名を呼び、遂に全く自分の意志がそこになかつたにもかかはらず放屁をしてしまひました。河童はふと立ち止り、ちらとわたしの方を振りかへりましたが、その時わたしはもう河童の背中から振ひ落され、海中深く人事不省になつて沈んで行つたのです。

氣がついた時にわたしは足にうすい水かきが出來てゐることを知り、噎せるやうな強い椎の實の匂ひにおどろくと同時に、わたしはまつくらなわたしの周圍で驟雨のやうにはげしい音を立て

て椎の實の落ちる音を聞きました。
さあ月が出て來たやうです。これから沖の島に遊びにゆきませう。椎の實をだいぶ食べましたね。殘りは持つて行つた方がよろしいでせう。わたしの背中に摑まんなさい。しつかり摑まつてゐないとわたしの背中の甲羅はずるずるしてゐるから辷りますよ。

十三夜

一、家の外

もしもし、誰もゐませんか。ちよつと起きてくれませんか。誰もゐないのですか。……困つたな。どうも、誰かゐるやうに思はれるのだがなあ。さつき、話し聲や物音がしたやうに思つたのだが、行きには點いてゐた灯も消えてしまつてゐる。寢てしまつたのかな？　……

もしもし、もしもし、留守なのですか。……返事がない。……すつかり、ぐるりは戸じまりがしてあるし、すき間はあるが中はまつ暗なので、なにもわからない。狐や狸のやうに、どんな小さな穴からでも風のやうに忍びこむことはできないし、はて、どうしたものかな。もう一ぺん引つかへして、探してみようかしら。……だが、もう足がしびれるくらゐ。さうだ、三十ぺん以上も往復したのだから、いくら俺の眼がわるいといつたつて、こんな明るい月の晩に、見そこなふ筈はない。やつぱり、この家の人間が拾つたものにちがひない。この往還にはこの家だけしかないのだし、時間からいつても、誰も通らなかつたのだから、さうとしか考へやうがない。この家にはたしか、四十くらゐの樵夫（きこり）夫婦と、六つか七つの女の子が一人ゐたやうに思つたのだが、……

もしもし、聞えないのですか。すみませんが、ちよつと起きてくれませんか。ちよつとおたづねしたいことがあるのですが、……わたくしはこの山の水天宮の池にゐる河童です。あなたがたもわたくしのことは聞いたことがあると思ひます。なにもいたづらをしようの、危害を加へようのといふのではありません。ほんとに困つてゐるので、おたづねやら、お願ひやらにまかりでたものです。

わたくしは、今夜、この麓の目痛川（めいたがは）の溜でひらかれた仲間の集會に行つたのです。十三夜の月の晩に、毎月もよほされる例會なのですが、今夜もたそがれどきから、この地方一帯の仲間が百匹ちかくも集つたのです。なぜ十三夜の晩にかぎつて集まるやうになつたかといふことは、實はわたしもよくは知りません。なんでも、昔、やはり水天宮の池にゐましたわたくしの祖先が、どうしたはずみか、崖のうへから落ちて皿を割る事件が起つたことがあるさうです。河童にとつて頭の皿ほど大切なものはなく、水分が減つてさへも氣力が衰へて病になることがあるのですから、皿が割れることは、生命にかかはるやうな大事でありまして、ただちに附近の仲間たちが召集されることになりました。何故なら、わたくしの祖先は、若いころ、筑後川にゐます河童の頭目九千坊の膝下にゐまして、直接の薫陶をうけ、且つは阿蘇の那羅延坊の覺えもめでたい出色の者であつたために、ここに來ましてからは、由緒ある水天宮の宮附として、ここらあたりの河童の見かじめをしてをりましたので、臨終にあたつて、いひ殘さねばならぬことがあつたからです。

そのときもわたくしの祖先の遺言は十六箇條にわたる綿密なもので、河童の生きてゆく根本の精神について、生活の方法について、あるひは、眞實について、歴史について、藝術について、科學について、戀愛について、道德について、さまざまの示唆にあふれた格言に滿ちて居りましたが、それらの言葉も精神も、いまは朦朧としたものになつたやうに思はれます。あきらかに文學に書きしるされて殘つてゐるにもかかはらず、勝手な解釋を加へたり、故意に歪曲したり、自分に都合のわるい部分はかへりみず、都合のよいところのみをとりあげたり、或ひは全的に信奉するものがあるかと思ふと、全然否定するものがあり、まつたくそんなもののあることすら知らないものさへあるやうになつたからです。これこそは古典の持つ運命かも知れませんが、いまの世に生きるものたちの輕薄さを裏書きしてゐると思ひ、わたくしは、ときどき、もう古ぼけて苔の蒸した祖先の遺訓をとりだしては涙する日もあるわけです。わたくしはこれでも水天宮の池を繼承した名門の裔（すゑ）なのでありますが、その祖先が死の床で同族を召集して教へを垂れたのが十三夜の月の晩であつたとかいふことで、それ以來、この夜が、今日まで、仲間の月例集會の日となつたといひ傳へられてゐます。しかしながら、いまはその夜の持つてゐた嚴肅な意義といふものはまつたく忘れられて、ただ、習慣に過ぎなくなり、集會の席での話といへば、ほとんど、祖先の精神とは似ても似つかぬ、低俗で、賤しく、且つは、愚劣で、卑猥な話ばかりなのであります。ときには、聞くに足る話も出ますが、それはまるで問題にされず、多數を占める現世的な俗論が

壓倒してしまつて、集會はいつでも、猥雜な笑ひで終つてしまふことが多いのであります。
今夜など、わたくしは仲間たちからさんざんに嘲笑されて、ほとんど憤りと悲しみとで息がとまらんばかりの思ひをしました。順當にいけば、もともと名門の末であるわたくしがこの地方の見かじめをしなくてはならぬのでありますが、生れつき氣の弱い、ひとをやつつけたり、おとしいれたり、ごまかして自分だけよいことをしたりするやうな政治的手腕にまつたく缺けてゐるわたくしには、さまざまの性向を持つた百匹ものの部下を統御してゆく能力はとてもありませんので、いまは、わたくしの伯父にあたる鎭守の河童に、その代役を賴んであるのです。
この伯父は恰幅も立派で、押しだしでまづひとを壓するのですが、また鼻孔の太いのと、聲の大きいのとで、仲間うちで重きをなして居りました。その伯父から、わたくしは今夜ひどい侮辱を受けました。わたくしが見かじめ役をたれか親戚のものに代つてもらひたいといふことを申し出たときには、この伯父は毎夜のごとく、水天宮の池へ、いろいろわたくしの好きさうな土產ものなどをしつらへて、やつて參りまして、猫なで聲をだして、頭をぺこぺこ下げ、自分を代役に指名してくれと、哀願したものです。權力に對する魅力はたれも押へがたいものがあるとみえます。そのほかの親類のなかにもわたくしの小庵をおとづれるものがありましたけれども、その伯父のやうに執拗で卑屈なものはありませんでした。わたくしは權力などにはすこしも未練はありませんでしたから、もつけの幸ひとして、この伯父に代役を指名したのです。うるさいと同時に、

またなにか脅迫めいたものを感じて怖くもなつたからです。その伯父は正式にその役に就任しますと、態度はがらりと一變して、横暴のかぎりをつくすやうになりました。
伯父は、今夜、仲間たちの面前で、わたくしを仲間の面よごしだといつて罵倒しました。……恥しい話ですが、わたくしはこの半月ほど前に、結婚をしまして、……いや、それが、その結婚といふのが、實は問題となつたのですが、……さあ、どういつたらいいか、わたくしは立派な結婚だと思つてゐるのに、伯父はそれを結婚ではないといふのです。さういへば、べつにことごとしく親戚にひろめもせず、身内にも知らないものもゐるくらゐでしたから、その點はわたくしにも落度があつたのかも知れませんが、相談をすれば反對するにきまつてゐますし、……といふのが、白狀しなければわからないのですけれども、わたくしはすこし前から、ひとりの娘の河童と知りあひになつてゐまして、そして決心をして、たれにも無斷で、その娘と結婚してしまつたわけです。二人の愛情の純粹さと清さについてはたれに憚かるところもなかつたし、戀愛の眞實と自由とについては、祖先の憲章にいささかも悖らない確信も持つてゐたからです。それ故に、水天宮の池底のわたくしの新婚の家庭はまことにささやかではありますが、幸福に滿ちたものであつたのです。
ところが、そのことを伯父にいはせますと、もつてのほかの氣ちがひ沙汰で、名門の榮譽を冒瀆し、德義を無視した青年の客氣にすぎない、素性もさだかでない女を神聖な水天宮の棲家にひ

きいれるのは神をおそれぬ危險思想である。且つは、親戚一統の承認を經ないのは正式の結婚とは認められず、單なる野合にすぎないといふことになるのです。さうして、伯父は滿座のなかで、例の大聲を發し、巨大な鼻孔をぶうぶう鳴らし、さういふ淫蕩なる不良青年を仲間から出したのは心外であるから、その女をただちに離別するか、自分がこの土地から退去するか、どちらかを選べと、くりかへしくりかへし、わたくしを面詰するのでした。座中にはなだめるものもありましたが、伯父の權幕に辟易し沈默し、多くの仲間は伯父に阿諛して、ともどもにわたくしを嘲笑するのでした。

わたくしは座にゐたたまれなくなつて、目痛川の溜をとびだしました。わたくしの背後でどつと笑ひ聲がおこりましたが、わたくしはもう憤りでぶるぶる顫へながら、まつすぐに水天宮の池へ急ぎました。十三夜の月が畫間のやうに明るい道を急ぎながら、嘗て、この十三夜の月の晩、祖先が死の嚴肅のなかにあつて遺した教訓が、このやうにも完全に忘れ去られてゐることにおどろき、憤りのなかにはてもない悲しみとさびしさがわいて來ました。さうして、複雜な感慨にひたりながら、ただ、池底で待つてゐる新妻のことを考へ、なにはおいても彼女に會ふことによつて一切が償はれるのだと、ほとんど走るやうに、道を急いだのです。……ああ、そのわたくしの興奮が、つひに、わたくしに途方もない災ひをもたらしたのです。

もしもし、聞いてゐますか。

わたくしはほとんど混亂してゐたために、大變な失策をいたしました。どこかに、池へかへる鍵を落してしまつたのです。わたくしたちには傳說のきびしい掟があります。その掟はつねにわたくしたちの生命であり、宿命の規律であり、なにものをもつてしても犯すことができません。水天宮の池底にかへるためには、わたくしはその鍵を持つてゐなくてはならないのです。いつも腰の袋に入れてゐて、落すなどといふことはないわけなのですが、きつと、興奮して急ぎすぎたために、知らぬ間にとびでたものと思はれます。形はただ丸い平凡な小石で、わたくしには絕對になくてはならぬものですが、……あなたがた人間にはなんの役にも立たぬものです。もし、あなたがたが拾つて居られるものなら、返して下さいませんか。どんなお禮でもいたします。

わたくしは鍵を落したことを知ると、氣も動顚せんばかりでした。それでも、この明るい月夜ですから、まもなく見つからうと、この往還を必死で探しました。そして、たうとう、三十ぺん以上も往復し、へとへとになりました。足もしびれてしまひました。いくらわたくしの眼が惡くても、こんなに明るいのですから、あれば見つからぬわけはありません。ないのです。この道には落ちてゐないのです。いや、一度は落ちたかも知れないが、誰かが拾つたのです。さうにちがひありません。さうとすれば、あなたがたよりほかにはありません。わたくしは血眼で道ばかり探してゐたので、あまりよくは氣づきませんでしたが、ともかく、麓から池までの間には、この家一軒しかありません。はじめは戸もあいてゐたし、灯もともつてゐたやうに思ひます。誰かゐ

る氣配も感じました。それが、いまはすつかり戸じまりができ、灯も消えてゐます。家のなかは眞暗になつてゐますが、きつと、皆さんが居られるとわたくしは信じてゐます。

もしもし、もうおやすみですか。ちよつと起きてくれませんか。さうして、戸をあけて下さいませんか。けつして、いたづらをしたり危害を加へようといふのではありません。それどころか、わたくしは命がけなのです。こんなに困つたことははじめてです。もし、その石を拾つて居られるなら、……いや、きつと拾つて居られると思ひますから、わたくしに返して下さいませんでせうか。さつきもいふとほり、わたくしにはなくてはならぬものでありますが、あなたがたには用もないものです。どんな御恩返しでもいたします。

ああ、かうしてゐる間にも、氣がせきます。實は伯父がわたくしの妻に邪(よこしま)な懸想をしてゐたことを、わたくしはよく知つてゐるのです。その石の鍵がなければわたくしは池にかへることができません。妻は池から出ることもできません。つまり、わたくしたちは二度と會ふことができなくなるのです。ああ、もう、彼女にこれきり會へないなんて、……さうして池にかへれないなんて、……伯父が、伯父がひよつとしたら、今ごろは、水天宮の池に行つて、……もしもし、もしもし、お願ひです。お願ひします。石の鍵を返して下さい。どうぞ、お返し下さい。……もし、もし、……もし、もし、……、

をかしいな。いくらいつても返事がない。やつぱり、誰もゐないのだらうか。きつと居ると思

つたのだが、……困つたなあ。……實直さうな樵夫の夫婦だし、居れば、さうして事情を聞けばかならず返してくれると思ふのだが、……もし、鍵がなかつたら、どうなるんだ。池にかへれない。彼女に會へない。伯父が、……畜生、どうしたらいいんだ、絶望だ。……

もしもし、もしもし、もしもし、もしもし、……お願ひです。あけて下さい。鍵を返して下さい。……

やつぱり、誰もゐないのだ。……仕方がない。月も傾いたが、もうすこし探してみよう。月が落ちたら、なにもわからなくなる。まだ、探し足りないのだらう。なにしろ、石が小さなものなんだから、……

二、家の中

「どうやら行つてしまつたらしいな。なにか、永いこと、くどくど喋舌つとつたねえ」

「なにをいつてゐたの、あなた、風のやうにざわざわいつてるばかりで、あたしにはよくわからなかつたけど」

「俺にもよくわからんが、なあに、河童などのいふことが、なにかわかるもんか。うつかり口車にでも乘つたら大變だよ、相手にならず默つてりやいいんだ。また、くるかも知れんから、返事をするんぢやないよ」

「はい」
「お前、面白いものを拾つたのう」
「父ちやん、これ、なあに？」
「きつと、河童の丸子石（まるこいし）だよ。父ちやんが死んだおつ母から聞いたことがある。子供のお前にやいらんものだから、父ちやんにくんな」
「いやん。あたい、折角ひろつたんだもの」
「そんなもの、なにするかい」
「なにつて、きれいな石だもの、風鈴に入れるか、簪の玉かにするわ」
「そんなことよりな、父ちやんにくんな。父ちやんがこれを持つて町に行くとな、よろこぶ人があるんだよ。死んだおつ母の話ぢやあ、河童の丸子石は喘息の妙薬だつていふことだつた。喘息でな、なほりにくい病氣だが、丸子石があつたら、どんなたちのわるい喘息でもすぐになほるんだ。父ちやんがいつも世話になる町の旦那がもう長いこと喘息で寢てござる。旦那にや恩になつてゐるから、なにかで恩返ししなくちやと思つてゐたが、貧乏ぐらしでなんにもできなかつた。これは天のお助けだ。夜があけたら、すぐに旦那のところへ、これを持つて行かう。すりつぶして、味噌汁に入れて飲めばいいんだよ」
「飲んでしまふの」

「うん、さうしたら、二三日もしたら、すつたり喘息がなほつてしまふんだ。旦那よろこぶだらうな」
「そんなら、惜しいけど、父ちやんにあげるわ」
「よしよし、いい子だ。そのかはり、父ちやんが町で、美しい風鈴に、玉簪を買つてやるよ。一緒に町に行かうな」
「うれしいわ」
「あなた、あれ、なに？」
「お、河童の足音だ。また引つかへして來やがつたな。……近づいて來る。ものをいふな。音を立てちやいかんぞ。なにをいつても默つてるんだ。いいな。……そら、もう、表に來た。しいつ、なにをいつても、返事するな」

皿

河童は立ちすくんだ。背の甲羅がひきしめられて枯葉のように軋み、膝小僧が金屬板のやうに鳴る。自分の眼がつりあがつてゆくのが自分でもわかる。こんなおそろしいものを見たことがない。

苔のついたしめつた石垣が上部からの光線に、圓筒形に鈍く光つてゐる。昔はまんまんと水がたたへられてゐたのであらうが、今はほとんど乾いてしまつて、古井戸の底にはわづかに點々と水たまりがあるきりだ。その水も腐つて青いどろどろの糊になつてゐる。しかし、路上の馬の足あとにたまつた水たまりにさへ三千匹も棲息することのできる河童は、かういふ腐水であつても、水分さへあれば姿をかくすに充分だ。相手に氣づかれずにどんな觀察でもすることができる。河童をこんなにおどろかせたのは、一人のうら若い女性であつた。

黄昏、河童はさわやかに吹く春風のこころよさに、浮かれ心地で山の沼を出て散策してゐると、一匹の蛙を見つけた。冬眠からさめて地上に這ひ出たばかりらしく、まだ充分に手足の運動ができない樣子で、きよとんとした顔つきで置物のやうに柳の木の根もとにうづくまつてゐた。河童

は食慾をかんじてその蛙をつかもうとした。すると意外にも蛙は跳躍したのである。自由がきかないと思ひこんで、油斷をしてゐたので逃がした。蛙はかたはらにあつた古井戸のなかに飛びこんだ。河童もすぐ彼を追つた。そして、河童は蛙どころではなくなつたのである。

暗黑の井戸の底に、その娘の姿だけぼうと浮きあがつてゐる。年のころは十八九であらうか。頭髪はみだれ、そのほつれ毛が顔中にたれさがつてゐるが、その頭の結びかたは當節では見られない古風なものだ。河童はまだ城があり、御殿があり、そこに大名やたくさんの腰元のゐた時代のことを思ひだした。さういへばその顔形も古典的で、このごろ銀座などを横行濶歩してゐるパンパン・ガールのやうな文明的な顔形とはおよそ對蹠的である。衣裳も振袖だし、窮屈さうな幅びろい帶はうしろで太鼓にむすばれ、古足袋のこはぜはまだ錆びてゐず、金色に光つてゐる。一口にいへば、繪草紙から拔けでて來たやうな女だ。しかし、その瓜實顔のととのつた顔は嫩葉いろに青ざめてゐて、唇は葡萄色をしてゐる。

（幽靈だ）

河童にはそのことはすぐわかつた。しかし、河童が恐怖に立ちすくんだのは、彼女が亡靈であつたからではない。河童とて妖怪變化の一族であるから、幽靈くらゐにはおどろかない。おどろいたのはその亡靈の動作であつた。

若い女はしきりに皿の勘定をしてゐる。じめじめした古井戸の底にやや横坐りになつた娘は、

膝のまへに積みかさねられた幾枚かの皿を、なんどもなんども計算してゐるのである。女は一枚一枚を丁寧にかたはらへ移しながら、一枚ごとに數を讀む。

「一枚、……二枚、……三枚、……四枚。……」

その弱々しい低い聲が河童の心を冷えさせる。こんなにも陰鬱で消え入るやうな聲音といふものを聞いたことがない。それはただ弱弱しいだけではなくて、そのほかに含まれてゐる悲しみや恨みやがたしかに永劫のものであることを感じさせるやうな、絶望的なひびきを持つてゐる。その聲を聞いてゐるだけで奈落へでも引きこまれてゆくやうに氣が滅入る。

「五枚、……六枚、……七枚、……」

ゆつくりゆつくり一枚づつをたしかめながら讀んで行く聲は、七枚目あたりからなにかの期待と不安とにかすかに調子づくが、

「……八枚、……九枚」

九枚目でぽつんと切れると、まるでこれまで點つてゐたかすかな灯がふつと消えたやうな、終末的な表情が女の美しい顔を掩ひつくす。女は暗澹とした顔つきになつて、肩で大きなためいきをつく。うなだれる。唇を嚙む。涙をながす。すすり泣く。

「やつぱり、九枚しかないわ」

と呟く。

しかし、まもなく、きつと頭をあげ、意を決した希望のいろを青ざめた顔にただよはせて、また皿を數へはじめる。細く骨ばつた青蠟のやうな手で、直徑五寸ほどの皿は一枚づつもとの位置へ返される。

「一枚、……二枚、……三枚、……四枚、……五枚、……」

河童は皿が九枚あることを知つた。その模樣は九枚とも同じである。紅葉の林を數匹の鹿がさまよひ、清流にかけられた土橋のうへで、神仙のやうな老人が二人ならんで釣をしてゐる繪がかいてある。空に紫雲がたなびいてゐる。色どりはあざやかで、陶器の肌はつややかだ。しかし、そんな皿の美しさに氣をとられてゐるどころではない。

「九枚」

といふ最後の聲とともに、死に絶えるやうな女の失意の姿が河童をふるへあがらせ、ほとんど發狂しさうな恐怖へおとし入れる。河童の胸にいひやうもない女の孤獨が氷の鏝をあてるやうにしみわたつてきて、全身戰慄で硬直する。

亡靈は三尺とは離れてゐない自分のかたはらに、自分をのこるくまなく觀察している河童のゐることなど、氣づく樣子もない。いや彼女には皿の計算以外、いかなるものも關心をよばないもののやうだつた。さつき井戸のてつぺんから飛びこんだ蛙は、一度彼女の右肩にあたつて下に落ちたのだが、亡靈は眉ひとつ動かさなかつた。時代を經た古井戸には、蟲や、螢や、蝙蝠や、蛞

蝓や、蜘蛛や、蛭や、蜥蜴や、ゐもりや、蚯蚓など、いろいろな生物が同棲してゐて、ときどき出沒したり騷いだりもするのであつたが、なにひとつ彼女の注意を喚起するものはなかつた。天井のない井戸のうへからは、雨や雪が降りこみ、風が花びらや木の葉を散らしこんでゐることだらうが、恐らくさういふものも彼女から皿への執心を反らさせることはできないにちがひない。河童はこんなにも頑固一徹な情熱といふものを見たことも聞いたこともなく、このほとんど頑固といつてよい計算のくりかへしに、甲羅の破れる思ひを味はつたのであつた。

河童は女に話しかけたい衝動を感じた。沈默に耐へられなくなつた。それには好奇心も手つだつてゐたことは否定できないが、主としてあまりの息苦しさに負けたのである。

どろどろした青い糊の水をゆるがせて、河童は姿をあらはした。若い女も、あまりに唐突に、自分のすぐ横から異樣な形のものが出現したので、さすがにはつとした面持で、皿を數へる手を休めた。もつとも、河童は、女が九枚を數へ終つたときに名乘りをあげるだけの注意はしていた。この悲しみに打ちひしがれてゐる女を怒らせることを避けたのだ。河童の措置は適切であつた。河童が計算の途中で姿をあらはしたならば、女はおどろきで皿を取りおとし、幾枚か割つてゐたかも知れない。

「失禮しました」

無言で凝視する淑女にたいして、禮儀正しい河童は鄭重に頭を下げた。しかし、女は答へようとはせず、凝結したまま、ただ闖入者を見まもつてゐるだけである。冷たい眼である。狼狽した河童は追つかけられるやうに、どぎまぎしながら、

「いつたい、どうなさつたのですか」

と、とりとめのない質問をした。こんな問ひかたにはなにも答へられまい。河童もそれを知らなくはなかつたけれど、咄嗟には上等の言葉が出なかつた。冷汗が出てきた。

すると、思つたとほり、女はなほも無言で河童を睨みはじめた。最初のおどろきの表情は消え、女がしだいに不機嫌になつてゆくことがわかつた。河童はさらに狼狽した。そしてつまらない言葉を吐いた。

「わけを聞かせて下さいませんか」

今度返事がなかつたら、河童は窒息したかも知れない。しかし、幸なことに、女は口をひらいた。

「あたくしは悲しいのでございます」

さういつた聲の悲しさと、たつたそれだけでぽつんと切れた言葉の餘韻の恐しさとに、河童はもはや亡靈と對決してゐる忍耐をうしなひ、脫兎よりも早く、井戸の外へ飛びだした。

河童の俄勉强がはじまつた。

（歴史を知らなくてはならぬ）

河童は唐突な情熱をたぎらせて、古典を漁り、史書や、小説や、口碑や、傳承のたぐひを探つた。山の沼にゐる仲間たちは彼の奇妙な變化に氣づいて、そのわけを聞きたがつたが、彼はなにごとも語らなかつた。他の者であつたならば、古井戸の底で女に出あつたことを得意げに吹聽してまはつたかも知れないが、彼はこれを祕密にした。この經驗を自分のなにかの發見や生長に役立たせたいといふ氣持があり、謎は人の智慧を借りずに一人で解きたいといふ願ひもあつたからである。そして、いつか心の一隅で芽生えてゐるひとつの感情、彼はそれを意識はしても意味づけることに昏迷して、はじめのうち、それこそは人間を救ふ正義感のあらはれだと信じてゐた。祕密のこころよさや、誇りのやうなものさへ感じてゐた。

河童は大して時日を要せずして、謎を知ることができた。それは彼の熱心さに負ふところが大であつたことは勿論だが、それ以上に、この古井戸をめぐる怪談があまりにも有名な歴史的事件であつたためである。

（あの井戸の底の女は、お菊といふ名だ）

と、まつさきにそれを憶えた。そして、お菊が數へてゐる皿の數が九枚あつて、それを幾度となく計算してゐるのは、もとは十枚あつたからだといふことを知つた。お菊はその足りない一枚の皿のために殺されたのである。昔、德川時代、音川家に淺山鐵山といふ惡逆な執權があつて、

お家横領を企てた。鐵山は兄の將監と結託して着々と陰謀をすすめてゐたところ、ふとした機會にその祕密を腰元お菊に知られた。そこで、一策を案じ、音川家のまたなき家寶として大切にされてゐた色鍋島十枚揃ひの皿をお菊にあづけ、その一枚をこつそり隱したのである。お菊はたしかに十枚あつた皿がなん度數へても九枚しかないのに仰天した。

「一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚、……一枚、二枚、三枚、四枚、……」何十ぺん數へても、十枚はない。そして、鐵山に殺されて、井戸の中に投げこまれてしまつたが、お菊の怨靈はその時以來、井戸の底で皿の計算をつづけてゐるのであつた。そのときから、何十年、何百年と歳月がすぎたけれども、お菊の努力は撓むことがなく、今はからずも偶然の機會から、河童の知るところとなつたのである。時代の變遷は目まぐるしく、德川、明治、大正、昭和となつて、皿屋敷は跡かたもなくなり、荒野と化した一角に水も涸れてしまつた古井戸だけが殘つてゐるけれども、お菊の皿の計算だけは數百年間、一貫していささかも變ることがなかつたのであつた。

（なんといふ哀れな女だらう）

河童は一切を知ると、お菊の運命に涙がながれた。井戸の底では恐怖にをののいたが、事情がわかつてみると、幾千萬べん、幾億べん數へても、絶對に、十枚にはならない皿をお菊があきらめもせず數へてゐることの氣の毒さに、深い同情心がわいた。そして、河童は大決心をしたので

ある。

（お菊のために、皿を探しだしてやらう）

河童は俄然勉強をして唐突に歴史家となつたやうに、今度は突如として探偵に早變りした。

またも河童の活躍がはじまる。淺山鐵山が隱した一枚の皿はどこにあるであらうか。河童は捜索をはじめるまへに、その皿をあやまりなく認識するために、ふたたび、古井戸の底へ潛入した。

お菊に氣づかれぬやうに、水分のなかに隱れて、綿密に皿を調べた。

お菊の動作は前に見たときと寸分ちがつてゐない。青い顔にたれたほつれ毛や、葡萄色の唇や、痩せ細つた手や、消え入るやうに陰氣くさい聲や、絶望的なため息や、悲しげな眼や、頰をつたふ口惜し涙などはなにひとつ最初見たときと變らないけれども、河童の心の方は正反對になつてゐた。恐怖心は消え去り、いまは女をいぢらしく思ふ同情心が胸一杯だ。そして、早くお菊をこの悲しみと不幸とから解放してやりたい氣持で、すでに焦躁をおぼえてゐるのだつた。

（お菊を救ふ方法はたつた一つだ。なくなつた一枚の皿を探しだし、ここへ持つてきてやればよい）

そして、そのときのお菊のよろこびを考へると、自分までわくわくする思ひになつて、河童はどんな困難をも冒險をも恐れぬ勇氣が身内にわいてくるのであつた。たしかに、もはや河童はお菊を愛するやうになつてゐたといへる。彼が最初のとき、恐怖にをののきながらも逃走しなかつ

たことのなかに、その萌芽があつたといふべきであつた。彼がどろどろした青い糊の水のなかで、ふるへながらも、不氣味なお菊の動作をいつまでも見つめ、遂には聲をかけずには居られなかつたのも、愛情の最初の兆候といつてよい。お菊がお岩か累（かさね）かのやうに醜惡むざんの亡靈であつたならば、河童はその姿を瞥見しただけで逃げだしたであらう。河童を古井戸の底に釘づけにしたのはお菊の美しさに外ならなかつた。河童はここに淑女（レディ）のために犧牲をいとはぬ騎士（ナイト）となつたのである。

（きつと探しだしてみせる）

その成功の日の豫感は、河童をすばらしい幸福感で有頂天にさせた。

お菊が數を讀みながら移動させる皿を、河童は寫生した。同じ皿を探しだすためには見本が要（い）る。九枚とも同じであるし、お菊の動作も單調で緩慢なので、この色鍋島の皿をそつくりうつしとることはそんなに困難な仕事ではなかつた。おまけに、河童はそのスケッチが妙に樂しくてならなかつた。それが繪を描くことよりもお菊のそばにゐることの方に原因があることは、もはや彼にも明瞭に自覺された。河童はいつか模寫の手を休めて、うつとりとお菊に見とれてゐる自分に氣づく。はじめのときは奈落へ引きこまれるやうに陰慘にひびいたお菊の聲も、今は音樂のやうにこころよく鼓膜をくすぐるのであつた。

河童は心のなかで、お菊に聲をかける。

――お菊さん、もうすこしの辛抱ですよ。私があなたの欲しがつてゐる十枚目の皿を見つけてきてあげる。さうしたら、あなたはさういふ永遠に到達する可能性のない企圖や、馬鹿げた絶望の計算から解放されるんだ。何百年間もつづけてきた奴隷のやうな重勞働が停止されて、あなたは自由になるんだ。一週間とは待たせません。あと五日ほど御辛抱なさい。

一度はお菊にそのことを打ちあけてしまはうかと思つたが止めた。打ちあければ、お菊はよろこんで、いきいきと眼をかがやかし、

「ぜひお願ひしますわ。五日などといはず、三日のうちに、いや、今日中にでも……」

といふであらうが、河童はそんな目前の小さなよろこびを捨てた。よろこびは意外で突然であるほど大きい。皿を見つけだし、いきなりそれを持參した方が效果的だ。この忍耐もまた樂しいものといへなくはなかつた。

古井戸のなかに棲息してゐる鼠や、蟹や、蝙蝠や、蛞蝓や、蜘蛛や、蛭や、蜥蜴や、ゐもりや、蚯蚓などが、河童の作業を不審さうに見てゐた。けれども、だれ一人、聲をかける者はなかつた。彼等はこの狹い井戸のなかでおたがひに生きてゆくためには、爭ひをおこさないこと、他人へ無用なおせつかいをしないこと、自分の意見を述べないこと、沈默してゐるにかぎることなどを悟りきつてゐたので、河童の行動を不思議には思つても、これに容喙したり、まして妨害したりする者は一人もなかつた。

皿の模寫が終ると、河童は勇躍して井戸から出て行き、十枚目の皿の探索にとりかかつた。

「このごろ、すこし君は變だなあ」

これが仲間のうちでの定評である。原因不明の行動をしてゐる者は變に見える。正しい立派な理由があつても他人は理由などは問題にせず外部にあらはれた行動だけを批判する。祕密を一人だけの胸にをさめ、血眼になつて皿をさがし歩く河童は馬鹿のやうにも狂人のやうにも見えた。彼が獨身であつたのが不幸中の幸だ。女房がゐたらそはそはしてゐる彼はいくたびとなく折檻にあつたことであらう。しかし、內心に期するところのある河童は仲間のどんな惡評にも耐へ、今にみてゐろと考へてゐた。さらに、

(おれがどんなに美しい目的のために働いてゐるか、おまへたちのやうなうすよごれた精神の者たちにわかるものか)

昂然と胸を張つて、仲間たちの低級と無智とを嘲笑ひ、蔑んでさへゐたのである。

ところが、日が經つうちに、河童はすこしづつ狼狽し焦躁しはじめた。あてが外れたのである。皿の捜索は彼の考へてゐたやうな簡單なことではなかつた。意外の困難だ。三日、五日、一週間と經つても、ほんのちよつぴりした手がかりも得られない。またたく間に、十日間がむだにすぎた。

(お菊に打ちあけて、約束などしなくてよかつた)

河童は自信を喪失しかけると、今はせめてそのことだけでも氣休めであつた。
文獻のあらゆる頁に鋭い眼光をみなぎらせ、幾度も皿の行方をつきとめ得たと確信したのに、その場所に行つてみると、皿はないのだつた。河童は歴史の記述がいかにまちまちで當てにならぬものかを知つた。淺山鐵山が皿を隠したといふ點は一致してゐるが、その方法や場所にいたつては千差萬別に記錄されてゐる。まるで正反對に書かれてゐるのもある。十五日、二十日と經つてもなんの片鱗も發見することができないので、河童は出たらめな記錄をしたりげな筆致で書いてゐる歴史家や作家にはげしい憤りをおぼえた。しかし、彼が今ごろになつていかに切齒扼腕してみたところで、問題はすこしも解決しないし進展もしない。
二十五日、三十日と徒勞の日がすぎると、河童はへとへとに疲れた。食慾もなくなつて痩せ細り、見るかげもなく憔悴してしまつて、彼の方が亡靈に近くなつた。古井戸の底にときどき行つてみると、悲しげに皿を數へてゐるお菊の顔は、青ざめてゐるけれどもふつくらと丸味があり、頬から顎にかけての豐かな線には、内部になにか充實してゐるためから來るいきいきとしたものさへ感じられるのだつた。三百年近くも絶望的な計算をつづけてゐるのにお菊はすこしの衰へも見せず、わづか三十日の搜索で河童は疲勞困憊の極に達し、氣息奄々としてゐるのである。河童はとまどひし錯亂して、
「こんな變なことがあるものだらうか」

と呟かざるを得なかつた。
しかし、河童は勇氣をうしなひはしなかつた。いつたん定めた偉大な目的を放棄はしなかつた。
(かうなつたら、意地だ)
ただ、方法はすこし變へたのである。もはや肉體的にこの搜索を自分一人でやることは不可能といつてよかつた。あくまでも獨力でやりとげるといふ最初の決意を變更し、心ならずも仲間に協力を求めることにした。しかしながら、なほ最後の部分だけはあくまでも祕密にした。お菊のことは絶對に打ちあけたくない。皿さへ出て來ればよいのだ。彼は仲間に集まつてもらふと、模寫してきた皿の繪をみんなに示して、
「かういう皿を探しだすのに、諸君の力が借りたいのだが……」
と、いくらか殘念さうな口調でいつた。
そこは山の沼の土堤で、柳の木がならび。蓮華の花がマットをひろげたやうにはてしなくつづいてゐた。もうすつかり冬眠を終つた蛙たちが沼の岸や芭蕉葉のうえに三々五々たむろして、聞くともなしに河童の會議の模樣に耳をかたむけてゐる。空は青く、まだ陽は高い。
「それはなんといふ燒物だ?」
と、一匹の河童がきく。
「色鍋島だ。天下の名器だよ」

「ははァン」と、他の一匹が鼻を鳴らして、「君はその皿が欲しいばつかりに、こなひだうちからきよろきよろして、そんなに痩せてしまつたんだな」
「そのとほりだ」
「その皿を見つけだして、どうするんぢやね？」
皮肉な口ぶりでさうたづねたのは老河童である。
「どうといふことはないんです。ただ欲しいんです」
「ただ欲しいだけで一ケ月も血眼になつて、痩せてしまふんかね。その皿はよつぽど珍奇で高價なものとみえるなう。どんなものをかけても手に入れさへすれば、いつぺんで身代のできるやうな寶物らしい。骨董屋に賣るのかい」
「とんでもない。そんな下品なことはいはないで下さい」
「下品も上品もねえや」と、意地惡で有名な黑河童がせせら笑つた。
「取引で行かう。お前さんがその皿を是が非でも手に入れたい氣持はよくわかつた。だけど、おれたちが、お前さんの大儲けの片棒をロハでかつがねばならん理由はねえ。たんまりとお禮をもらひてえものだな」
「それはいふまでもないことだ」
「いつたい、その皿はどこにあるんです？」

圓陣の隅つこから、狡猾と敏捷できこえてゐるいなせな若い河童がどなつた。爪先立ちしてゐて、これからでもすぐ捜索に駈けだしさうな姿勢である。
「どこにあるかがわかつてゐるなら、君たちに相談しやしない」
「方角の見當をきいてゐるんですよ」
「日本のどこかにあるんだ」
この言葉に河童たちはどつと笑つた。しかし實際はあまりにも茫漠とした探し物にいささか當惑して、笑ひにまぎらしたにすぎなかつたのである。よい儲け口らしいけれども、結局は代償と勞力との比例にあるのだから、不精な者たちの中にはこの寶さがしを放棄するものもあつたのである。圓陣はしばらく騷然となつた。やがて、
「お願ひします」
頭を下げながらさういつた彼の言葉で、解散された。彼が日ごろ輕蔑してゐる仲間の前でへりくだつたのはいふまでもなくお菊のためであつた。
それから三日、五日、七日と、また日が流れた。成果はなかなかあがらなかつた。數百匹の仲間を動員したにもかかはらず、なんなにも混沌としてゐるとすれば、彼が一人でやらうと考へたことは無謀といつてよかつた。獨力であくまでやることは死を意味したかも知れない。慾と二人づれの河童たちはもう記錄やあやふやな文獻などは相手にせず、自分たちのかんや運をたよりに

日本中を彷徨した。

さらに、十日、十五日、二十日と日が流れる。

河童は衰弱のためもう動くことができず、山の沼底の棲家に横たはつて、ただいらいらしながら吉報を待つてゐた。あたりが靜謐で孤獨になると新しい思想が生まれる。藻がゆらめいてゐる間を、口から吐く眞珠の玉をつながらせながら編隊になつて鮒の一群が通りすぎる。車えびが透明な身體を屈折させて岩の穴から出たり入つたりする。さういふものをうつろな眸でながめてゐた河童の心に、これまでは想像もしなかつた一つの疑念が浮かんだ。

（十枚目の皿は、もうないのではないか？）

青天の霹靂よりもつとはげしい衝撃（ショック）であつた。背の甲羅が枯葉のやうに軋み、膝小僧が金屬板のやうに鳴りはじめた。自分の眼がつりあがつて行くのがわかる。その疑念のおそろしさに河童は悶絶しさうであつた。しかし、その惑亂のなかで、彼の腦髄だけは冷靜に殘忍な思考をすすめる。

（たしかに、皿は淺山鐵山によつて隱されたと記述されてゐる。しかし、歷史は嘘だらけだ。權謀術數の大家であつた鐵山は、皿を隱したものとみせかけて碎いてしまつたのではないか。鐵山が碎かなかつたとしても、どこかに隱された皿は三百年の時間の暴力によつて破壞されたのかも知れない。でなければ、これだけ探しても行方の片鱗だにも知れないといふわけがない）

また、別の考へが河童を愕然とさせる。

（皿はもう、日本にはないのぢやないかしらん？）

割れてはゐなかつたとしても、美術品として外國に持ちだされたことが想像される。そんな例はたくさんある。もし海をわたつて西洋にでも渡つてゐるとしたら、いかに河童の神通力をもつてしてももはや絶對に發見の可能性はない。河童は人間よりは數十倍の能力を持つてはゐるけれども、名探偵をもつてしてもその力は地球全體には及ばない。日本だけでも持てあますほどだ。限界の自覺は悲しいことであるが、希望も冒險も自己の圈內だけの話にすぎないのである。河童はこの突然わいた疑念の恐しさに耐へかねて、ぶるぶると濡れ犬のように頭をふりまはし、この惡魔の想念を追つぱらはうとしたが、一度生まれた思想はいかに努力しても消え去りはしなかつた。しかしながら、もともとはじめからこの疑念をいだかなかつた河童の方が魯鈍といふべきであらう。三百年といふ歲月を無視してゐたとはをかしな話だ。ただ考へられることは、河童が古井戸の底で三百年の歲月にすこしも影響されてゐないお菊の姿を見たために、錯覺をおこしたのかも知れないといふことだ。

「さうだ。たしかにお菊のせゐだ」

溺れる者が藁をつかむやうに、河童はやけくそに心中で叫んだ。

ところが、皿はあつたのである。

或る日、一匹の仲間の手から、彼はその皿を受けとつた。それは彼が古井戸の底で見た色鍋島と寸分ちがはぬものであつて、お菊の死の原因となつたあの皿であることに疑ひはなかつた。骨董品には僞物の多いことを彼も知らなくはない。しかし、仲間が探してきてくれたその皿は僞物とは思へなかつた。彼は隨喜の涙をながしてその友人に感謝したことはいふまでもない。

「ありがたう、ありがたう。君は命の恩人だ」

そんな平凡なことしかいへなかつたが、彼はまつたく蘇生の思ひがしたのである。大願成就のよろこびのため、衰弱し憔悴しきつてゐた河童はたちまち元氣を恢復し、宙をとんでお菊のところへ駈けつけたい思ひであつた。

しかし、實はこの一枚の皿を得るまでに河童はすでに破滅に瀕してゐたのである。仲間が皿を探してきてくれたのは友情でもなんでもなかつた。その皿を持つて來たのは、沼の土堤で會議を召集したとき、嫌味な啖呵を切つて、取引で行かうといひだした張本人の黑河童である。黑河童は徹頭徹尾慾と道づれであつたから、二人の會見はまつたくの商談であつた。彼がどんなにこの皿を欲しがつてゐるかをよく知つてゐる黑河童は足元を見こんで、搾油機のやうに彼をしぼらうとする。しかし、彼はすでに皿を手にするまでに、多くの仲間たちから搾られつくしてゐた。捜索のためには旅に出なければならない。そのためには旅費が要る。心あたりがあるとまことしやかにいはれれば一縷の望みをつないで、そこへ行つてもらう。旅費、日當、酒代、前借り、はて

は恐喝に類する强談で、金をまきあげられる。あまりの失費に彼は仲間へ依頼したことを後悔しはじめたくらゐだ。しかし、皿を探す手段はもはやこれ以外に考へられなかつたので、沼の繩張り、食餌圈、茄子や胡瓜の耕地、漁場、山林、貯藏庫等、財產の大部分を仲間に提供してしまつたけれども、最後の希望をうしなはなかつた。

今、その望みが達せられたのである。しかし相手が商賣人であつたために、皿の代償として、わづかに殘つてゐた財產の一切をまきあげられ、彼は裸一貫になつて一枚の皿を得たのである。しかし、彼は滿足であつた。彼は涙をうかべて心に呟く。

(この一枚の皿は、地球全體くらゐ價値があるんだ)

三百年間も陰慘であつた古井戸の底に、はじめて明るい笑ひ聲が滿ちた。

「これだわ、この皿にちがひないわ。まあ、うれしい」

お菊の歡喜の表情を見て、河童も自分の獻身と犧牲との報いられたことをよろこんだ。お菊は最初の邂逅のとき失禮な態度をとつたことを詫び、河童の持つてきてくれた十枚目の皿を手にとつて、いく度もいく度も裏表をかへして感慨ぶかげに眺めるのだつた。それから、河童にちよつと、といふやうに會釋しておいて、重ねた皿を數へはじめる。

「一枚、二枚、三枚、四枚、……」

それは前の陰鬱な聲ではなくて、明るく彈んだ調子だ。數を讀むテンポも早い。青蠟に似た女の手はせかせかと動き、皿は迅速にぞんざいに移動させられて、がちやがちやと音を立てる。

「五枚、六枚、七枚、八枚、九枚、十枚、……ああ、十枚あるわ」

お菊の計算はもはや澁滯することがなく、三百年目にはじめていつた「十枚」といふ言葉に、フッフと氣恥かしげな微笑を洩らす。

「よかつたですなあ」

河童もお菊のよろこびに釣りこまれて、身體をゆするやうにして笑つた。笑ふとは妙なことである。なぜ笑ふのであらうか。滑稽なことはひとつもなく嚴肅な勝利の悲しみがあるだけではないか。實際に胸が迫つてゐるのである。一人だつたらわつと泣きだしたかも知れない。しかし顏を見あはせると二人は笑つてしまふのであつた。三百年目にはじめてお菊の顏にあらはれた笑ひは、しかし河童をとまどひさせる。悲しみにうちひしがれてゐたとき、お菊の顏いつぱいにあらはれてゐた靜かで沈んだ美しさはどこかに消えてしまつた。昔のお菊の高貴な顏は、たわいもない、痴呆のやうな賤しい笑顏の面ととりかへられてゐる。そして河童はその新しいお菊の樂天的な顏を見ると、わけもなくげらげらと笑ひだしてしまふ。

古井戸の生活者である鼠や、蟹や、蝙蝠や、蛞蝓や、蜘蛛や、蛭や、蜥蜴や、ゐもりや、蚯蚓などはこの笑劇を呆氣にとられてながめてゐた。かれらはこの靜かで住み心地のよい古井戸の世

界の空氣が、俄かに變つて、生存をおびやかされるにいたるのではないかといふ不安を、一樣に感じてゐるらしく思はれた。空氣の震動だけでも大變である。お菊が笑ひ、河童が笑ふたびに細長い圓筒形の井戸の中はわんわんと鳴りひびく。革命的な現象といはなければならなかつた。

ところが、腑拔けのやうに笑ひころげてゐた河童は、ふとなにかに氣づいたやうに緊張した顏つきになると立ちあがつた。突然、河童の顏に不思議な苦痛の表情が浮んだ。彼は井戸の世界いつぱいに鳴りひびく笑ひ聲の谺(こだま)に、われに返つたのである。そのだらしのない愚劣な音響が自分の聲だと知ると。この眞摯な河童の心に俄かに狼狽と反省の思ひがひらめいた。

河童は羞恥でまつ赤になると、ものもいはず、地底を蹴つて、井戸の外へをどり出た。

「待つて、……待つて頂戴」

深い井戸の底でお菊のさう呼ぶ聲がきこえたが、耳をふさぎ一散に逃げた。

(墮落してはならぬ)

河童の心を領したのはそのことであつた。河童はお菊へ待望の皿をとどけたけれども、目的と現實との不可解な混淆を古井戸の底に行つてみるまで氣づかなかつた。河童は犧牲の美しさといふものをつねづね無償の行爲のなかに求めたいと考へてゐた。ところが、皿をとどけてお菊のよろこぶ姿を見たとき、なにかの代償を求めようという不純の氣持が、ふつと胸の一隅に兆したのにおどろいた。心中にどんな妖怪が棲んでゐるか、自分でもわからない經驗は前にもあつた。し

かし、こんな妖怪が頭をもたげたことは生眞面目な河童を恥ぢさせた。お菊になにを求めようといふのか。その恐しいみづからの詰問に逢つた途端、圓筒のなかにひびきわたつただらしのない笑ひ聲の谺が、河童を羞恥で赧らめさせた。同時に、罪の意識が電氣のやうに彼の胸をかすめた。また、仲間への裏切者となることの恐れがそれに重なつた。

(墮落してはならぬ)

河童はさうして古井戸からあわてふためいて脱出をしたのであつた。

それから、數日がすぎた。

沼の仲間たちは、彼が皿をどこにやつたのか不思議がつた。あんなに欲しがつてゐた皿を手にした途端、もう持つてゐない。仲間たちの間では、その皿を彼がいくらの金に換へ、いくら儲け、そしてどんな大金持になるかが話題であつたのに、彼は皿をなくしただけで相かはらず尾羽うち枯らしてゐる。そして、ただ身一つを入れるだけになつたうすよごれた穴のなかに横たはつたきり、まつたく出て來ない。仲間とのつきあひも忘れたやうだ。しかし彼のそんな不精たらしい蟄居の樣子を偵察しに行つた者の一人は、彼はさびしさうではあるがどこかに樂しげな滿ち足りた樣子も見られると、不思議さうに報告するのであつた。

また、數日がすぎた。

河童は忍耐をうしなつた。もう二度と古井戸の底には行くまいと決心してゐたのに、お菊に逢ひたい氣持をどうしてもおさへることができなくなつたのである。河童はこの自然の情をやたらに抑壓する必要はないと考へた。自分は死ぬかも知れない。そのまへにもう一度お菊に逢ひたい。お菊へなにかを求めようといふ不純な氣持などはまつたくなかつた。皿を渡した日、彼が一散に逃げだすとお菊はうしろから呼びとめた。そのお菊のやさしい聲は耳にこびりついてゐる。彼はそれだけでも滿足であつた。そこで、もう一度逢ひ、あんな風な奇妙な別れかたでなく、きれいに納得づくでもう二度と逢はないことを約束しようと思つた。お菊は悲しむかも知れない。

(しかし、それがおたがひのためだ)

と、河童はせつなくなる胸をおさへて、強くひとりでうなづいた。

河童は輕い足どりで、古井戸に行つた。初夏の嫩葉のうつくしい朝である。蟬が鳴いてゐる。もうこつそりと忍ぶ必要はないので、河童の姿で堂々と、井戸の圓筒形の石壁を降つた。苔むした垣の間から顔を出してゐた鼠や蟹や蜥蜴が、闖入者に驚いてひつこんだ。

地底に降り立つた河童は、つよい親しみを含んだなれなれしい語調で、

「お菊さん」

と、聲をかけた。

青いどろどろの湖水のなかに蹲つてゐたお菊は、顔をあげた。

河童は仰天した。河童はお菊が彼の來訪を待望し、井戸の口からのぞいただけで、もうよろこびの聲をあげて迎へてくれるものと思つてゐた。ところが、お菊は彼が底に着くまで一口もきかず、聲をかけると顔をあげたが、その眸は歡迎どころか、憎惡の光に滿ち滿ちてゐた。さらに河童の肝を冷えあがらせたのは變りはてたお菊のむざんな姿であつた。これがあのお菊であらうか。まるで骸骨である。お岩や累(かさね)よりもつと醜惡だ。ふつくらと丸味のあつた頰や顎の線は鉈でこそいだやうに削りとられ、二つの眼は眼窩の奥に落ちくぼんでゐる。葡萄色の唇は腐つた茄子の色になつて、蟇のやうに齒をその間にむきださせ、亂れ放題の頭髪は全身に棕櫚をかぶせたやうだ。痩せて針金のやうになつたお菊の膝のまへに、十枚の皿が積まれてゐる。

河童は茫然となつて、そこへへたばりこんでしまつた。甲羅が枯葉のやうに軋み、膝小僧が金屬板のやうに鳴りはじめる。その河童の耳に、お菊のすさまじい怒聲が憎々しげにひびきわたつた。

「なにをしに來やがつたんだ。惡魔、この皿を持つてとつとと歸りやがれ」

河童は耳を疑つた。しかし、それはお菊の口から出た言葉にちがひなかつた。動轉してしまつた河童はもうなにを考へる餘裕もなく、お菊がつきだした一枚の皿をつかみとると、一散に井戸から飛びだした。

(なんたることか)

錯亂は極に達した。どう考へてもなんのことやらわからない。河童は皿をかかへて山の沼にかへると、やけつぱちに寢ころがつて呻吟した。河童の頭のところに皿が置かれてある。紫雲たなびく空の下、紅葉の林をさまよふ鹿と、釣りをする二人の白髪老人を配した色鍋島の皿は絢爛としてゐる。

古井戸の底で、お菊はしだいに終焉に近づきつつあつた。現在のお菊の絶望は、十枚目の皿の見つからなかつた前の絶望にくらべて、さらに絶望的であつた。お菊は九枚しかない皿を數へながら、十枚あるかも知れない、なくともいつかはきつと十枚目が見つかるといふ希望だけでわづかに生命を支へてゐたのである。河童はそれを永遠に到達の可能性のない企圖として、彼女の不幸を哀れみ、その絶望へ光をもたらさうと考へたが、お菊はその絶望の計算への情熱だけで、いきいきと内部を充足されてゐたのであつた。しかしながら、彼女は自分ではそのことを氣づいてゐなかつた。だから、河童が皿を見つけてきてくれたときは本心からよろこんだのであつた。三百年の絶望に終止符が打たれたと思つた。ところが、それはもつと恐しい絶望への出發點であつたのだ。

「一枚、……二枚、……三枚、……四枚、……」

十枚あればよいがと祈りつつ、期待と不安とにおびえ數へてゆくときの充實感と、やつぱり九枚しかないと知つたときの、悲しいとはいへ次に望みを托し得る生活の持續感とは、お菊にとつ

ては魂の火花であつた。それなのに、皿が十枚揃つたとき、一切の情熱も充足感も、それから來る美しさも生命力も消え去つてしまつた。お菊はなにもすることがなくなつたのである。彼女はただ退屈になつただけだ。皿を數へて行つても十枚あるとわかつて居れば全然無意味だ。はじめは河童の親切もよろこんだのに、もう翌日には河童のおせつかいが恨めしくなつた。二日目には憎くなつた。三日目には呪はしくなつた。お菊は内部を支へるものをうしなつて、急速に憔悴し委縮し死へ近づいた。そこへ河童が得々としてやつてきたので、思はずどなりつけたのである。それはお菊の魂の叫びであつた。

「やつと一枚減つた」

さう思つて、また昔のやうに、一枚、二枚、三枚、と數へてみても、もはや挽回することのできない空洞が、お菊の心のなかにぽかんと倦怠の口をひらいてゐる。なんらの情熱も希望もわいて來ない。十枚目の皿が河童のところにあるといふ事實を、突如としてお菊が忘れ去つてしまはないかぎり、事態は復舊しないのだつた。

お菊は絶望して、九枚の皿を石垣にたたきつけた。その散亂した缺片のなかに横たはつた。しづかに眼をとぢた。

山の沼で、錯亂から容易に脱することのできなかつた河童は、お菊を忘恩の徒だと斷定することによつて、やうやくなにをすべきかに思ひあたつた。

（向ふが向ふなら、こつちにも考へがあるんだ）

河童は山の沼を出た。人間に化けて、大都會にあらはれた。一軒の骨董屋に入つた。持參した色鍋島の皿を賣つた。鑑定のできる骨董屋の主人はそれが天下の珍器であることを知つて、客のいひなりに莫大な現金を拂つた。客は皿をわたし金をふところに入れて店を出た。骨董屋の裏口から、眼つきのわるい屈强の若者が四五人そつと拔け出た。慘劇はどこで行はれたかわからない。目的をはたした若者たちが店にひきかへしたとき、骨董屋の主人は粉微塵になつた皿のまへで、茫然と立ちつくしてゐた。

昇天記

草の葉にまかれた生ぐさい一通の手紙を私はひらく。

あしへいさん。

とつぜんの手紙であなたはおどろくかも知れませんが、わたしは白魚川の底に棲んでゐる河童です。古くは、芥川龍之介さんや、小川芋錢さん、今では、西田正秋さんや、原田種夫さんや、あなたがわれわれ河童のよき理解者であり、知己であることは、われわれ河童仲間でも常に話題の種であり、また。うれしくも思つてゐることです。そこで、いろいろとお話ししたいこともたくさんあるんですが、それはまたの機會にして、實は、今日は、あなたにわたしの書いた小説を讀んでもらひたいと思つて、手紙をさしあげた次第です。われわれ河童の文章といふものは、天草の川にゐたゲタルといふものが江戸時代に創始した文體以來、少しも進歩してゐないので、あなたにはこの原稿が讀みにくいかも知れませんが、まあ、ひとつ、讀んで下さい。

小説「昇天記」

昔々のことでおぢやる。白魚川となん水のながれに、河童ども、たむろなし、くくひなし、もどろなしつつ、あまた棲んでゐたと申す。

はやばしる流れにいでて浮いつ沈うつ、昇つつ降つつ、嘴鳴らし、眼きやらせ、夜晝を分たず、戯れてをつたところで、或るとき、ひとりの河童の、仔細らしう申すは、われら、つね日頃、水のながれにあれど陸にもあがり、陸の終始はよほど見あいた、すでに珍らしう心ぎぎがることも御座ない、ただ、われら望むことは天空の世界にのぼらんことぢや、もろもろのはなしや、書に、天のこと、いららしく、うちくしく、いと崇高うに書きあらはいてござる、また、龍も年を經つて位にのぼれば昇天するためし、われら河童といへど、など昇天の機の無からうずる筈はおざない、この儀はなんと、と、いへば、並みゐる河童ども口を揃へて、その儀異議あるはない、贊成贊成、と叫き、また、なのめならず喜うだ。さうあるところで、ひとりの河童、昇天のこと、われら分別はしたれど、そのやうに目算もなう、ざつといひだいて、はたして然らば、空かける手段はいかに、われら水にすみ、地に潛ることは知れど、空飛ばす術は知らぬ、このことなくばおのおのの昇天の儀も、種まかずして柿の生るを待つと同然ぢや、とあれば、いひだいたる河童も明らめ申すこともかなはで、顔よごいて、とちめき、噤すんだ。河原に市をないたる河童どもも、顔見

合はせ、ひたすらどしめくによつて、更に效驗のあらうやうはおざない。この時、また、ひとりの河童、高聲に叫きて申すは、昇天ののじみ絶ちがたけれど、空飛ばす術知らぬわれらがいかに論定するも詮ないことでおぢやる、聞くところに依れば、千軒岳に巣まふ河童たちは、いかがして會得したるにや、自由に飛行をなすと聞えた、これに就いてその術を習得するが肝要と思ふがどうぢや。これを聞いて集るもの、ことごとくその議にまかなび、一定した。

さうあるところで、この土地の寶生などあまた貢なして、千軒岳なる河童を飛行の師に頼うた。師の河童よう心得、それよりは夜晝を分たず、河原に群衆して、飛行の術を傳授することぢや。飛行のこと習はんと出で立つもの限りもなうて河原に市をないた。抑、食ぶるものからして異なるに依つて、先づ、あまたの腹下しを出だいた。そぢやいげと申す木の根の腐らいたるたるを三升がほども一日に嚥み干すことは、え叶はいで、もはや昇天の心失せぬと思ひさだめる河童もあつた。稱ふる呪文は、ぽね、おぷ、うん、ぐる、さん、みとぼ、えしてぷ、くねる、あんね、と申す。こは昇天の途次、危害を加ふる雷神を防がうずる氣配といふことぢや。この呪文どうして覺もゆること得せぬ河童もおぢやつたといふは、曲もないことぢや。さて、師の河童おぞがらい者にて、聲高に叫けば山呼おこり、葦の鞭振らへば風おこり、なかなかに籠者しやうものでもおざない。さうあるところで、あまたの河童、長月の修行の甲斐あつて、昇天の術を漸くにも習得したと申す。

されば練習が肝要なりとて、ことさらに鋭な岩のあたりに群衆して、月の出づるを待つて飛うだ。呪文を間違へれば、われは飛行する目算なるが、ただ陸ばかりを走りぢだめく。少し飛うだるが、中途よりべらんと落ち放いて甲羅を打ち挫き、足を折る。昇つつ、降つつ、おひやらめき、くくひなし、叫きあらび、その仰らしいありさまは、寔譬を取るに例もないほどであつたと申す。師の河童は高座にありて葦を振らひ、山呼する高聲にて、笑ひはためいてをつたといふことぢや。

かやうの次第によつて、いよいよ難行苦難の果に、漸く飛行の途を得たれば、師の河童は千軒岳に去んだ。さて、吉日を撰うでいよいよ昇天することに一定した。河童ども喜びはためき、市をないて集り、どしめき、或る者は一念の叶ひたるをぎがんで、泣く者も少々ではなくおぢやつたと申す。

さて、初め昇天の儀を申しいだいたる河童の音頭をもつて飛び出だいた。それは數も知らぬあまたの蜻蛉が群ないて飛ぶに似てをつたといふことぢや。滿月のきらめく空の上にひゆうひゆうと鳴りはためいて、あまたの河童は瞬きする間もなく、消えていつたと申す。

白魚川の河原には不甲斐あらず、呪文を憶ゆることを得せぬ河童、修行の中途にて甲羅を打ち挫き、或は足を折りたる河童など、すこうしゐて、友達の昇天するを眺めて羨んでをつた。これどもの申すやうは、われらは陸にて生を終らうずること、曲もなう、どぐめきことなれど、詮ないことなれば分別あれかし、とて、水を破りて沈うた。

然るに、二三日を經つた後のことでおぢやる。河原の岩の異形の音を放いて落ちたと思ふに、何かはよからう、忽ちに命果てた者がおぢやつた。流れの底に眠らうて居つた河童、仰天し、いで立ちて觀るに、少し前に昇天した河童の一人ぢや。既に甲羅も潰れ、頭の皿は干て嘴も挫けて飛うだれば、命あらうやうもおざない。その實否はいかにと怪しう思ひ居る折柄、又しても、物の落つる氣配して、どうと落ちたものがあつた。それも先頃昇天したる河童ぢや。これもたまらず果てた。何たる籠者かと驚き入るところで、それより次々に落ちる者數を知らぬありさまぢや。後ほど果つる者は數を減らいたが、天より歸り來る河童は、どれやうも、悉く色青ざめ、くばめき、ひなびき、河原に下りる時より、噤すんで阿呆のやうにおぢやる。いかやうなことかと問ひかくるも、物數いへる者がおざない。されば、流れの水を汲うで打ちかくるに漸くに眼をくりまき、嘴をわらかす始末ぢや。次に、一段と高聲に叫いても何も聞えぬ始末ぢや。又、息吹き返した後に、果つるもあり、氣狂ひたるごとく、異形の聲を發して陸を這ひぢためくもある。流れに飛び込うで、われは河童の生なるに、溺れて果つるもある。打ち倒れて落ち窪うだ兩つの眼ばかりぎゆるめかすもある。その慘忍のありさまは、寔、譬をとるに例もないほどであつたと申す。

水を皿にかくれば、漸くに口を開くものがいだいたれば、仔細をきくにかうぢや。おのおの喜び勇うで昇天はしたが、高う上るにつれて、何處まで飛うでも空ばかりで何もおざない。高う高ううち連れて上るところで、腹は減る。寒さはいごい。それでも飛ぶうちに、夜さが明け、また

日が暮れ、何日も飛うだ。なんぼ高う上つても何もおざないのは一つぢや。されば遂に力竭き果つる者が落ちた。力の殘る者は我慢强う昇つて行つたが、いづれまで上つても、何もないのは必定ぢや。考へもなう不埒のことをして退けた、といふ次第でおぢやる。

さればこの時あつてから後、白魚川の眷族は、飛行の術をえ憶えぬ愚の河童ばかりとなりたと申す。

どうです。あしへいさん。傑作ではありませんかね。ひとつ、この「昇天記」で、芥川賞をもらつて下さい。

人魚

草の葉に卷かれた生ぐさい一通の手紙を、私はひらく。

あしへいさん。

また、お手紙さしあげます。先便では失禮いたしました。小説「昇天記」を送つたりなどして、あはよくば芥川賞をと考へたわけでしたが、あとで赤面する思ひをいたしました。もう二度と小説など書かうといふ野心はおこさないことにしました。したがつてこんどは新作ができたから見てくれなどといふのとはちがひます。どうぞ、あのことはお忘れください。

さて、けふはどうしてもあなたにお話しをして、御意見をうけたまはりたいことがありますので、とつぜんお手紙をさしあげるわけです。實はぢきぢきに參上してお話し申しあげるとよいのですが、あの日以來（どの日なのか、それはあとでお話ししますが）頭痛がして起きられませんので、手紙で失禮いたします。ずきんずきん蜂谷（こめかみ）がうづき、頭の皿の皮がつつぱつてしめつけられるやうで、この手紙をかくこともやつとの思ひです。したがつて頭も混亂してをりますし、文

脈もみだれ勝ちになるとおもひますけれど、なにとぞ御寛恕くださいますよう。わたしがこんな無理をしてまであなたに手紙をかくわけは、わたしの現在のなやみを一日もはやく解決したいのと、そのわたしのなやみといふのはあなた以外にはわかつてくださるまいかと思ふからです。われわれ河童にたいして、あなたほど深い愛情と理解とを示してくれるひとはほかにありませんし、わたしのいまの奇妙ななやみも、あなたなら解決してくださるやうに思ふのです。おいそがしいでせうが、まづ、ひととほりおききください。

一週間ほど前のことでした。夕ぐれどきになつて、わたしは棲んでゐる山の池を出て、ぶらりと海岸の方へ行きました。わたしはぶしやう者で、めつたに外出をしたことはなかつたのですが、その日はなぜともなくふと久しぶりに波の音がききたくなつて、海の方へでかけたのです。もう秋のちかいころですから、たそがれどきになると、ひやりとした風が吹くやうになつてゐて、わたしのすんでゐる池のおもてに散る木の葉のいろも、季節のうつりかはりをあらはしてゐました。わたしが波の音をききたくなつたといふのも、單調な池の底にあつて、やはり海にひろびろとした秋の氣配をさぐりたくなつたのかも知れません。そんな瓢然とした思ひが、わざはひとなつて、現在こんな苦痛をなめなくてはならなくなるといふことが、そのときにどうしてわかりませう。

あまり遠くはないので、まもなくわたしは渚ちかくへ出ました。まだすつかり陽はおちてゐずに、水平線のうへにうづくまりかさなりあつた鰯雲はまつ赤に染まり、雲と雲とのすきまから金

色の放射線が紺碧の中天へつきささるやうにのびだしてゐます。すみきつた濃い藍のいろにひろがつた海ははるかのかなたまで鷹揚なうねりをたたへ、しづかに渚にうちよせ、うちかへします。銀線の曲折をながながとつづかせて、白砂の濱の波うちぎはは眼のとどかぬところまでかすんでゐます。ここの海は荒れることで有名なのですが、風がなければ、こんな靜かなときもあるのでせう。さらさらと竹林のさやぎに似た波の音がこころよく耳にひびいてきます。

ところが、防風林の砂丘をこえたとき、わたしはたちすくんでしまひました。濱邊には人かげもなく、鷗が二三羽とんでゐるほか海上にも一隻の舟のかげも見えなかつたのですが、ふと汀ちかくになにか白く光るもののあることがわたしの眼にはいつたのです。二町ほどもはなれてゐたでせうか。その白いものはうちよせうちかへす波にもまれただよつてゐるやうですが、なになのかはじめはわかりませんでした。わたしはいつたんこえた砂丘をあとがへり、防風林の裏をまはつて、その白いものを正面に見ることのできる位置へ移動しました。さうして、大きな松のかげに身をひそめて、そつと顔をだしました。かるい叫びがおもはず出て、わたしの眼はその白いものに釘づけになりました。

波にただよつてゐるのはひとりの人間の女でしたが、そのうつくしさはなんにたとへればよいでせう。とてもわたくしにはその女のうつくしさをあなたたちにつたへる筆をもちません。年のころは十七八かと思はれますが、一絲をもまとはぬ裸身で、すきとほるやうに白い肌はあたかも

大理石のやうになめらかに光つてゐます。どこひとつ角ばつたところのないなだらかな身体の曲線は、縦横にうねりまじはり、ぷつとふくらんだ二つの乳房のさきにある薄桃いろの乳首が紅玉をちりばめたやうにみえます。ゆたかな顔、弓なりの眉、ながい睫毛のしたにある二重まぶたのすずしい眼、端正な鼻、二枚のはなびらのやうな唇、わたしが畫家であつたならば、生命をかけてでもかきたいと思ふやうなうつくしい顔です。ときほぐされたながい漆黒の髪はその白い身体になだれまつはり、その女が波にただよふときには、海藻のやうに水面にうきます。女は夢みるやうな眼をして、夕燒の空をあふいだり、はるかの水平線をながめたり、鷗のとぶあとを眼で追つたり、防風林の方を見たりします。わたしは自分のほうに顔がむくとはつとして首をひつこめました。

それにしても、この女はなにものでせうか。もう海の水もつめたいことでせうに、いつかう氣にしてゐる樣子もなく、たのしげに波にただよつてゐるさまはまつたく海と同化してゐるみたいで、海が自分のすみかのやうにさへ感じられます。わたしはあたりを注意してみましたが、どこにも着物をぬいでゐる樣子がありません。家とてふきんには一軒もないのですから、家から裸のままできたとも思はれないのです。不思議なことに思つてゐるうちに、わたしの疑問はまもなく氷解いたしました。女は渚からあまり遠くないところで波に浮いたりしづんだりしてゐましたが、ふとこれまでは見なかつた身體の下半分がちらと波のうへにあらはれました。わたしはさつきか

らまつ白いふくらはぎを想像してゐたのですが、波のうへにあらはれたのは鱗につつまれた魚の尻尾で、ああ人魚だつたのだとはじめて悟つたのです。さうとわかればさつきからのさまざまのこと、海と同化してゐるやうなたはむれのありさまなども當然のこととわかります。人魚といふものは話にだけきいてゐましたので、わたしはさらに好奇心をそそられ、つひに、姿をかくして、人魚のかたはらにちかよりました。わたしたちが必要に應じて姿を消すことのできることは、あなたも御承知のことと存じます。わたしは姿を消すと、人魚にちかづいてゆき、波のなかにもぐりました。

人魚はさういふことは知りませんから、前とすこしもかはらずに、うねりにつれて波のうへをただよひ、やがてなにか歌をうたひはじめました。その聲はあまり高くはありませんでしたが、風鈴が風にそよぐやうにすずしい聲で、波のうへをながれてゆきます。高くひくく抑揚をつけてうたふのですが、もとよりわたしは歌の意味などわかるはずもありません。ただそのたえいるやうなしらべにうつとりとなるばかりです。水中にもぐつて人魚のまはりをめぐつてゐますと、うたふたびにかすかに胸がふくらんだりちぢんだりし、二つの乳房が息をしてゐるやうにふるへます。腰から下は鱸（すずき）によくにたこまかい鱗におほはれ、そのびいどろのやうないろの鱗は一枚々々みがかれたやうにつやつやしく、うごくたびにきらつきらつと光ります。扇がたにひろがつた尾は梶をとるやうにものやはらかにくねり、ときにはげしくうごいて人魚のからだを急激に推進させます。ときに人魚のからだは夕焼雲のいろを吸ひとるやうにうす紅にそまり、人魚がもぐりますと、長い黒髪が水中にみだれよつて、昆布がゆらぐやうに妖しいうごきかたをします。人魚のからだのまはりに生れた水泡が眞珠の玉をまきちらすやうにくるくると舞ひあがります。

わたしはかういふ人魚の姿態にみとれながら、いつか切なく胸くるしい思ひにとらはれてをりました。人魚があまりにうつくしすぎるからです。わたしはたびたびなめらかな人魚の肌に手をふれたい衝動にかられ、ふつくらとした乳房をくはへてみたい慾望を感じました。また黒髪の林のなかにもぐつたり、腰のうへに馬のりになつてみたいなどとも考へました。しかし、わたしはまるで射すくめられたやうになにをすることもできず、かなしさに泣きたい思ひがしてきたのです。わたしはわたしのみにくさがたまらなくなつて、羞恥のおもひにもはや長くそこにゐることすらつらくなつてきました。河童とうまれた宿命をこれまでいちどもくやんだことはなかつたのですが、このときになつて自分のうけてきた血の宿命をうらむこころがわいたのです。青みどりいろの身體、毛ばだつた頭髪とそのまんなかにある皿、背の甲羅、みづかきのある手足、とがつたくちばし、さういふ一切のものがすべてきたならしく、けがらはしいもののやうに、嫌惡の感情をもよほしてきました。河童としてこれまでもつてゐた矜持などはあとかたもなく消えてしまひ、わたしは自分の不運をかこつこころさへ生じて、切なくかなしくなりました。わたしの愚かさをわらつてください。もはやもつてうまれた絶對の宿命として、河童として生きる以外のどのやう

な生きかたもできないことがわかつてゐるのに、わたしはそのとき、なにかの奇蹟があらはれてふつと人魚にうまれかはることがあるのではないかといふやうな、途方もない妄想に瞬時とらはれてゐたのです。さうしてわたしのからだをふりむいてみて、やはり河童であることを知つたときには悲しみといきどほりで、みづからのからだをうちくだきたいやうな狂ほしい思ひにかられました。するとわたしをこのやうな悲歎におとしいれた人魚へいきどほりのやうなものがわいて、ふと憎惡のおもひで、人魚をながめましたが、わたしのそのおもひなど、たちまちふきとんでしまひました。このやうにうつくしいものをどうして憎むことなどできませうか。わたしの心の變化などはすこしも知らない人魚は相かはらず白いからだを光らせ、鱗をきらめかせてはおよぎ、眞珠の玉につつまれながら水中にもぐつたりします。わたしもやがてあきらめるこころが出てきて、身のほどしらぬ自分の見榮坊をわらふ餘裕も生じ、ただ人魚のうつくしさのみをたのしむゆとりができました。

夕燒雲がしだいに茜(あかね)のいろをおとしてゆき、海上には夜をまねくたそがれのけはひがながれはじめました。するとこれまではただたのしげにうたつたり泳いだりしてゐました人魚の樣子がにはかに變りました。うつとりとしたまなざしが消えて、急になにかをさがすやうなせはしげな眼になりました。これまでのやうな波にたはむれてゐる風情がなくなり、人魚は用事をおもひだしたやうに水中をあちらこちらと眼を八方にくばつて泳ぎはじめました。わたしにはその變化の理

由がわかりませんでしたので、ひよつとしたらわたしのゐる氣配に感づいて、そのあやしいものを探してゐるのではないかとひやりとしました。姿のみえない確信はもつてゐるのですが、むかうも化生のものですから、どんな祕法をこころえてゐるかもわからないし、わたしはすこし遠ざかつていつも逃げられるやうに警戒はおこたらなかつたのです。

ところがさういふわたしの解釋は杞憂にすぎなかつたことがすぐにわかりました。すこし沖に出て、てんぐさ、みるめ、昆布などの海草がしげり、赤い星のやうな人手が、岩のあひだによこたはつてゐるところで、人魚はいつぴきの鯖(さば)をとらへました、それまで、海中に群れてゐた多くの魚たちは人魚が突進してくると、木の葉をふきちらすやうにして逃げてしまつたのです。鈍重ないつぴきの鯖がたうとう人魚につかまりました。すると、人魚は鯖の頭と尾とを兩手につかんで、いきなり口にもつてゆきかぶりつきました。そのときのわたしのおどろきを想像してください。わたしはあつけにとられて、ぽかんと口をあけたまま、人魚のそのはしたない動作を見つめてゐました。人魚が急に用事ありげにおよぎだしたのは空腹をおもひだしたからだつたのです。人魚はその鯖をむしやむしやと食べてしまひますと、のこつた頭と骨とを投げすてました。さうしてさらにつぎの餌をもとめてまたけはしい眼つきでおよぎだしました。これまでうつとりとした瞳にすんでゐた眼にはなにかいやしげないろがうかび、あちらこちら魚を追ひまはす姿はうつくしいだけにざんにんな不氣味さをはなちます。またとらへられたいつぴきの縞鯛が人魚の食膳

にのぼりました。ほくそ笑んでむしやむしやと生身（なまみ）の魚をかじる人魚の口は耳まで裂けてゐるやうにみえました。人魚はかうして貪婪（たんらん）にひかる眼つきをしてしきりに魚をとらへて食べましたが、つひに、巨大な昆布の林のなかにはいつていつて、そこへ脱糞をこころみました。尻尾にちかいところから黄いろくながいものが縄のやうにいくすぢもおしだされてきて、ちぎれるとながれにつれて底の方へしづんでゆきます。さうしながら人魚は口では魚を嚙んでゐるのです。

もはやわたしは見るにたへなくなつて、匆々に海を出、重いこころをいだいて、山の池にかへりました。さうして、その日からわたしはえたいのしれぬ懐疑にとざされ、頭痛がしてきておきあがれなくなつてしまつたのです。

あしへいさん、

わたしの經驗したことといふのは以上のやうなことですが、あなたはどう思はれるでせうか。わたくしはうつくしさといふものに對する疑念が生じたのです。うつくしさをおもひ、うつくしさにあこがれる心は日ごろからわたしたちにあるわけなのですが、しからばそんなわたしたちを満足させるやうなうつくしいものが實際にあるだらうか。人魚をはじめ見たときには、わたしはそのうつくしさに身ぶるひがし、日ごろの念願が達しられたよろこびにふるへたのです。ところがその人魚はのちにはそのはしたないありさまでわたしをおどろかし、せつかくのわたしのよろこびを木つ葉みぢんにうちくだいてしまひました。昆布の林で脱糞したときの人魚ののうのうと

した表情、あられもない女だてらの動作にすこしの羞恥をしめさない無智、それはわたしに一種のおそれをすらいだかせました。わたしははたして人魚がうつくしいかどうか、その日から考へはじめてたうとう病氣になり、わからなくなつてしまつたのです。

人魚はうつくしいのですか。みにくいのですか。どつちですか。

わたしはもう二度と海岸へ出まいと決心しました。しかしまたあの汀での濃艶な姿態が眼にうかんできて、出てみたい誘惑にかられます。あのうつくしい姿はわたしの網膜にこびりついてしまつてはなれません。さうしてあとの半分をわすれてしまはうと必死の努力をしてみるのですが、あせればあせるほどその方もいつさうつよく浮んできて、これも燒きついたやうに消えません。わたしはどうしたらよいのですか。この同じ人魚の二つのことなつた姿のどちらを信じたらよいのですか。どうぞ、わたしに教へてください。

あしへいさん

御返事ありがたうございました。おいそがしいのにさつそく返事をいただいて恐縮しました。しかし、あなたの手紙はわたしをおどろかせました。あなたは人魚のことはそつちのけにして、わたしのことばかり書いていらつしやる。

――うつくしさをもとめ、うつくしさをうたがふ心、人魚がほんたうにうつくしいかどうかに

ついて眞劍になやみ、たうとう病氣にまでなる心、その君のはうが人魚よりもよつぽどうつくしい。

こんな一節がある。なにをいつてるんです。そんなことは聞きたくない。

わたしはまもなく死にます。この手紙をかいてゐても手がふるへ、だんだん弱つてゆくのがわかります。もう頭の皿の水もひからびてしまつて、しめつけられるやうにいたいのですが、しかしいまわたくしはふしぎなよろこびにとざされてゐます。かういふ死にかたをすることは滿足です。

わたしはやつぱり人魚のうつくしさを信じることができるやうになりました。人魚はつねにうつくしい。なにもうたがつてみることなんてすこしもなかつた。さうしてそのうつくしい人魚を見たことをわたしはほこりとし、わたしの一生を人魚にささげて悔いのない思ひになりました。あなたもその人魚を見たいと思はれますか。きつと思はれるでせう。しかしけつしてごらんにならないやうにわたしはすすめます。つまりその人魚のうつくしさのみに一生をささげて悔いないやうな御覺悟があなたにあるかどうか疑はしいからです。

あの日以來、わたしは病氣になりましたが、それはわたしの懷疑となやみからきたものではありませんでした。あなたがいふやうに、病氣になるほどなやんだなんてことではなかつたのです。なにをおつしやる。あなたにほめてなんか貰ひたくない。わたしが病氣になり、死ななければな

らないのは、單なる傳說の掟にすぎないのです。はじめわたくしはそれを知りませんでした。この前の手紙のときにはまだ知らなかつたのです。見舞ひにきた古老がわたくしにそのことを敎へてくれました。つまり人魚を見たものは死ななければならないのです。これはゆるがすことのできない傳說の掟でした。どうしてそんな殘酷な掟ができたのでせうか。なにもわざわざ見にいくわけでもなく、ふとゆきずりに出あふにすぎないのに、どうして死をもつて罰せられなければならないのか。祕密をのぞかれた人魚の復讐であらうか。しかしながら死をがんぜんにみてわたくしはその意味をはつきりと知ることができます。わたしがいまよろこびをもつてこの復讐をうけいれてゐることを申しあげれば、あなたにはすべてがおわかりでせう。

いや、あなたなんかにはわかるまい。あなたはまたいふにきまつてゐる。

——うつくしさに殉じて悔いない君のはうこそ人魚よりよつぽどうつくしい。

なんて。

ああ、あなたもその人魚をいちど見るとよい。さうすればそんな馬鹿なことはいはなくなるにちがひない。道ををしへます。ここに地圖をいれておきます。ときどきはきつとあらはれるにちがひないと思ひますから、なるだけ風のしづかな日のたそがれどきに、そこへ行つてごらんなさい。

もう手がしびれてきました。眼さきがくらくなつてきました。たれかが呼んでゐるやうな氣がします。眠るやうな夢みてゐるやうなよい氣持です。ではおわかれいたします。さやうなら。

南と北

第一信

北海道の河童殿へ、はじめてのお便りさしあげます。私は九州は筑後川に棲む河童です。われわれ河童族といふものは發生の歴史に徴してみれば、南に棲む者も北に棲む者もその血液や思考、習俗等にそんなに差があるとは思へませんが、なにしろ日本の端と端、逢ふこともまつたくないわけでありまして、なにやら他人めいた疎遠の感がなくもありません。これはまことに残念至極のことでありまして、日ごろからなにかの機會に連絡して、親善友交をはかりたいとの念願は長いことでありました。たまたま最近ひとつの事件に遭遇いたしましたので、かかる事態はわれわれ南方族の間のみに發生するところのものか、あなたがた北方族の間においても類似のことがあるやなきや、ことのあらましを記して御高説を拜聽させていただきたいと唐突の書面をしたためる次第であります。

聞くところによれば北海道の風物は規模雄大、天地自然の氣は胸もひらけるばかりといふことでありますが、九州もまた御國自慢ではありませんが、濶達廣茫の山野河川はいたるところにそ

の美しい景觀をひろげて居ります。北海道は、洞爺湖、支笏湖、摩周湖、阿寒湖など、すばらしい湖にめぐまれた土地柄のやうですが、九州にも、これに劣らぬ湖がたくさんあります。しかし、私がこれからお話し申しあげることは、そんな大きな湖で起つた出來事ではなく、或る山間のほんのささやかな沼でおこつた話なのです。

その沼は水も澄んで居り、鮒、鯉、鯰、みじんこ、えび、などもたくさんゐまして、河童の棲む條件が揃つてゐますから、大體ならばたくさんの河童がゐなくてはならない筈なのに、そこには一匹もゐませんでした。なぜかといふと、河童たちはこの沼を恐れてゐたからです。といつてもこの沼に河童たちの敵であるどんな怪物が棲息してゐたわけでもなく、人間どもがわれわれ河童のもつとも嫌惡する唾や小便を、やたらに放射するからでもありません。理由は、單に月のためです。

晝間見れば、この沼はなんの變哲もありませんが、夜ともなれば恐しい形相を呈します。それはこの沼全體が一個の眼になるからです、楕圓形になつてゐる沼は長い方の端が切れてゐますから、それはあたかも眼の形になつてゐまして、岸邊のくさむらが睫毛のやうに感じられます。その眼型の沼へ夜になると、月が瞳を點じるのです。これは恐しいことです。人間たちは沼へうつる月を賞して、俳句をつくる男などが、名月や池をめぐりて夜もすがら、などとやに下つてゐますが、われわれ河童にとつては、沼をめぐるどころか、ひと目見ただけで肌が冷えあがり、背の

甲羅がちぢんでひびが入るくらゐ恐しいことなのです。かういふことは傳說の掟にもとづいたことなので、あなたがた北方族の間でも共通なことではないでせうか。

月が登つて來る。その月が沼の水面にうつる。それまでは死んだやうな沼だつたのに、月が瞳のやうに嵌めこまれると、にはかに沼はいきいきとした巨大な一つの眼になつて、われわれを山中を、いや、夜氣に森閑としてゐる天地全體を睥睨しはじめる。滿月のときには沼の眼の中に靑銀色の瞳はもつと鋭く光り、弦月、半月となつてもその凄さは衰へない。三日月となると一層不氣味です。猫の瞳のやうに沼の瞳が變化してゆくことは、われわれにさらに妖怪じみた恐怖をおぼえさせます。月が移動するにしたがつて瞳もうごく。すると、あたかも沼はなにかの意志や感情を持つてゐるかのやうに見えます。かういふ恐しい沼の表情を見ては、到底氣の弱いわれわれ河童は、棲まうにも棲めないではありませんか。はじめうつかりしてこの沼に棲んだり、覗いたりした河童が、恐怖のあまり眼をまはしたり、甲羅をうち割つたり、ひどいのは生命を絕つたりしたために、爾來、この沼には一匹の河童もよりつかなくなりました。

しかし、ここに一人の勇者があらはれました。彼はこんな豐饒な食餌庫であり、住み心地のよい居住地たる沼があるのに、濁つた水の、あまり魚やみじんこもゐない貧寒な附近の池や沼に、河童たちが棲まなくてはならぬことに義憤をおぼえたのです。救世主的な氣持にもなつたのでせう。どんな神聖な思想もおふむね慾望から出發するものですから、彼の英雄的發奮も、ひよつと

したら、これまで棲んでゐた沼のきたなさ、餌の惡さに飽いた、新しい住居と豐富な食物にたいするおさへがたい欲求であつたかも知れません。それは帝國主義の思想にちよつと似てゐますが、いづれにしろ、傳說の掟をくつがへし、恐怖を克服して實行にとりかかつた彼の勇氣は賞されなければなりません。

彼は沼から月を除かうと考へたのです。沼が恐しいのは月が瞳と化すからでありまして、瞳さへなければ沼はあたり前の沼にすぎません。眼の形をしてゐるのはなんでもありません。しかし、一口に、月を除くといひましても、はたしてどういふ方法に寄つたらよいか？　彼は熟考しました。作戰を練りました。そのために痩せたほどです。そして、結局、彼が最後に到達したプランは、月が沼の中心に瞳となつてあらはれたとき、網をかぶせて獲るといふことでした。河童には多少の神通力がありますけれども、月そのものを天から除去するほどの力はありません。さうすれば沼にうつつた月を捕へるしか方法がなく、その捕獲の方法といふものも、科學や機械と緣のない河童であつてみれば、網でとるといふ原始的手段に歸するほかはなかつたわけでせうか。彼はとてこの直接行動がどんなに危險をともなふ冒險であるかを知らなくもありませんでしたから、その覺悟のほどもなみならぬものでありました。あとで、この冒險に協力した河童の話をききますと、最初は沼の上をなにかで掩つて月光をさへぎることを考へてゐたとのことです。しかし、それは大變な事業で、ほとんど不可能に近いことがわかつたので直接に月を摑む簡單明瞭な

手段に出たとのことでした。

北海道の河童殿、この勇敢な河童の決心をどう思はれますか。さやうな無理をしなくてもよいではないかと考へられますか。しかし、先覺者といふものはいつでも行動の最初のときには嘲笑されてゐるものですが、今度の場合だけは、彼は仲間中から感謝されました。コロンブスのときとは違つてゐました。もし成功すればその結果がどんなに仲間中をうるほすか、想像に絶するものがあつたからです。一匹の河童もよりつかぬ沼は魚やみじんこの天國でありまして、生み方題、殖え方題、まるで魚の中に沼があるみたいに、鯉、鮒、鯰などが水面にもりあがつてはねまはつてゐる始末でした。それなれば月の出ない晝間これを獲ればよいではないかといはれさうですが、それは傳說の掟が許しません。もし晝間沼にもぐつて餌をとれば、夜になつて沼が眼となつたとき、その簒奪者は睨み殺されてしまふのです。餌が欲しくば月を除くの一手といふわけです。

或る夜、彼は友人の協力を得て、これを實行にうつしました。友人が協力するといつても沼に飛びこむのは彼だけで、友人はものかげからその成果を見とどける役なのでした。これとて勇氣がなければできぬことです。眼になつた沼を見るさへ恐しいのに、ものかげに隱れてゐるとはいへ、始終、友人の行動を凝視するといふことはなみ大抵ではありません。しかし、友人は彼の犧牲的精神に感動してこの困難な役をひきうけたやうです。

苦心してこしらへた網を小脇に抱いて、彼は沼の中心へ月が點じられるのを待ちかまへました

網は龍舌蘭の纖維を裂いて編んだ目の細いもので、もしこれで伏せることができれば逃さない自信がありました。友人は彼の肩をたたき手を振つて激勵しました。成功を祈るといはれたとき、彼の瞳にはうつすらと涙が光つてゐたといふことです。月が沼に浮かんだとき、高い樹の梢からその水面の月に向つて一直線に飛び降りるといふのですから、あたかも嘗て日本空軍がやけ糞戰術のやうにして採用した特攻隊の突込みのやうなものだつたでせう。

時が來ました。滿月が東方の山からしづかに登つて來ましたが、やがて、それはぽつかりと沼のうへに影を落しました。睫毛のやうなくさむらのあたりから、すこしづつ移動して沼の中心に來ます。それを見ると、二匹の河童の體はもはや恐怖ですくむ思ひでした。巨大な眼と化した沼は瞳をぎらぎらとかがやかし、そこに隱れてゐるのは何者だ、ちやんとこの眼で見てゐるのだぞ、と嘲笑してゐるやうにすら思はれました。はじめは月が沼の中心に來るまで待つつもりだつたのですが、彼はもはや忍耐をうしなひました。凝視することの方が行動するよりずつとむづかしいことです。彼はほとんど絶望的な勇氣をふるひおこし、これまで立つてゐた榎のてつぺんから、呻きに似た掛け聲を發すると、一直線に、眼下の沼に向かつて風をおこし飛び降りました。兩手にしつかり網が持たれてゐたことはいふまでもありません。

はげしい水音とともに、沼の水面はかきみだされ、波紋が岸に向かつてひろがつて行きました。月に網をかぶせた河童は、狂氣のやうになつて、獲つたぞ、獲つたぞ、もう月はないぞ、と叫び

立てました。榎の上に待機してゐた友人の河童は恐る恐る眼をあげて、沼を見つめました。その友人の耳に、沼の水面にゐる河童の聲で、さあ、月はもうなくなつたぞう、沼は眼でなくなつたぞう、どこにも瞳はないぞう、といふ歡喜の絶叫がひびきました。しかし、友人はびつくりしたのです。どうしたことでせう？　勇敢な河童が網で月を伏せた筈なのに、その月は河童の頭の皿の中で光つてゐるのです。はじめからおづおづしながらの仕事でしたから、どちらの河童も冷靜さをうしなひ、その神經も錯倒してゐたにちがひありません。友人の河童は錯亂してしまつて、よせばよいのに、榎の上から沼に向かつて、月は君の頭の皿にあるぞう、とどなりました。どうして、かういふ戰慄すべき恐怖に、河童が耐へることが出來ませうか。恐るべき瞳の月が自分の頭の皿に入つたと知つて、河童は悶絶してしまひました。

北海道の河童殿におたづねしたいのは、ここのところです。勇氣に滿ちた哀れな河童は遂に死んでしまひましたが、かういふ犧牲といふものは一切が無駄事でせうか。無論、月が山の沼に瞳を點じるのは相かはらずです。今でもこの沼にはわれわれ仲間は誰一人寄りつきません。そして、この沼の豐饒さを發見した人間どもが、このごろでは晝となく夜となくやつて來て、鯉鮒を多量に釣りあげて歸るのを、指を銜へて傍觀してゐるばかりです。この人間どもに發見の機會をあたへたのは、月をとらうとした河童の網です。彼は月をとらへようとしたのに、網に入つたのはたくさんの魚でした。そして、彼が悶絶したまま息絶えて沈んでしまふと、水面に殘つた網の中に、

鯉や鮒などがぴちぴちとはねまはつてゐるのでした。この網は目が細かくてなかなか沈まなかつたために、翌朝、沼のかたはらを通りかかつた人間によつて發見されたのです。それからこの沼にどつと釣人がおとづれて來るやうになりました。人間どもは月が出て沼にうつつて、沼が眼になつてもすこしも恐れません。それどころか、そんな月夜をかへつてよろこんでゐるのです。

北方にはかういふことはないでせうか。御意見を聞かせて下さいますと幸です。

（十二月二十九日）

第二信

北海道の河童殿、私の長い手紙に對してどうして御返事を下さらないのですか。今日まで待ちましたが、なんの音沙汰もないので、實は少々殘念なのです、でも、きつと忙しいのにちがひありませんから、またこの手紙書きます。何故なら、前の事件と關聯してどうしても知らせなければならぬことが生じましたからで、前信とこの便りとにあはせて御返事賜はらばありがたいです。

河童が沼の月を取らうとして失敗したことは、人間どもに漁場を教へる癪な結果をもたらしたことは前便で傳へましたが、われわれ河童にとつても全然無駄ではなかつたのです。そのことが最近になつてやつとわかりました。それは私たちの藝術に大きなプラスをしたのでした。

失敗にもかかはらず、彼の犠牲がわれわれを感動させた度合は少からぬものがありました。どんな場合でも反對者はゐますから、彼の行動を暗愚蒙味、笑ふべき無智の然らしむるものだと嘲る者もありましたけれど、死をも恐れぬ冒險の動機が仲間へ幸福をもたらすためであつたことは明瞭ですから、彼の死を悼む者はたくさんありました。そこで藝術家たちはこれを讃へる制作をしたのです。作家は小說で、詩人は詩で、畫家は繪で、音樂家は音樂で、彫刻家は彫刻で。

これらの成果のうち、もつとも話題を投げたのは彫刻です。或る若い彫刻家が月をとる男を主題にしたものを、全精魂と全萬能とを傾けて制作にとりかかりました。彼はこの一作をもつて藝術界にデヴユウし、一大金字塔をうちたてる野心に燃えてゐました。しかし、その意氣ごみと苦心にもかかはらず、なかなか會心の作はできない模樣でした。彼ははじめにこれを藝術化するのは自分をおいて他にないといふやうなことを傲語したり、聲明したりしてゐましたから、いつか責任のやうなものが生じて苦しくなつた樣子です。いく度か試作をしてみたのですが、批評家は寄つてたかつて惡口をいふばかりで、彼の焦躁は日とともに深まり、今や神經衰弱から分裂症狀的狀態にさへなつて來ました。

彫刻家は月とり作業に協力した友人の河童を顧問にして、完璧な作品を作らうと心魂を注ぎました。しかし、彼にはたつた一つだけ不足のものがありました。それは萬能です。意慾、情熱、野心は申し分なく、宣傳もはつたりも充分でありましたが、肝腎の才能が足りなかつたために、

作品は幾十度作りなほしても滿足なものができませんでした。粘土をこねながら原型をつくりますと、批評家に一杯のませてこれを示しますが、どんなに御馳走になつてもそれは義理にも褒めやうがありません。

彫刻家の立場はだんだん苦しくなりました。こつそり作つてゐたのならそんなこともなかつたのですが、大威張りではじめたので立つ瀨がなくなつて來たのです。さうして、遂に苦境におちいつた彫刻家は、或る日、自殺してしまひました。しかし、その後が大變でした。河童藝術界に大問題が起つたのです。

彼は遺書を書いてゐますので、覺悟の離世たることに疑ひありませんが、その遺書がまた衒氣に滿ちたもので、誰一人自分の進步的藝術を認めないとは、ことごとく盲目ばかりだ、自分は天國に行つて自分の藝術の價値を問ふ、もう諸君など相手にしない、といふやうな文面なのでした。彼の屍の横はつてゐたアトリエに知人が葬ひに訪れました。友人の藝術家も批評家もやつて來ました。さうして、彼等はおどろいたのです。アトリエの中央、彫刻家の遺骸のかたはらにある一個の彫刻、なんともいひやうのない不思議な形、異樣に複雜で奇怪な線と圓、これまでの古くさい形式や技術を完全に破壞してゐる斬新警拔な構圖、いかにも恐しい眼となつた沼から、瞳の月を除かうとする河童の情熱や犠牲の感動が、その彫刻のなかに、一つの抽象の形として表現されてゐるやうに見えました。一人の高名な批評家が、これはすばらしいと叫びました。その批評家

はうるさいことで有名な男で、死んだ彫刻家をもつとも手きびしくやつつけてゐたのです。彼の眼には一流の藝術作品に接したときに浮かぶ恍惚としたものが溢れてゐました。すると、そこになみゐる連中はその批評家に追隨して、これは傑作だ、神品だ、新藝術の誕生だ、彼はやつぱり天才だつた、と、口々に述べはじめました。

北海道の河童殿、いかがですか。死んだ彫刻家は天才といふことになり、その奇妙なアブストラクト風の作品はわが藝術界に革命的影響をもたらしたのです。死して新風を送つたわけです。恐しい眼の沼のために、二人の有爲な河童が命をすてたわけですが、どちらが偉大でせうか。しかし、後者の場合、殘念なことを一つつけ加へておかねばなりません。それは人々を驚歎させた彼の最後の作品は、制作されたのではなくして破壞されたものだといふことです。どんなにしても滿足なものの完成できない彫刻家は、悲しみと怒りとに燃えて、それまで作つてゐた彫刻をめちやめちやに手や槌で、ぶちこはした後、毒をあふいだのでした。その破壞されたものが新藝術の傑作として認められたわけです。

北方にはかういふことがあるでせうか。今度は御返事下さいませんか。

（一月二十日）

第三信

どうして返事をくれませんか。あんまり失禮ではないですか。僕はわれわれ河童の重大問題について、北方の河童族の意見を徵したのです。それといふのがこれまでの疎遠をあらためて親善友交を共にしたいと考へたからです。それに對して一言も洩さぬとは、禮儀を知らぬにもほどがある。わけを聞かせて下さい。北方族には、われわれ南方族が遭遇したやうなテーマについてなんらの問題はないのですか。當世流行のエロ話、河童も行儀がわるくなつて混血兒をたくさん產むやうになつたり、氣が荒くなつて暴力沙汰ばかり起してゐるやうな話題を提供すれば、返事をくれるのですか。いづれにせよ、なんとか意志表示をしていただきたいものだ。

（二月八日）

第四信

今日まで待つたが、まだ返事がない。あきれてしまつた。うんともすんともいはぬとは何事だ。我慢してゐたが、もう勘忍袋の緒が切れさうになつた。四通目のこの手紙によこさなかつたら、お前とは絕交だ。

（二月二十八日）

第五信

北の河童の馬鹿野郎、貴樣なんかと誰がつきあふものか。

（三月十日）

☆　☆　☆

369062

北海道に、春が來た。大雪山の雪は消えなかつたけれども、マツカリヌプリのいただきに青草が萌え、石狩川はにはかに水量を增した。凍結してゐた湖や沼も溶けて、春の花々はいたるところの山野に咲きみだれた。

雪どけの水が地底を爽やかに流れる音を聞いて、河童は冬眠から醒めた。十二月はじめから三月の終りまで、北海道の河童は冬眠する。河童は寢ぼけ眼をこすつた。あたりを見まはした。かたはらに蓮の葉の手紙の束がある。その一番上の一通をもの憂い手つきで取つた。讀んだ。第五信目である。河童は血相を變へた。怒りで甲羅をがちがち鳴らした。積んである手紙を蹴とばしずたずたに引き裂いた。それから、ペンを取りあげると一氣呵成に一通の手紙を書いた。

「南の河童の馬鹿野郎、貴樣なんかと誰がつきあふものか」

胡瓜と戀

崖の傾斜がひどかつたのか、足場がやはらかかつたのか、それとも、自分が疲勞の極に達してゐたせゐか、おそらくその三つがいつしよになつてのことであらうが、ともかく或る日、河童は轉んで、落ちたのである。空と樹と花と草と湖と、周圍にあるものが急速に廻轉し、逆になり、横になり、縱になり、さうして、まつ暗い深い穴のやうなところに、したたかに腰の蝶番を打つてへたばつた。しばらくは息ぎれがし、眼まひがして、動くこともできなかつた。たたきつけられ、そして電車に轢かれた蛙のやうなぶざまな恰好で、その濕氣の多い穴の底に、眼をとぢたまま、じつとしてゐた。氣が遠くなる思ひであつたが、强ひてもはや氣力を恢復しようとも思はなかつた。このまま死んでもよい、——さういふ諦觀がいまはこころよいもののやうに、敗殘の河童の身內を逆にあたたかくするやうに思はれた。落下したことは偶然であつたが、その運命はすでに定められてあつたのだと肯定し甘受するつもりである。どうせ來る死がすこし早く來ただけだと、河童は靜かにその恩惠へ感謝するのである。

永い旱魃と飢饉だつた。すべての食糧をうしなつた河童たちは、ついには輕蔑してゐた昆蟲類

までも食餌にするやうになつて、墮落した。土壇場になつて獸と化するのは人間ばかりではない。すくなくとも不倫と破廉恥とを戒律として、人間を哀れんでゐた河童たちも、たへがたい飢饉の試煉のまへに、やはり人間と同じ墮落の道程をふんだ。多くの者がたふれた。そして仲間のものを奪ひあひ、仲間をたふし、つひには、仲間を食ふ者さへあらはれて、平和であつたこの森も、地獄の樣相を呈するにいたつた。殘つた者は、亡靈のごとく、靑ざめ、痩せおとろへ、背の甲羅は剝げ、頭の皿の水もかわいた。皿の水の盡きることは死を意味する。しかし、必死の神塡も、すでにその源泉のものの枯渴のために、徒勞に終ることが多かつた。日に日に生を終る者が增した。雨を拒否する殘忍な太陽へ、恨みのまなざしを投げて、多くの河童たちが死んだ。

かれもまた死の一歩手前にあつたのである。しかし、最後の一點までと生へ執着する不可解な慾望が、もはや歩行も困難なほど憔悴しきつてゐた河童を、なほも、自殺の決意からは遠ざけてゐた。もはや何度も無駄をくりかへしたにもかかはらず、もうひとつ丘を越えてゆけば、なにか食物があるのではないかと、あたかも、數萬年の昔、地層が堆積していつたほどの緩慢な速度で、かれは地上を移動してをつたのであつた。さうして、元氣な時分ならけつして落ちる筈のないやうな傾斜面から、砂や小石ころとともに轉落したのであつた。犧牲にも慾望にも限度がある。ここにいたつて、かれももはやただひとつの可能たる死をよろこんでたぐりよせる氣にならざるを得なかつたのだ。

河童は死なうと思つて眼をとぢた。多くの仲間たちも、こんなにして死んだのであらうと思つた。悲慘な狀況になつて以來、あふ機會もうしなつてゐた女も、ひよつとしたらこんなにして、もうこの世から去つてゐたのでもあらうかと思つた。しかし、そのことすら、もう彼の感情を動かさなかつた。たそがれて來たらしく、いよいよあたりは暗くなる。だんだん氣が遠くなつてゆくやうで、もう長いことはあるまいと、他人ごとのやうに考へてゐた。風のさやぎがかすかに耳にきこえるばかりだ。

ところが、せつかくの彼の希望にもかかはらず、死神は好都合におとづれては來なかつた。そればかりではない。河童は疲勞困憊してゐた筈であつたにもかかはらず、ふいにバネ仕掛のやうなはげしく活動的な跳躍のしかたで、穴の底に飛びおきたのである。狂氣のまなざしになつた河童はあわてふためく樣子で、うろうろとあたりを見まはしはじめた。鼻をひくつかせ、犬のやうに、そこらぢゆうを嗅ぎまはつた。絕望の表情のなかに、聲を發するほどの希望と歡喜のいろがあらはれて、彼の行動は憑かれたもののやうだつた。

「やつぱり、さうだ」

河童は喊聲をあげた。あまりのよろこびのために、眼まひがして、一度はたふれた。起きなほると、穴の底を水かきのある手で掘りはじめた。そのとき、氣づいたのだが、落ちた穴の片側は自然の土手ではなくして、板片を組みあはせてつくつた壁のやうなもののうへを、土と草とが掩

うてゐたのであつた。食物の貯藏庫だ。もう疑ふことはできないと、すでに死をふきとばしてしまつた河童は、大陸を發見したコロンブスよりも歡喜にもえて、もう嘴からはだらだらと牛のやうに涎をたれた。

「胡瓜倉だぞ」

大好物の胡瓜のにほひをあやまる筈はない。先刻、死を覺悟して横たはつてゐた鼻に、幻のやうに、煙のやうに、重々しくただよつてしみこんで來たにほひ、長い間ありつくことのなかつたために、ほとんど忘れようとしてゐたにほひ、その强烈なにほひのために、なくなつてゐた身體に突如力が湧きいで、跳躍したのであつた。そのにほひの出てくる、小さな穴を發見すると、必死の掘鑿をはじめたのだ。

大して、骨の折れることではなかつた。短い時間で、驚歎すべき成果を獲得した。想像したとほり、板があつて、それが朽ちてゐるのだつた。河童はその腐蝕してゐる部分に、痩せていよいよ鋭くなつた爪をたて、これをひきはがした。破つた。さうして、やつと身體のはいれるだけの穴にすると、身體をかがめてもぐりこんだ。青黑く衰へ、剝げかかつている背や肩、足腰に、とげとげしい穴の周圍がさはつて、燒傷のやうな痛さ熱さを感じたが、まるで胡瓜のにほひの釘ぬきで引きぬかれるやうに、その狹い入口を通過した。

なんといふすばらしい光景か。河童はもう夢中だつた。なかはまつ暗であつたが、夜目の利く

河童には、すべての狀況は明白だつた。胡瓜の山だ。ふつくらとした、形と色のよい新鮮な胡瓜が、見あげる天井までも積みあげてある。何千何萬あるかわからぬ。しかし、沈着な計算などしてゐる餘裕はなかつた。異樣な狂喜の聲を發した空腹の河童は、おどりかかるやうに、手近のところの胡瓜をつかむと、ばりばりと食べだした。眼を白黑させ、咽喉をつまらせ、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、……たちまち胡瓜の山を全部胃袋のなかへ移住させてしまふやうな勢だつた。しかし、犧牲や忍耐に限度があるやうに、胃袋にも限度がある。胃袋はもちろん、食道にも、口中にも、つかへるほどつめこむと、河童はがつかりしたやうに、尻餅をつきためいきを吐いた。それから、やつと、うれしさで、涙をながした。自分の生きることがわかつたのだ。

妙なけだるさを覺え、眠氣をもよほして來ると、横になつた。天からあたへられた幸運に感謝し、わづか十分ほど前に妥協しようとした死へはげしい憎惡をたぎらせた。崖から落ちたときには、しまつたと思つたのだが、落ちなければこの幸運にめぐりあへなかつたことを考へ、死と生との別れ目のあまりの際どさに、戰慄をおぼえた。しかし、やがて滿足のうちに、この日ごろ嘗て知らなかつたこころよい熟睡に落ちた。

それから、何日かが過ぎた。食糧のなかに埋まつた河童は、こころゆくまで胡瓜をうちくらひ、めきめきと肥え太つた。別人といつてよかつた。夢のやうである。夢ではあるまいか。夢ではなかつた。たしかに現實であつた。河童の日々は、胡瓜とともに明け、胡瓜とともに暮れた。健康

が恢復してくると、思考も正常になつてくる。健全な精神は健全な身體に宿る、といふのは、人間の世界ばかりではなかつた。すつかり健全になつた河童は、やがて、愛とか、正義とか、社會とか、道德とか、詩とか、いふやうな、贅澤な思想をとりもどした。すると、彼は自分の幸福の根據について、すこしづつ疑念がわいてきた。

いつたい、この胡瓜はたれのものだらうかと、まづ考へた。蓄積した者のあるのは明確である。自分たちの仲間だらうか？　人間だらうか？　それはわからない。しかし、所有者のあることは否定できない。たとへ、これが祕密に蓄積されたものとしても、持主の存在は嚴としてある。さすれば、自分は他人の財產によつて生活してゐる寄食者である。しかも、許可を得てゐるわけでもないとすると、窃盜罪、横領罪にもなりかねぬ。しかし、この隱匿物資の所有者といふのは、時日が經過してもあらはれない。忘れてゐるわけはあるまいから、もしかしたら死んだのか。だがどつちでもよい。死に瀕してゐる者が多少の施しを受けることは當然だし、地上では多くの者が餓死しようとしてゐるのに、こんなにも多量な、出しさへすれば數ケ月は仲間の食ひつなげるほどの物資を隱しておくことは、すでに惡だ。惡漢が自分をとがめることはできない筈だ。そんならと、かれは胸を張る。もう一段おしすすめて、この物資を仲間中に配付してしまつてよいではないか。これこそ愛といふものだ。そのとき、かれの健全な精神のなかを、黑い毛ばだつた影のやうなものが通りすぎる。はつとして、かれは卑屈なごまかし笑ひをうかべ、臆病さうにあたりを見る。——そんなら、仲間をうちすて、のうのうと自分だけで胡瓜を食べ暮らしてゐるお前はなにものだ？　さういふ聲がきこえたのである。河童はしかし確固たる辯護の理由を持つ。あまりの空腹、飢餓のため、正當の神經がしばらく歪められてゐたのだ、と。それにあやまりはないのである。そこで、健全な身體とともに健全にかへつたかれの精神は、キリストのやうに、愛、正義、社會、道德と、無限に擴大してゆくのであつた。

いくら食つても食ひつくせぬほど、まだ、胡瓜はある。眺めた河童は滿足して、胸を張つた。かれの賞讃すべき博愛の思想が、自分では氣づかなかつたとしても、この分量から割り出されてゐることはいふまでもない。わづかしかなかつたならば、どうであらう。ともかく自分が生きるといふことが大切だ、それ以外の眞實はない、一切の思想は虛僞であり、感傷にすぎぬ、と考へるにいたるであらうことは、自明の理である。あらゆる思想が根本において物質的であることは、つとに辯證法の證明するところである。幸にして、胡瓜の豐富さによつて、エゴイストとなることをまぬがれた河童は、救世主のやうな感動にひたされながら、入口へ近づいた。歡喜と賞讃をもつて自分を迎へ、これまではあまり大切にはしなかつた自分の足元へ膝まづく仲間のことを考へて、おさへがたいほくそ笑みが、嘴のあたりに痛がゆい感覺をおこさせながら、うづうづとほぐれあがつてくるのを如何ともしがたかつた。

意氣揚々と入口を出ようとした河童は、突然、驚愕の叫びを發して、立ちすくんだ。入口とい

つても、數日前に、自分が掘つてもぐりこんだ穴である。そのときは、無理矢理そこから身體を押しこんだのだが、いま出ようとして見ると、まつたく寸法があはないのだ。入るときは、痩せこけてゐたためにどうにか入れたのだけれども、いまは丸々と肥え太つてゐるために、首を出すと、もう肩や胴がつかへて出られない。足から出すと、腰がつかへる。當惑した河童は、他の出口を探した。すべて頑丈な岩石づくりの倉庫で、どこにも出口はない。入つて來たところだけが、岩の間に板をはめてあつたのだ。ひろげてみようと、力をこめて岩を叩いてみたが、鋼鐵の堅さのために、手の甲が破れる始末だつた。河童はしだいに狼狽しはじめた。どこから出られないかと、狂氣のやうにかけめぐつた。積みあげてある胡瓜を全部移動させてみたが、どこもかも、堅甲な岩であつた。地もすべて岩だつた。

「なんたることか」

へとへとに疲れた河童は、胡瓜のなかに尻餅をついた。みづからの暗愚が、いまさらのやうに悔まれた。思慮淺くして失敗したことはこれまでもたびたびであつたのに、またしても同じ失敗をくりかへした。しかも、ただひとり岩の穴倉にとぢこめられてしまはうとは、かくなれば、これまで自分を養ひ、生命をあたへてくれた胡瓜がかへつて恨めしいのであつた。

河童は幸福といふものについて考へた。不幸といふものについて考へた。空腹について考へ滿腹について考へた。それから、いつか、心身ともに、奇妙な倦怠にとりつかれてゐることを悟つ

た。すべてから遠ざかり、ただ胡瓜とばかり暮してゐる單調な生活、右をむいても、左をむいても、胡瓜ばかり。いかに好物の胡瓜といへども、もはや形にも色にも、そして味にも食傷してゐた。永遠の胡瓜の氾濫。これは一種の刑罰ではなからうか。囚人へのもつとも苛酷な刑罰は、もつとも單純な仕事をあたへることだといはれる。囚人に重勞働を課し、今日は石切山の石はこび、今日は斷崖のうへの小屋がけ、今日は猛獸の出る森松の伐採とこきつかへば、囚人どもは大よろこびなのだ。二つのバケツをならべ、一つに水をみたし、片方に移させる。それをまた元へもどす。また、移す。この單調な動作を三日も續けさせたら、囚人は自殺するのである。されば、河童は明瞭に胡瓜の刑罰をうけたのだ。胡瓜は河童の精神を錯亂させようとして、そのよい形、色、味を、この穴倉のなかに富饒に充滿させてゐる。

河童は出口に行つて、何度も脫出をこころみた。無駄であつた。身體はほとんど穴の二倍である。自分の健康が恨めしく、かれは艶のよくなつた身體をくやしまぎれに引つかいた。引つかくくらゐではなにもならぬ。身體を半分に削らねば駄目だ。

「おうい、誰か來てくれえ」

首だけ出して叫んでみたが、返事をする者はなかつた。外は眞晝らしく、太陽の光線が穴の底からさしこんではゐたが、穴の岩が厚くて、外のなにものも見ることはできなかつた。

二三度どなつた河童は、はつとして飛びすさつた。なんのための絶叫なのか。たれが來たつて

しかたはないではないか。さう氣づくと同時に、狼狽と絶望とのなかにも、狡獪な計算が胸をかすめたのであつた。誰が來ても出られぬとすれば、仲間を呼ぶことは利益にならぬ。ともかく出られる工夫のつくまで、この胡瓜は自分の食糧にとつておかねばならぬ。哀れな河童は西瓜のやうに丸くなつた膝をかかへて、胡瓜のなかにうづくまつた。その顔はすこぶる深刻の狀をあらはしてゐたのに、秋風の吹きこんでくる穴の口を凝視してゐた河童は、突然風船玉が破裂したやうに、體をゆすつて笑ひだした。鞴(ふいご)のやうに嘴を鳴らして、とめどなく笑つた。絶望のあまり、笑つてでもみなければやりきれなかつただけの話である。笑ひやむと、べつべつと唾をはきちらし、沈痛の面持で、うなだれた。

出るための、たつた一つの方法がある——あまり長く考へずして、自然のやうに、河童はその唯一の方法といふのを氣づいてゐた。それは、昔のとほりに痩せればよいのだ。しかしこの自明の方法の實行が、はたして可能であるか、どうか、自信を持つことができなかつた。痩せるためには食はずに居ればよい。なんでもないことのやうであるが、その忍耐にたへられるか。飢饉といふ外部からの力で、やむなく食を奪はれ、ほとんど死の直前まで來て、やつとこの穴を拔けることができたのだ。その苦痛は言語に絶してゐた。それを二度くりかへす勇氣があるか。しかも、眼前に豐富な食糧があるのに。河童は瞑目して嘴を嚙んだ。運命の皮肉に、身體は不思議な怒りにふるへた。そんならここに胡瓜がある間、これを食べつくし、皆無となつてから自然にまかせ

て、痩せてゆくか。それは何時のことか。河童はもはや胡瓜の刑罰に恐怖と戰慄とをおぼえてゐた。いつときも早く、胡瓜のもとから離れたい强烈な願ひをいだいた。では、意識的に、絶食によつて痩せるほかはない。河童はつひにさう決意して、くやしさで涙をたらした。

たへがたい生活がはじまつた。空腹を制御した英雄の歴史が、たとへばガンヂーや、聖セバノスチンやが、わづかにかれを勇氣づける。何日かが經つた。かれはすこしづつ痩せてゆくのを感じ、ときどき、穴に寸法を合はせに行つた。はげしい空腹が襲つて來ると、猛然と食慾とのたたかひがはじまる。胡瓜の魅惑的な形や、色や、にほひやが、惡魔のやうに、かれを誘惑する。河童は忍耐力をうしなつて、胡瓜を嚙つた。そのことがくりかへされて、かれの悲痛な願望は達成せられる目途を失ふもののやうだつた。

狂暴となつた河童は、つひに最後の決意をかためた。胡瓜があるからいけないのだ。手のとどくところになければよい。そこで穴の口から捨てようとしたが、外はせまい穴の底で、豐富な胡瓜の捨て場となる資格はなかつた。かへつて穴をふさいでしまふことになる。河童はすべてから見離されたと思ひ、ころげまはつて慟哭した。そして、やはり最初の決心どほり、故意の空腹、人工的飢餓の試煉に耐へようと、さらに勇猛心をふるひおこした。

そこへ、風のごとく、かれの耳をついたものがある。聲だつた。河童は飛びあがつた。穴の口へ駈けつけた。うす暗い外に、なかをのぞきこんでゐる顔があつた。嘴も、頭の皿も、頬も、ひ

からびはてたむざんな顔だつた。どんよりと曇つた眼にわづかな生氣があるきり、他は屍骸に異らなかつた。しかし、かれは長く見なかつた仲間を見て、動悸のために身體中が震動してゐた。

「あなたですわね」

ささくれだつたやうに乾いてはゐたが、その聲をどうして、聞きちがへよう。彼女であつた。かれの女であつた。

「君か」

感きはまつた河童は、手をさしだした。丸々とふくらみ、血色のよいかれの手にくらべて、女の手はまるで、ひからびた唐黍の莖のやうだつた。

「あなたを探してゐました。こんなところにいらつしやらうとは。會ひたうございましたわ。何日か前に……何日前だつたか、もう死の一歩手前で、記憶もにぶつてしまつて、わからなくなりましたが……あなたのお聲をきいたのです。どこからかわからないけど、でも、あなたが生きてをられることを知つて、どんなにうれしかつたか。あたしはそのお聲をたよりに、參りましたのですけれど、歩くことはできず、這ふのもやつとで、今までかかりました。……お會ひできて、うれしい。さ、そんなところにゐないで、早く出て來て下さい」

女のよろこびにふるへる聲をきいて、かれの胸はうちひしがれた。沈痛な聲で、かれは答へた。

「僕は出ることができないのだ」

「何故？　何故？　どうして、あたしのところへ來て下さらないの？」

「それが、行かれないのだ」

何故であるかかれにはそれを説明する勇氣がなかつた。このときになつてすら、かれの自尊心は戀人のまへに、賤しさを告白することを恥ぢたのである。

「そんなら、あたしが參りますわ」

たまらなくなつたらしい女は、痩せた身體を横にして、穴の口からもぐりこもうとしはじめた。

河童はおどろいて、これを押しとどめた。

「はいるな」

「何故？　何故、おとめになるの？」

「いや、はいつてはいけない。はいつたら、お前も出られなくなる」

「出られなくなつたつていいわ、あなたと一緒なら、……」

憔悴しつくした女は、もう鼻も利かなくなつてゐるらしく、彼女の慾望が胡瓜になく、純粋に戀人への慕情のみであることは理解できた。嗅覺の喪失がはからずも女の眞情を證明したことは、かれにとつてはよろこびといつてよかつたかも知れない。しかし、いま、神經衰弱になつてゐた河童には、そんなことよりも、もつと恐しいことの方が、頭にこびりついてゐた。

「はいるな。ここは死よりもつと恐しいところだ」

かれは必死で、女を押しかへした。
「あなたと一緒なら、死なんて、なんでもないわ」
「そんなセンチメンタルなことをいふな。お前は知らないのだ。ここには、……空もない。太陽もない。雲もない。月もない。花もない。木もない。湖もない。酒もないのだ。……あるものは胡瓜ばかりだ」
「胡瓜？」
女の聲がいきなり金屬板をたたいたやうにひびいた。
男は一本の胡瓜をつかむと、穴の口からさしだした。異様な歡喜の叫びとともに、胡瓜はもぎとられた。しやきしやきとむさぼり食ふ音がきこえた。女の命を救つた、よかつたと、かれもはつとする思ひだつた。
「もう一本」
河童はさしだした。つぎつぎに請求され、いはれるままに出した。かぶりつき、がつがつと胡瓜を嚙る音。はじめは戀人の空腹を満たすことに満足したかれも、やがて、しだいに、味氣なく、ほろ苦いものを感じはじめた。死に裏づけられたための純粋な戀情が、胡瓜による生命の復元とともに、どう變化してゆきつつあるか。もう女は胡瓜にだけ用があつて自分には用がなくなつたのではないか。

「もつと、頂戴」
なほもさういふ女の聲に、河童は突然奇妙な嫉妬を感じて、投げようとした胡瓜をつかんだまま立ちすくんだ。ほどこしにも限度がある。満腹は贅澤な思想を生む。女は自分から胡瓜を奪ひとり、べつの男のところに持つて行つてやるのではないか。穴から出られなくなつた自分より、自由の天地にゐる他の男の方が、有用にきまつてゐる。
「もつと、頂戴よ」
催促する女へ、かれは邪慳に、しかし、せつなげに叫んだ。
「もうない」
「あるわよ。わかるわ。そんな慾張りいはないで、もつと頂戴よ」
慾張りといふ言葉は、かれの腦天を打ちくだいた。
「そんなに慾しけりや、入つて來い」
「はいるわ」
しかし、満腹した女の身體は、もはや、岩の穴につかへた。

李　花

花はうつくしい。それはだれでも知つてゐる。そこで花を愛する。花が咲く。たそがれの薄靄のなかに、光るやうに白く咲く。風にもろい花ほど美しい。李の花は風にもろい。李の花は美しい。

山のなかに、なにか、おそろしいものが棲んでゐるといはれる淵があつた。その淵のそばを、みんなは避けて通る。夜はたれも通らない。かんかんとなにもかもあきらかに陽が照るときだけ、ひとびとはその淵のよこの雑草のしげつた道を通る。そのときでも、なるだけ、山の端に寄つた方を通り、淵に影をうつさないやうに注意をする。道がせまいので、それはなかなかむづかしい。しかし、その淵のみちはそんなに長くはないし、駈けぬければ、たいてい危険はない。その淵にゐる魔のものといふのが、頭のはたらきが敏活でなく、間が抜けてゐるものにちがひないといふことは、そのやうに駈けぬければ、たとへあやまつて淵に影を落しても、つかまつたことはないことでわかる。通りすぎたあとで、水のなかからなにか浮きあがる水音がし、奇妙な聲がするのだが、それは振りかへつてみたものがないので、その魔ものの正體はたれも知らない。

淵に主がゐるといふことは傳説であるが、そのやうな淵になにもゐなくては、その青々とよどんだ意味ありげな水の色にも、のびるままに生ひしげつた水邊の葦の葉むらにも、しづかな晝、そのとまつた重味で葦の葉のさきを水にひたし、そこから小さな波紋を淵いつぱいにひろげさせてゆく頭の赤いおはぐろとんぼにも、するどく鳴いて飛ぶよしきりにも、水のうへに浮いてかたまつた朽葉にも、――つまり、そのやうに古色蒼然とした淵全體に、なんの美しさも、莊嚴さもないのである。なにかゐるといふことによつて、淵はいよいよ美しく、その價値をたかめる。

河童たちはこの淵の魔ものをおそれた。河童たちはこのやうな立派な淵がありながら、それに棲まなかつた。傳説を尊敬したのである。その淵からすこし離れたたわいもない汚い池に、河童たちはむらがり棲んだ。河童たちの棲んでゐる池は、その淵の五分の一もない。馬の足あとに水のたまつたのにさへ、三千匹は棲息することができるゆゑ、その池がけつして狹くて不自由といふわけではなかつたが、河童たちは、その淵の水の色をうらやんだ。その淵のすみ心地のよさは、水の色を見ればすぐわかる。しかし、河童は傳説の掟をつねにまもる。その淵のなかに主がすでに棲んでゐて、その傳説によつて、その淵が高名であるときに、それを攪亂することは、仁義にもとる。また、その淵の主とて、河童たちのゐる池に對してはなんらの意志表示をしないのだ。しかし、ほんたうは、河童たちはその淵をおそれたのである。

あるとき、池にゐるいつぴきの河童が道をうしなつて、その淵のほとりに出たことがある。うつくしい月にさそはれて、空をとびまはり、うかうかとあそんでゐるうちに疲れたので、地に降りた。そして、ふと氣づくと、日ごろ敬遠してゐた淵が目のまへにあつた。しづかによどんだ黒い淵のまんなかに十六夜の月がはつきりとうつつてゐた。はつとした刹那、自分のすぐ足もとから、くろい小さなものが淵のなかにとびこんだ。ぽちやんと音がして、水面から消えた。その水音はあたりの森にこだました。ところが、その飛びこんだものは、相當のいきほひで水を破つたにもかかはらず、淵の面にうつつた月のかたちは、まつたくくづれず、それは月のかげではなく、月自身がそこにあるやうに、動かなかつた。池の河童はおどろきとおそれとに、からだがふるへ、背の甲羅がしばらくの間がちがちと鳴りやまなかつた。足も自由にうごかず、やつと池にかへりつくことができた。それ以來、池にゐる河童たちに、いつそう、ふかく淵をおそれるこころが兆した。

池の河童たちは、こよなく花を愛した。白い花がうつくしく、また風にもろい花ほどうつくしいことは、はじめに書いたとほりである。李の花がうすみどりのさやにつつまれたつぼみをひとつづつやぶつて、いちめんに星をちりばめたやうに咲くと、それは遠くからでもまぶしいくらゐに見える。またそのたとへやうもないふくよかな香りは、風にのせられて、はるかの野のはてに

までひろがる。

花の好きな池の河童たちは、李の花のさきみだれるころになると、どうしても、よごれた赤どろの池の底にぢつとしてゐることができなかつた。河童たちは、つぎつぎに池をすてて、花のほとりに出た。思ひ思ひに、ひとりづつ、あるひは、二三匹づつつれだちながら、李の花のところへ行つた。

しかしながら、ここに、ひとつ困つたことがあつた。それは、その李の木のあるところが、魔のゐる淵から、あまりはなれてゐなかつたのだ。そのうへ、李の花のいちばんきれいに咲いてゐるところの見えるのは、もつとも淵に近い場所であつた。そのやうな意地のわるい配置にもかかはらず、河童たちは、なほも花を見に行つた。淵をおそれるこころもさることながら、その花のうつくしさは淵への恐怖さへ征服したのである。また、飛翔することのできる池の河童たちは、その淵をおそれるこころは深いとはいへ、淵に影をおとすことなしに、迂回して、李の花のところへ行くことができるのである。河童たちは、こころゆくまで花のうつくしさに醉ふことができた。きらめき光るやうな白い李の花のまはりに群れ、その香に醉ひ、うたをうたひ、たはむれた。あまり遠くないところに、鏡のやうに、動かず、淵はしづまりかへつてゐた。毎日のごとく、池の河童たちは、李の花のまはりをさまよひ暮した。

白い李の花が、その最大のうつくしさを發揮するときが來た。風にもろい花ほどうつくしい。

ある日、西の空のなかから吹きおこつて來た風が、李の花を散らしはじめた。ふきおとされる星くづのやうに、あるひは、大束の雪のやうに、ぱつと散りたつ李の花は、はらはらと舞ひながら、吹きあがり、吹きながれていつた。その落花のさまのうつくしさに、河童たちはどつと歡聲をあげた。花びらは風のまにまにながれ、あまり遠くない淵の方へ、散つていつた。花びらは、淵の水面にはらはらと落ち、まつ青な水面に、描かれた模樣のやうにあざやかに浮いた。みるみる青い淵の面が、花びらで埋められていつたのである。

すると、それまでは靜まりかへつてゐた水面が、にはかにざわめきはじめたと思ふと、水面から無數にあたまをもたげたものがあつた。さうして、それらの動物たちは、水面にうかんだ李の花びらをたなごころにすくひ、奇妙なよろこびの聲を發し、どよめきさわいだ。はじめ、李花のほとりにゐた池の河童たちは、花びらが淵の水面に散りおちてゆくときから、ふたたび淵へのおそれのこころが、しだいに胸にわきはじめてゐた。花にみとれて忘れてゐた心におもひいたり、にはかに地に降りたつと、土堤のかげに身をひそめて、恐怖のまなざしをもつて淵の方を凝視した。しかし、その恐怖のこころの底にも、この花に對して、日ごろ、自分たちが尊敬してゐる淵の魔ものが、いかなるふるまひをするかといふ好奇と期待の心は持つてゐたのである。すると、かつて、一度も見たこともなかつた淵の魔ものが、水面をさわがして姿をあらはした。さうして、その淵の魔ものも、また、花を愛する心においては、すこしもかはりのなかつたことがわかつた。

このやうにして、池の河童たちと淵の河童たちとの交遊がはじまつた。故もなく、おそれてゐたことが、いまは笑ひばなしとなつた。それはおたがひがすこぶるはにかみやであつたからであらう。淵の魔ものが同じ河童であつたとわかると、それからは、池の河童たちは、われさきに、水のうつくしい淵にあそびにいつた。また淵の河童たちも、池にやつてきた。さうしてよく今までこんな汚い池にゐたものだといつて、皮肉な態度ではなく、その謙虛さと忍耐づよさとを稱揚した。まへに月の夜、淵の河童が、月にうつつた月かげを破らずに淵に沈んだことに非常におどろいたことをはなすと、淵の河童は、それは、月のある空からなにかが急に降りて來たので、自分の方がびつくりしたのだと答へ、自由に空をとぶことのできるのを、非常に羨んだ。さうしておのおのの技術をほこらず、兩方の河童たちは仲よくした。しかしながら、この交遊が、また奇妙な倦怠から、いくらか疎遠になることもあつた。それは倦怠ではなかつたかも知れない。池の河童たちは奇妙なもの足りなさにとらはれた。自分たちがおそれてゐた淵の正體がわかつたために、傳說の莊嚴さが失はれたからである。それは、たかが、自分たちと同じ河童であつた。その淵の魔ものがなにかわからぬときに、その傳說を胸いつぱいに持つてゐたときの、緊迫したこころがどこかへ行つてしまつた索然たる感覺は、どうにもやりきれぬものであつた。傳說の眞實が實驗でないことは明らかだ。もう淵のそばをおそれて通る必要がなくなつたことが、よろこぶべ

きことであるとは、たれも考へない。さうして、池の河童たちは、やがて、このやうな結果をもたらす役目を果した李の花びらをも、もう、うつくしいとはたれもいはなくなつたのである。

珊瑚礁

むかし、勤勉な河童があつて南に行つた。太陽はあかるくまぶしくきらきらと、うすもやのかかつてゐる南方の空氣のなかにみなぎりあふれ、光りのいとが無數の金粉のやうにもつれて、おほらかな潮のかをりのなかにしみこんでゐるやうな場所では、どこか深い海のそこで、いくつもの海洋からながれこんで來る海流がふれあつて立てる音がおどろおどろしくひびくのである。あつさにも馴れて來ると、絢爛たる南の花々のうつくしさが眼に映りはじめた。すべて大づくりなゆるやかさをもつて、地面にまでその重たい花びらをたらしてゐる。早口でいへば舌を嚙むやうなめづらしい植物の名前をおぼえるのに、勤勉ではあるが暗愚な河童はひと苦勞した。さうしてあまりにきびしさのない水のあたたかさに、すこし心がゆるんで來たことを自分でも氣づいたときには、蓄積の想念にたいするかすかな疑念がわきはじめてゐたのである。

南方へ移住して來たのは河童だけではなかつた。花々の誘惑をうけて多くの蜂のむれが蜜をあつめるためにやつて來た。おびただしい花々のなかに豐富な蜜があつた。蜂はよろこんだ。精勵

なる作業がはじまつた。河童はきらめく光りのなかを、まひあがる花粉のごとく、多くの蜂たちが蜜を蒐集してゐるすがたを晝となく夜となく見た。河童は自分の棲みかをさだめるために、縹渺とした果てからまつ青な水をうちよせて來る海濱に出て、珊瑚礁のあひだに沈んだ。眞紅の枝をはりめぐらしてゐる珊瑚の松を縫うて、黄いろい縞のある平べつたい魚や、口ばかり大きくて尻尾のない長い魚や、顔ぢゆう眼ばかりのやうな丸い魚などがしきりに遊弋し、闘志をもつたとげのするどい魚類がときをり珊瑚の森林のなかではげしくたたかつた。勤勉な河童は魚の骨をたくはへはじめた。

どこかのあたたかい海の底にも寒流が通つてゐるところもあるといふ。その音がきこえるともいふ。耳をすましてその音を聞かうとしてゐるときに、ある日、河童はふしぎな羽音をきいた。それは聞きなれぬ音ではなく、かれが海底に來るまへに、花々の咲きみだれてゐるあかるい高原で、晝となく夜となく聞いた音であつた。蜂が海へ來たのであらうか。蜂が海へ來たのであつた。あたかも潮がひいてゐた。青い水面におほくの珊瑚が眞紅のうつくしい花のやうにひらき、それにふりかかる花粉のやうに、蜂のむれがゆるやかな、しかしあきらかに焦躁にかられた羽音をたてて降りて來るのであつた。珊瑚の枝に蜂のむれはとまつた。日が暮れはじめ、暮れた。潮が滿ちて來て、珊瑚礁は海底にしづんだ。蜂もともにしづんだ。

毎日おなじことがくりかへされるにいたつて、河童はこの悽愴な勇氣に慄然としはじめた。か

れはおどろいたときにする癖の背の甲羅を鳴らした。蓄積の想念に生じた疑念の小ささが、おもひがけぬあたらしい勇氣に還元されてゆくのを意識しつつ、海面に浮く蜂の屍をながめた。南方には花が多すぎたのだ。花のいのちの美しさは、咲くときすでに散ることの運命をふくんでゐるからにちがひない。散るとき惜んで咲いてゐるあひだをいつくしむ心に、生きてゆくいのちのうつくしさもやどされるものであらう。蜂たちは散るときをおそれ、花のなくなる季節のために、花のあるあひだに精勵の作業をつづけたのである。花のなくなる季節がないといふことはなんといふたよりないことであらう。蜂は信念をうしなつた。つねに花があり、つねに蜜があるものをなんのために蓄積をする必要があらう。蜂は花の美しさにうたがひが生じ、生きることに倦怠のこころが湧いた。河童が海にしづんだのはこのときである。

しかし、蜂たちはあたらしい花園を發見した。青い波のうへに眞紅の花々が壯麗に咲きいでてゐることを知つたときに、蜂たちはすべてをわすれた。花粉のごとく蜂たちは珊瑚礁にむらがり降り、滿潮とともにその生を終つた。

太陽はあかるくまぶしくきらきらとうすもやのかかつてゐる南方の空氣のなかにみなぎりあふれ、光りのいとが無數の花粉のやうにもつれて、おほらかな潮のかをりのなかにしみこんでゐるやうな場所をながれてゆく蜂のすがたを、珊瑚礁の底に端坐した河童は感歎するまなざしをもつて眺めずには居られない。かれのこころにふたたび海底をいでようといふ意志がうごいて來たと

きに、潮がひきはじめ、壯麗な珊瑚の花々が水面にうかびはじめ、天の一角から蜂たちのゆるやかな羽音がおこつて來るのである。

手

どうしてこんなことになつてしまつたのかと、河童は自分の不覺がざんねんでたまらない。これはたしかにおぼろな春の月の妖しい魔法にかかつてしまつたのだと月をうらんでみた。でなければ、かれは自己の過失を、ただみづからの下卑た心情のしからしむるところとかんがへてしまふことはたまらないからである。月のせゐだ。ところがさう月に過誤の原因を轉嫁してみたところで、ただそれは觀念の堂々めぐりだけであつて、現實の問題はさらに解決がつかないのであつた。

通ひなれて、立ちならぶ並木路の松の數も、その形も、枳殼（からたち）の生垣の高さも幅も釘貫（くぎぬき）門の氣どつた破風も、はげてゐる瓦の枚数も、ぺんぺん草のたたずまひも、築山の石燈籠の形も數も、すつかり暗記をしてしまつた同じ道を、今夜も、河童はとぼとぼとあるいてゐた。月はなく、星があかるかつた。かれの顏にはつかれがみえ、不安と、疑惑と、焦躁と、決意と、希望とがごつちやになつて、その足どりもたよりなげであるかと思ふと、にはかに自信ありげに力がはいつた。かれが混亂してゐることは明瞭であつた。皿に水があるかととときどき手でたしかめたり、とがつた嘴を

吃らないやうになでてみたり、土産にさげてゐる鯉が死んでゐないかと、藁包(わらつと)のなかをのぞいてみたりした。ところがかれのさういふしぐさはすべて左手でなされてゐるので、右手はただ肱から曲げ、そこに藁包の紐をかけてゐるだけで、一度もうごかさないのであつた。左腕には水かきのある手がついてゐるが、右腕には手首からさきがきれいに切りとられて、手がついてゐないのである。まるで、右腕は杉の丸太んぼうをくつつけたやうにぶさまにみえた。河童のなげきの原因がこのむざんな右手にあることはいふまでもなかつた。その大切な手は、かれがこれからでかけてゆく人間の家に保存されてゐるのであるが、ふたたびかへしてもらへるかどうかといふことについては、まつたく自信がもてないので、河童は困惑をしてゐるのである。その人間の家にでかけるのは今宵がはじめてではなく、すでにもはや十數回に達してゐるが、貪慾で頑迷な人間はいたづらに苛酷な條件を課するばかりで、返還をこばんでゐるのであつた。

それにしても、とまたも河童は春の月の夜の過失がくやまれてならない。たしかに月のせゐであつた。あの夜、池をでて、森をくると、やはらかな霞のなかからおぼろな月光がほとんどにほふほどのうつくしさで、河童の背や顔をてらした。満月はすぎて、十七夜くらゐであつたらうか。かすかに虧(か)けた月はぼうとうすい紅をさしたやうにぼやけて、あたかも人間のわかい女のうつくしい肌のやうになまめいてゐる。そのやはらかい光に照らされるとまるで女の手でやさしくなでられてゐるやうで、こころよい興奮がわき、ふしぎな情念が身うちにうづまいてくるのであつた。

河童にも青春の血がある。河童はかういふ誘惑には弱い。さうして月光のあやしい魅力にさそはれて、河童はつひにいやしい色情のとりことなつた。

かれはもはや醉ひしれたここちとなり、夢遊病者のやうにふらふらと並木みちを拔け、枳殼の生垣をこえ、人間のすまゐのほとりへさまよひでたのである。そのあひだにも月光はいよいよなまめかしい光をそそいで、ささやくやうに河童の情念をそそり、つひにかれを後架のうちにひそませた。このやうなときに意識のそこに潛在してゐるものがどういふ風にはたらくのか、かれはずつと以前にこの家にみめうるはしい乙女がゐたことを知つてゐて、その夜、月光とその女とがひとつにつながれたもののやうに、さうしてそれはひとつの絶對でもあるかのやうに、みづからの行動のなかにおぼれたのであつた。しかしかれのそのやうな情熱がともかく純粹であつたにもかかはらず、傳說の掟は冷酷で、かれは人間への慕情をしめす場所として、不潔な後架をえらばねばならなかつた。時間が經つた。足音がするたびに胸をおどらせた。この家には大勢の人間がゐるらしかつた。いくつかの尻をむかへおくつたのち、やがて目的のひとがあらはれた。動悸がうち顏がほてつてくる興奮に河童はわれをわすれたやうに、そのうつくしい尻へそつと右手をさしだした。あつといふ間もなかつた。すさまじい力がかれの右手をつかみ、かれが後架のすみになげだされたとき、あはただしくなにごとか叫びながら廊下をかけ去るはげしい足音を耳にした。河童は身をおどらして後架をとびだし、枳殼の生垣をのりこえて一散に山へはしりかへつた。

さうして池の底でやうやくおどろきもしづまつたとき、ふと右手に氣づいて息もとまらんばかりになつてどうと尻餅をついた。痛味をすこしもかんじないのでわからなかつたが、いま見ればかれの右手は手首からなくなつてゐた。しまつたとふかい悔恨がわいてきて不覺の涙がでた。その青い涙は池の水のなかを紐をひくやうにしてながれた。驚愕と狼狽とのためになにかわからずにともかく逃げてきたのであつたが、とつさの間になにを見きはめることもできなかつたのだ。いま、あの力づよい手に腕をつかまれたとき、自分の手が切りとられてしまつてゐたことが明瞭となつた。杉の丸太んぼうのやうにぶさまになつた腕をながめて、河童はかなしげな顔になつたが、しかし絶望はしなかつた。まへにも同じやうな失策をした仲間があつて、いちどは手をうしなつたが、人間にわびをいひ、交換條件として傷藥をおしへるとか、水難よけの祕傳をつたへるとかして、手をかへしてもらつた例のあることを知つてゐたからである。かへしてさへもらへばもとのごとくつぐことはお手のものだ。そこで河童はふたたび恥をしのんでその人間の屋敷をおとづれた。

人間の武士（さむらひ）は、悄然たる樣子で謝罪にきた河童をさんざんにわらつた。河童といふものは助平ぢやのうなどといつた。長いのと短いのと刀を二本さし、あたまのうへにちよん髷をむすんで、背のひくい、くしやくしやしたやうな眼鼻だちのその年よりの武士は、拔けた齒のあひだからしゆうしゆうと空氣をすかすもののいひかたで、自分の大切な娘にいたづらをするやうな奴の手は

かへすことはならんと威張つた。河童は平身低頭してひたすらに懇願した。なんといはれてもよかつた。恥も外聞もなく人間のいふとほりにした。河童おどりをおどれといはれておどつた。七人の家族の者たちまで出てきて、みんな緣側にならんで輕蔑するやうに見ながらげらげらと笑つた。そのなかには河童がひそかに思ひをかけたわかい娘もゐた。かの女もめづらしい河童のふしぎなおどりに手をうつてよろこんでゐた。それにしても河童には、このなよなよした女が自分の尻にさはるかさはらぬかに手をつかみ、懷劍で切りとるやうな剛毅な早わざをしたことがなかなか信じられなかつた。まへに何人かが後架にはいつたときに、すでにあやしいものの氣配に氣づいてゐたのであらうか。それなればかへつてわかい娘はおそれなければならぬのに、はいるときから懷劍をぬいて怪物退治をこころざしてゐたとすればなんといふ女丈夫であらうか。いづれにしろいま自分のおどりにうち興じて手をうつてゐるわかい娘が、自分の手を切りとつたにまちがひなく、どのやうな屈辱をしのんでも、かへしてもらはなければならぬのであつた。

狆のやうに眼鼻だちのくしやくしやした武士や、ぽてぽて豚のやうになつたその奥方や、それからそこにゐる人間たちのだれかれは、河童にさまざまの要求をした。歌をうたへといひ、さかだちをしろといひ、一人角力をとれといひ、空をとべといい、はては小便をたれてそれをのめなどといつた。手をかへしてもらひたいために、河童はなんでもいはれるとほりにした。人間どもの嘲笑と酷使ははてがなく、河童はつかれて目まひがし青い汁がながれてからだがべとべとした。

ところがさんざんに河童をあやつつたはて、武士はどうも藝がまづいのでけふはかへすことはならぬ、この次に來いといつて、制止するのもきかず奥にはいつてしまつた。河童は呆然となつて見おくり、きびすをかへして悄然と山へかへつた。

河童はそれから何度となく通つては、手をかへしてくれるやうに必死に懇願した。詫び證文もかき、傷藥もおしへ、水難よけの祕傳もつたへ、欲しいといふものは無理してでもとりそろへて持參した。しかしながらそのたびに狆のやうな武士はなにかと難癖をつけ、言を左右にして、手をわたさうとはしなかつた。詫び證文など書きかたがわるいといふので七通も書いたのだ。河童は手のためにはどんな苦難にもたへ、怒りをしづめて忍從しようと決心はしてゐたが、あまりな人間の不信と貪慾とにしだいに絶望のこころがわいてきた。同じ失策をしたほかの仲間がたいていは一度か二度ゆけば手をかへしてもらつたときいてゐて、はじめは樂觀してゐたのであるが、人間のうちにもいろいろあつて、さう生やさしくはいかぬ者のあることがわかつた。はじめは根氣とねばりが大切だとおもつたが、こちらがいかに努力しても、相手の心がまつたく手をかへす氣持になつてゐないのでは、のれんに腕おしにすぎなかつた。愚鈍な河童もしだいにそのことをさとつてきて、もはや絶望的なあきらめのおもひがきざすやうになつた。

いま河童は藁包に鯉をつつんで、人間の武士の家をおとづれたのであるが、もし今宵宿願が達成されなければこれを最後と決意してゐた。このまへ來たときに、武士はおまへが山の淵の緋鯉

をとつてきてくれれば今度こそはまちがひなく手をかへしてやらうと約束したのである。山の淵は嶮岨な場所にあつてとても人間ののぼれないところであり、そこにゐるといふ緋鯉のことはいひつたへになつてゐるだけで見たものはなかつたので、その武士は自分のつかへてゐる殿様へさしあげるために要求したもののやうであつた。これをとることは河童とて容易ではなかつたが渾身の努力をふるつてやつととらへ、いま人間の屋敷へはこんできたのであつた。

おとづれる聲に、戸があいて、狆のやうな武士が手燭をもつてあらはれた。

「河童か」

「さやうです」

「約束のもの、持參したか」

「持つてまゐりました」

「どれ」

「お武士(さむらひ)さま、おねがひです。こんどはきつと手をかへしてください」

「約束のとほりなら返すよ。武士に二言はない。……どれ、見せてみろ」

河童は藁包をさしだした。

「ありや、これや緋鯉ぢやないか」

「緋鯉です」

「たれが緋鯉というた?」
河童はおどろいて、
「あなたがこのまへいはれたではありませんか。あなたがいはれたので、わたしは一所懸命でむつかしい山の淵でこれをとつたのです。あなたがなんどもいはれた山の淵の緋鯉です」
「馬鹿なことをいうてはいかん。わしは緋鯉などいつたおぼえはない。眞鯉といつたんぢや」
「いまさらそんな、……あなたはいつでも、そのときになつて、出たらめばつかり……」
「なにが出たらめだ」
「いえ、出たらめといふわけではありませんが、……そんなに、いつも、約束をたがへられては、……」
「約束をたがへるのはおまへだ。河童といふものはしようのない嘘つきだのう」
河童は地べたへ額をつけた。ぺこぺこ何度も頭を下げた。皿の水がながれて、氣のとほくなるここちがした。
「おねがひです。おねがひです。手をかへしてください。わたしのしたことはわるいことでした。しかしもうわたしとしてはできるだけのおわびと、つぐなひをしたつもりです。手はわたしの命です。どうぞ、かへしてください。おねがひします」
「おまへがちやんと約束さへ守ればかへしてやるつもりでゐるのに、おまへがわるいのだ。……

それでは、いいか、こんどはまちがひなく、山の淵の眞鯉をとつてきなさい。そしたら、かならず、手はかへす。……いいな。……この緋鯉はもらつとく」
河童は呆然となつて、藁包をさげて消えてゆく人間のすがたを見てゐた。戸がしまりかたんと裏からかけがねをおろす音がして、あとはしいんとなつた。しばらく魂のぬけたやうにたたずんでゐた河童はやがて力なげにたちあがると、ふかいためいきをついて、鉛のやうにおもい足をひきずりながら、星であかるい山への道をひきかへしていつた。

このとき、地上では戰ひがたけなはであつた。城をまもる者と、城を攻める者とが日夜たけだけしい叫び聲をあげ、刀をふりまはし、槍をつきあはせ、渚によせる波のやうによせたり引いたりしながら、あくこともなくたたかつてゐた。城は包圍されてゐたが、かこむ軍勢はこの城の軍勢のふしぎな抵抗力にやうやくおどろきの眼をみはるやうになつた。外濠にかこまれた小さい城がいつまで攻めても落ちないのだ。たたかひはながくつづいた。この城にこもる人數はほぼわかつてをり、ながいあひだのうちつづくたびたびの戰鬪で、もはやその人數は全滅してゐなければならぬ筈であつた。足をきられ手をきられた者だけでも城の軍勢の數を越してゐるとおもはれるのに、城門からはいくらでも精鋭があらはれてきて、喊聲をあげ、刀をふり、槍ぶすまをつくつていどみかかつてきた。攻圍軍の方にもしだいに戰死傷者ができ、補充をする便があるとしても

ながい戰鬪ではやうやくつかれがみえてきた。それにしても小人數である筈の城門の兵隊がいつまでたたかつてもすこしも減る模樣がないことはいぶかしいかぎりであつた。攻圍軍の大將も參謀も部隊長もげせぬこととしてしきりに首をひねつた。

そのうちに前線から奇妙な報告がとどくやうになつた。城內の軍勢とたたかつて、手を切りおとすとその兵隊はその手をもつて城へにげかへる。足を切りはなすとその足をかかへて城のなかへはいる。どこを切つてもついても負傷したままひきかへす。首を切るとべつの兵隊がかついで逃げこむ。するとそのあとから新手がでてくるが、どうもそれは先刻手や足を切りおとしたとおなじ兵隊のやうにおもはれる、と。馬鹿なことをいふなと大將も參謀もあきれてわらひだし、そんなたわけた報告をする斥候を氣ちがひのやうにとりあつかつた。しかしながら、ひきつづき櫛の齒をひくやうにもたらされる第一線の報告が符節を合したやうにおなじであることを知るにいたつて、大將のひたひにたらたらと汗がながれ、苦澁の顏にはいひしれぬ懷疑のいろがわき、やがてこの妖怪の城にたいして恐怖のおももちがあらはれた。

城內の天主閣では、鎧兜で身をかためた殿樣がふしぎな微笑をうかべて戰ひの狀況をながめてゐた。殿樣のまへには緋鯉の料理がならべられ、かたはらには狆のやうなくしやくしやくしやした眼鼻だちの武士がしかつめらしい顏をしてはべつてゐる。城外からはおめき聲、鬨、刀や槍のうちあ

ふ音、矢が風をきる音、法螺貝、陣太鼓の音などがきこえて來、晴れわたつた空にへんぽんとひるがへる多くの旗がながめられた。

「戰ひはあひかはらずか」

殿樣は盃を手にして妙にけだるさうな聲でたづねた。

「さやうでございます。さんざんに敵をなやましてをります。あの河童の手がありますれば、わが軍は百萬の大兵がをるのも同然でございます」

狆の武士が滿面に得意のいろをうかべてこたへた。

「さうか」

殿樣はなんばいも盃をかさねたが、その顏には會心の笑みとは遠くかけはなれた皮肉の微笑がこびりついて、ときに嘲けるごとく、ときにはさげすむごとく、ときに泣くのではないかとおもはれるやうに唇をかんだりするのであつた。戰ひは有利で、敵は味方の奇妙な戰術のまへにすでに旗を卷かうとしてゐるのに、殿樣の憂鬱な顏は勝利者の顏ではなかつた。いひしれぬ退屈と侮辱のいろさへときにその端麗な顏にあらはれて消えた。

戰ひはもうながくつづいてゐた。戰ふべき運命にあつた兩軍はそのながい戰ひよりもずつとまへからしばしば戰ひ、勝敗を決することなくこんにちにきた。さうして今度のいくさがはじまつた。ところが今度の戰ひにはおもひもうけぬ武器が手に入つて味方は有利にたたかふことができ

た。河童の手だ。家來の娘で剛毅なるものが後架でいたづらせんとした河童の手を切りとつた。知識ゆたかな典醫はそれを見ると狂喜のあまり七回廻轉して卒倒した、この手さへあれば切れた腕でも足でも首でもたちどころにつなぎ、もとのとほりにすることができる、ぜつたいに河童にかへしてはいけないといふことを蘇生してから言上した。かくて忠義にあつい狆の武士は河童がいかに懇願するともこれをかへさうとはしなかつたのである。

戰ひがはじまり、その效驗はたちどころにあらはれた。城内の兵隊はいくら切られても突かれても河童の手でさすることによつてたちまちもとの身體に復歸し、さらに城外に打つて出た。負傷すればひつかへし、手足や首をつないでまた出てゆく、まさに狆の武士のいふごとく、不死身の兵隊百萬を擁してゐるのに異らなかつた。はじめは殿樣も大いによろこびその手を切りとつた娘に褒美をとらせ、狆の武士にも加增を命じた。攻圍軍は城内の不死身の兵隊に疑惑の眼をみはり、やがて恐怖にとらはれるやうになつた。

しかるに、戰ひがつづけられてゐるうちに、男性的にして良心的な殿樣のこころに、しだいにくらいかげがさしてきはじめた。同じやうな戰ひがつづけられ、同じやうな經過と結果とが日課となつて、殿樣のこころに倦怠と疑惑とが生じた。いくら切られてもこちらは減らないし、敵は減つてゆくのであるからいつかは味方が勝利を得るかもしれないが、これがほんたうの勝利といへるであらうか。こちらはもう安心をしてをつてもよいわけで、べつだん力こぶを入れたりする

ところはなにもない。殿樣は寢てをつてもよいわけだ。これが眞の男性的な戰鬪であらうか。自己の運命を賭し全戰力を傾倒して勝敗の歸趨に沒頭することなくしてなんの戰ひの價値があらうか。これは戰ひではない。つまりは河童の手が眞の武器ではないからだ。殿樣は兵隊のはうにも眼をそそいでみた。兵隊にも懈怠のこころがわき鬪魂のにぶつてゐることは明瞭であつた。いくら切られても突かれても死なないといふことになれば、なにも伎倆をみがくことも、わざに長ずる必要もないことだ。かくて戰ひぶりはお座なりとなりなにか馬鹿々々しい倦怠のしこりが陣屋のなかにたちこめるやうになつてゐた。

かくして殿樣はつひに決意をかためるところがあつた。勝敗を度外視して眞に自力を全的にみなぎらしてたたかふ男性的な人間の宿命に忠實たらんとして、殿樣は河童の手に依存する卑屈をやめた。殿樣は狆の武士をよび、手を河童へかへすやうに命じた。狆の武士はおどろいて色あをざめぶるぶるふるへだした。殿樣は氣がへんになつたのではないかとまじまじと主人の顏を見た。殿樣は氣がへんになつてはゐず、昨日までの妙にけだるさうな表情が消えて、りんりんたる勇氣がそのおもてにあふれ、これまでにかつてなかつたやうなたのもしい武者ぶりであつた。殿樣の命令はおごそかで二度と口返答をゆるさぬきびしさにあふれてゐた。反對すればたちまち手打ちにされるやうなすごささへある。狆の武士は河童に手をかへすべく搦手の間道をつたつて山への道を行つた。戰鬪はまつたくちがつた樣相をおびるやうになり、そのおたけびも劍戟のひびきも

これまでの懈怠のいろをふきとばして、はじめて人間のさいごのいのちをかけあふ悲壯なものとなつてきた。

當惑したのは狆の武士である。くしやくしやした眼鼻だちをいつさうちぢこめて腹だたしげに河童の手を入れた袋をさげてゐたが、到底、山の池までこれをとどけにゆくやうな阿呆らしい役目をはたす氣にはならなかつた。武士の沽劵にかかはる。そこで彼はいつも河童が通つてくる松並木まできて、そこの一本の松の梢にとりだした河童の手をひつかけておいて歸つてきた。河童が來ればかならず氣づくことは明瞭であつた。狆の武士は城への道をひつかへしてきたが、あの手のなくなつたこれからの戰鬪がどんなに苦しいものであるかをかんがへて、もうがたがたふるへがきた。さうして劍戟のひびきのきこえる搦手の門まできて、いきなりくるりと踵をまはすと狆がはしるやうにいづくかへ逃亡し去つた。

松の梢にのせられた河童の手は歳月とともに風雨にうたれてしだいに腐蝕していつた。もうあきらめてゐた河童は人間への信頼を斷念して池の底から出ようとはかんがへなかつたので、自分の手が行きさへすれば見つかるところにあることを知らなかつた。松の梢の手は烏につつかれたり、鳶に食はれたり、蛆がわいたりしてしだいに原型がなくなり、それも風化して、つよい風の日に吹きとばされて四散してしまつた。秋風がたつやうになつてから、ながい忍耐ののちまたも未練が出て、河童が池を出て、人間の武士の家をおとづれたときには、その家は灰燼に歸してあ

とかたもなく、おもい心をいだいてかへつてくると、みじんの骨片となつた自分の手が水かきのある濡れた足のうらにまつはりついてくるのであつた。

月かげ

春の夜にかすむかすかな幕がしだいにひきあげられるやうに澄んで來ると、眼の色の光りもまたおのづから異るのである。空氣のかんがへ方についても無關心であることはできない。それは、自分の性（さが）の宿命によつて、背なかの甲羅のしめりかたがちがひ、背がむづがゆくなつて、芋蟲のやうに、草のうへにあふむけにころがつて、ごろごろところがる。青草にしめりがとられ、甲羅にちりばめた模樣のやうに草が附着する。

絲のやうなながれが、峰からくだる谷間を縫つて、九十九折になながれる。名前のない、たれも名前をつけようとも考へたこともない、ささやかな流れである。絲ほども細いが、河童が棲むのに不自由はない。一族のあるものは、路上にできた轡がたの馬の足あとに雨水がたまつたのにさへ、三千匹は棲息することができる。

背に草の模樣をつけた河童はそのながれを、電光のように上下する。からからと奇妙な聲をたてながら疾走する。そのながれにたれかゐないかと探すのであるが、たれもゐない。河童は何十度疾走しても、すこしも疲れないが、ただ、たれもゐない流れのしづけさに、たへがたい孤獨を

感じる。ふと立ちどまり、腰に手をあてて、空を仰ぐ。感傷といふものは、空の青さとともにいかなるところにもある。ただし、泣くことは禁物だ。なぜなら、河童がひとたび涙を發すれば、二度ととまらず、こんこんとあふれいで、その青い涙は河童の生氣であるからして、涙の流出にしたがつて、身體からはしだいに水分がなくなり、息ぐるしくなり、たちまち、ぎちぎちと甲羅がひからび、こちこちになつて生命をうしなつてしまはねばならぬからだ。このやうなことは傳說として傳はつてゐるだけで、かれ自身もよくは知らない。いちど泣けば生を終らねばならぬとすれば、このんで泣くものはない。河童らは傳說をおそれて、生れおちるときから、泣かざることのみ訓練をした。泣けば涙とともに水分が消失してひからび果てるといふことが傳說であつたばかりでなく、泣くといふことすらが、いまは傳說となつた。かつて、昇天を志してことごとく天から落ちた河童らも、千軒岳のうへを飛翔して、火山のなかへ卷きこまれた河童らも、自分たちの運命が眼前に死を暗示してゐるときですら、泣くことはしなかつたのである。

絲のながれをいなづまのごとく走る河童も、たへがたい孤獨にとらはれ、空を仰ぎ、ふかい悲しみにとざされはしたが、けつして泣くことは考へなかつた。泣くことが心に浮ばないのだ。傳說の遠さといふものが、はるかな鄉愁のごとく、心のなかを去來する。そして、かなしいくせに、かれは仕方なく笑ひだしてしまふのである。

あるとき、かれは人間の居る里に出て、奇妙な運命に遭遇した。

かれは茄子が好きなので、茄子がたくさん生つてゐるところへ、茄子を食べに出た。むらさきいろの、まろやかな、あるひはほそながい茄子の實が、きらきらとひかる。かれはくつくつとうれしげに嘴を鳴らし、それをちぎる。しやきりと口のなかで爽やかな音がして、あまずつぱい水氣が舌をとほる。もうひとつちぎる。このときは、かれは孤獨の寂寥をわすれる。

すると、かれは、とつぜん、はげしい打擲を背に感じた。かれはその打擲のために、茄子の葉に頰をうちつけてたふれた。さうして、背後でなにかけたたましく叫ぶ人間の聲をきいて、危險を感じ、いつさんに走りだした。かれはあわてふためき、絲のながれにきて、たちまち水中に沒した。

なにごとが起つたのか。かれは背の重味をかしなことに思ひ、水にうつしてみた。すると、甲羅に一本の鎌がつきたてられてゐた。百姓が自分の畠を荒しに來たものを懲らすために、鎌でうちかかつたものであらう。それが河童の甲羅につきささつたまま、拔けなかつたのだ。うしろに手のまはらない河童は困惑した。しかし、ただ、甲羅にささつてゐるのみで、すこしも痛みはしなかつたので、そのままにしておいた。

また、かれは茄子の畠に出る。茄子への誘惑はいかにしてもおさへることができない。ことに、月のある夜はその茄子は寶石のごとく光る。すると、迂濶なかれはまたも畠の持ち主から、鎌を

うちかけられ、おどろきあわてて、絲のながれに逃げかへつた。そのやうなことがくりかへされた。暗愚なものは河童である。かれの孤獨の深さが茄子に變へられ、その哀傷が背にささる鎌の數とともに增した。いまは背に八本の鎌を負うて、はじめて、かれは自分のおろかさに氣づいた。背にささつた八本の鎌のために、かれは歩行が困難になり、なにより、その肉體と大地との接觸を喪失した。かれは自分の甲羅のしめりを草のうへにころがつてふきとることが、まつたくできなくなつたのである。かれが大地にあふむけにならうとすれば、つきたつた八本の鎌のうへに乘るほかはない。甲羅をとほしてゐないので痛みはないが、そのやうなたはけた恰好がどうしてできようか。かれはその羞恥に耐へることができない。鎌はやがて錆び、その赤ちやけた汁が甲羅をよごす。もはや、かれは茄子をとりにゆく勇氣をうしなひ、はじめて、悲しみの心がきざした。

月かげうつくしい絲のながれのほとりに出て、かれは非常に悲しんだ。もういまは生きてゆく甲斐もない。かれは泣きたいと思つた。さうして泣かうとした。しかるに泣かざることの訓練によつて生きて來た者には、泣くことがいかなる方法によつて達せられるのか、見當もつかなかつた。ああ、泣きたい。しかし、悲しみによつてすぐに泣けると考へたことは、大なる認識不足であつた。泣きたいのに泣けないとは、なんと悲しいことであらうか。

月かげが山の端から中天に映つて來たときに、河童の眼にはじめて涙が浮いた。それは泣くことができない悲しみを感じたときに、泣くことができたからである。すると、傳說はつねに眞實

をかたるものであることが、明瞭になつた。青い寶玉のごとくかれの眼にういた涙は、とめどなくこんこんとあふれ、かれはしだいに水分を失ひはじめたが、にもかかはらず、生を終つてゆく河童のくちばしにはかすかな微笑みが見られた。かれはいよいよひからびてゆき、水のほとりにたふれた。なほも、かれの眼からあふれでる青い涙は、たれもゐない絲のながれにそそぎ入り、水かさが増え、月光のもとに、燐のごとくまつ青にきらめきつつ、せせらぎながれた。

清流

水藻（みずも）のあひだにゆらめきただよふ絲くずのやうなみぢんこのすがたさへも、はつきりと見わけられるこの川底では、晝間の時折りはまぶしくて兩眼とも開けて居られないことがある。河童たちは水底のやはらかい砂地によこたはつて片眼をとぢ、きらきらと水を透して屈折しながらさしこんで來る陽の光の中に、またも生れたばかりの車蝦（くるまえび）が群をなして彈ねてゐるのにほくそ笑む。この直角の運動をする蝦たちが次から次に無數に生まれながら、このあまりひろくない流れのなかにいつぱいに滿たされることの決してないのは、かれらがすべて河童たちの唯一の食餌となるからである。蝦のからだはほとんど透明に近くからだを通して水面にゆらぐ波紋も見わけられるほどであつて、このやうな清潔な食物がほかにあらうとは考へられない。しかし、この美しい餌が時にはうすぐろい髭だらけのみぢんこと區別することが出來ないやうにきたなく見えることがある。それは太陽の光がささず、天には黑雲が蔽ひかぶさり、はげしい風が吹き、すさまじい雨が落ちてゐるやうな天候の時である。潔癖の河童たちはそのやうな時には、眼の前に游弋してゐる蝦が晴天の日には美しく透明に見えるからだを持つた蝦とまつたく同じものであつて、黑く見

えるのは單に天候のせいにすぎないとわかつてゐても、その薄ぐろく見える蝦を食べない。どんなに空腹の時でもさうなのである。

いつたい、この邊は雨風がつよく暴の多い地方であつた。海拔六千尺の天拜山から源を發してゐる白魚川は、そのやうな時にはしばしば河岸を越えて氾濫をする。いくつかある瀧は溢れたつ水量をうけかねてすさまじい飛沫を散らし、岩をたたき、つんざくやうな物音を立てて迸る。しかし、このやうな時でも河童たちのゐる川底は割合に靜かであつた。川面は雨にたたかれ風になぶられて亂れるけれども、水底ではただ暗く流れが少しばかり早くなるにすぎなかつた。

河童たちは川底の砂地に寢そべつて暴のすぎるのを待つ。暴が過ぎる。すると暴の間にも、暗澹たる水底で蝦といふものは間斷ない繁殖をつづけてゐるのか、明るい日ざしがさしはじめた水中には、意外にも多くの蝦の群が直角の運動をしながら游弋してゐるのである。

しかしながら、このやうな川底を見棄てて、多くの河童たちが遠くの地方へさまよひ出た。白魚川の清流に殘つた河童たちは、常に去つて行つた友だちのことを忘れることができない。遠國の友だちのことは風のたよりによつてかれらの耳に入る。河童たちが水底を棄てて飛翔をこととするやうになつたために、さまざまの悲劇が起つた。千軒岳では噴火口の上を飛びまはつてゐた多くの河童たちが、火山の爆發とともに熔岩の中にまきこまれて生命を終つたといふことである。また、高塔山では、河童同士ではしたない爭をはじめ、人間の山伏の法力に敗れて多くの河童た

ちは青いどろどろの液體となつて溶けながれ、また、多くの河童たちは一本の釘によつて永遠に地中に封じこめられたといふことである。また、或るものは飛翔中放屁をしたために、天帝の怒りに觸れて一本の樹の中に閉ぢこめられてしまつたといふことを聞いたこともある。このやうに河童としての純粹さを失つた友だちが、遠い國々で受けてゐる懲罰の笞が、ひとごとではなく、白魚川の水底に殘つてゐる河童たちのからだにも、鞭をあてるがごとくにひびいて來るのであつた。かれらは友だちが一日も早くこの清流に歸つて來ることを日夜願つてゐたのであるが、ひとたび出て行つた友だちは、どうしたものか、誰ひとり返つて來るものがなかつた。

或る日、暴あげくの雨水をはげしく落下させてゐた瀧からひとりの美しい人間の女が落ちて來た。

きらびやかな衣裝につつまれ、水々しい髪を結び、あでやかに化粧をほどこしてゐた若い娘は、落下するとともにその生命を失ひ、流れのままに下流の方へ押しながされて行つた。河童たちは呆氣にとられ、ただぼんやりとその方を見送つたのみである。ところがこのやうなことがそれから相ついで起つた。幾人もの若く美しい女が瀧壺に落ちて死んだ。後になると河童たちはそれらの女たちは、決して自分で好んで瀧に落ちるのではなく、多くの人々から强要されてやむなく水中に投じてゐるに違ひないと考へるやうになつた。

それらの儀式を水面から首を出して眺めたことがある。そのおごそかな式は、たいてい暴が來

て水が溢れ、さうして水がひいたあとに行はれるやうであつた。瀧の上に多くの人々があらはれ、色々の旗を立て、神主のやうな烏帽子水干姿の男が出て來てなにごとか長々と唱へる。瀧口のまへには着飾つた若い娘がゐる。やがて娘は掌を合はせ眼を瞑ぢて瀧の中に飛びこむ。それはある時には水干帽の男によつて突きおとされたやうにも見えた。百二十尺もある瀧から落ちて生命のあらう筈がない。屍になつた若い娘は長い黒髪を水面にただよはし、奔流にのせられてまたたく間に下流に見えなくなつてしまふ。

ある時、河童たちは氣になる言葉を聞きとがめた。それは人間の言葉ではつきりとはわからなかつたが、なんでもそれはたしかに、ガラッパよ、汝の美しき花嫁をかはることなく愛しめ、といふ意味に相違なかつたのである。河童たちは顔見合はせ首をひねつたけれども、どうしてもそのことの意味をさとることができなかつた。やがてその美しい娘が瀧から落ちることが止まつた時になつて、はじめて河童たちは一切を理解した。それはこの地方をしばしば襲ふところの暴風雨は、すべてガラッパ（河童のことをこの地方の人はさう呼んでゐた。）のせいである。そのたびに水害があるのは、なにかガラッパの氣を損じてゐるからに違ひない。ガラッパにきれいな花嫁をあたへたなれば災（わざはひ）を避けることが出來るであらう。そこで村中からもつとも美しい娘が選拔され、瀧から身を棄てたのである。人々の犧牲となつて河童の花嫁となるといふやうな決心は、若い娘にとつてはたぐひなく美しい浪漫精神であらうか。ともあれ白魚川の河童たちはこのこと

を知るに及んで茫然となる思ひであつた。しかしそのことは間もなく止まつた。都から流されて來たひとで、位高く情に滿ちた人がこのことを中止させた。その人の名は和氣清麻呂といひ、その流謫の寓居が瀧を眞正面に望む山腹の杉林の中にあつた。この智慧ある人はこの儀式が良からぬ神主たちの陰謀であることを看破した。災をおさめるための花嫁を買ふ金だといつて、近鄕の人達から多くの金品を捲きあげてゐたのである。惡神主たちは和氣清麻呂のために瀧壺の上から落され、幾人もの花嫁が辿つたと同じ運命に落ちた。彼等は瀧の上で和氣公から、お前たちがまづ行つてガラッパを迎へて來い、結婚式は水中で行ふ必要はない、といはれたのである。

河童たちはこのやうな人間たちのいとなみによつて、たいへんな迷惑を蒙つた。かれらの唯一の清潔な食餌である車蝦の中で、落ちて來た人間をつつくものができてきて、河童たちがかれらを食餌とせんとする時に、はたしてその蝦がけがれてゐるかゐないかといふことを、見きはめなければならないやうな面倒を生じたからである。

このごろ、瀧の上で奇妙なことが行はれる。瀧口のところに舞臺が組まれ、多くの人々が思ひ思ひの服裝をしてその上で踊つたり歌つたりする。太鼓や笛や鉦の音がし、夜になると篝火が焚かれ、舞臺を踏み鳴らすみだれた音が聞える、それから瀧の中に胡瓜や茄子や西瓜や玉蜀黍などの野菜がしきりに投げこまれる。水面からちよつと顔を出してみるが、河童たちはつまらないのですぐ川底にかへつて寢ころんでしまふ。人間たちのすることが、河童たちには腑に落ちない。

これはガラッパ祭といふもので、暴をしづめ水害を防ぐ目的をもつて、河童を慰め河童の心を和げるために行はれてゐるものだと聞いたこともある。さうして河童の好物である胡瓜や玉蜀黍を投げこむといふのである。河童たちは人間のいだいてゐる傳說にあきれる。暴風雨をおこす自然の法則について河童たちはなにも知らない。また車蝦といふたぐひない食餌があるのに、生ぐさい胡瓜や茄子などがすこしもここの河童たちは好きではない。いろんなものを投りこむので水がよごれるばかりだ。瀧口の上の得體の知れない騷ぎはただうるさくて仕方がない。河童たちはほとんど何日もつづけられるガラッパ祭の間、淸流の底にふかく沈んで退屈し、砂の上に寢ころんで欠伸ばかりを連發してゐるのであつた。

亡　靈

驚かれましたか？　しばらく足をとめてください。その栗の木の下の石に腰をおろしてくれませんか。おいそぎでもない旅の御樣子、しばらくわたくしの話をきいていただきたいのです。……あなたを待つてゐました。この淵のほとりをこれまでも何人もの旅人が過ぎてゆきましたが、たれもかれもせかせかと忙しさうで、おまけにこの一帶に特別に不氣味さでも感じるのか、一刻も早くここを通り拔けようとでもいふやうに、足を早める者が多いのでした。或る者はまるで追つかけられてでもゐるやうに走りだし、つれのある者は自分たちの恐怖をまぎらすやうに、不必要に聲高で喋舌りながら、やはり速度を早めてこの淵のかたはらを過ぎるのでした。なるほど、この晝間でもたそがれのやうに暗い森林のなかは、さう氣持のよい場所ではない。山としてはさう深くはないけれども、樹々はいづれも苔むす古さと高さで蓊鬱と茂つて居り、たれさがつた氣根を縫つて年中蜘蛛が巢を張り、そのなかに足のやたらに長い、まつ黃色と黑とのあざやかな縞になつた女郎蜘蛛が、びいどろ玉のやうな二つの眼を光らせてゐたり、蜥蜴や蛇が熊笹を鳴らして濕氣の多い斜面を走つてゐたり、またときどき鳥か獸か蟲かわからない奇妙な啼き聲がするの

では、旅人もさうよい氣持もしないでせう。しかし、旅人が氣味惡がるのはそんなことよりも、この淵のやうです。……あなたも現に驚かれてゐるが、姿の見えないわたくしの聲が、この淵のなかから起つてゐる。そして、その淵といふのは、あなたのごらんになつてゐるとほり、さして廣くはないけれども、どこからも水の流れるところを持つてゐない、水源もなければはけ口もない一種の淀み、青苔を溶かしたやうなどろどろの水、水ともいへない奇妙な液體、汁といつた方がよいか、つまり旅人がいたるところで見つけてゐるどんな淵とも池とも湖とも沼ともちがふ汁がたまり、おまけに異樣な臭氣、糞尿よりももつといやな惡臭、これでは旅人を辟易させるも無理のない話でせう。にもかかはらず旅人がやはりこの淵の、(淵と假りにいつて置きませう)ほとりを通るのは、麓から峠を越すにはいやでもこの道を通らなければ拔けられないからです。

あなたを待つてゐました。あなたのやうな人ははじめてです。遠くにあなたの落ちついた足音をきいたときから、わたくしはもうおさへきれぬ期待で胸をはづませて、近づくのをお待ちしてゐました。あなたがこの淵のほとりに來て、しづかにあたりを見まはし、なにかしきりにうなづいて、旅の杖を曳いて、わたくしのいふとほりに、その栗の木の下の石に腰をおろされたときには、わたくしはうれしさで涙の出る思ひがいたしました。あなたはきつとあしへいさんの友人にちがひない。われわれ河童について變らぬ深い理解と愛情とを持つてくれるのは、傳說を輕蔑し、詩を否定し、浪漫をすらも異端視して、科學と實證とばかりを現實の價値とするやうになつた現

代では、あしへいさんをおいてはなくなつたのでありますから、わたくしはいつかここへあしへいさんが氣まぐれでもよいから通りかかる日のことを夢にえがいてゐたのですが、このごろあしへいさんはつまらぬ世俗のことにかまけて、昔のやうにかういふ山間僻地をおとづれる趣味をわすれ、主として闇市場などをさまよひ、よからぬ酒などを夜な夜なくらつてゐるといひますから、なにかの突然の啓示によつてあの人がふたたびさういふ頽廢と惡德とにまみれることから逃れでる日を待つてゐるのですが、いつのことやら、……いや、わたくしはなにをいつてゐるのでせう。あなたで結構なのです。あなたがあしへいさんの友人でわたくしたち河童の知己であることはもう疑ふ餘地がありません。あなたに是非お聞きねがひたい。そしてこれから話すことをあしへいさんにも傳へて貰へばたいへんありがたいと思ふわけです。

わたくしは河童だと申しましたが、じつはいまは河童ではなくなつてゐるのです。形も影もなくなつて、いまは液體になつてゐます。この淵がわたくしなのです。いや、わたくしたちなのです。あなたは笑はれますか？　どうもあなたの薄笑ひは氣味がわるい。あなたは河童が本來暗愚なものであることを知つて居られるので、いままたわたくしたちの暗愚についてくりかへすのは氣恥かしいのですが、何故わたくしたち大勢の仲間がこんな淵になつてしまつたかは、やはり聞いていただかなくてはなりません。

昔、(昔といつても百年にもなりませんが、)この山間一體には千匹ほどの河童が雜然と棲んで

ゐました。そのころはこんなに樹も茂つてゐず、淵ももとよりなく、いまよりはずつと明るいからつとした谷間で、千匹ほどの仲間たちもどちらかといふと仲よくたのしく暮して居りました。わたくしたち河童が馬の足あとの水のたまつたのにさへ三千匹は棲めることはあなたの御存知のとほりで、そのころ池とか川とかいふものはなかつたのですが、點々とある水たまり、山水、岩清水のながれ、露の玉などで充分で、まづそのころは平和でありました。さやう、平和といふ言葉がいちばんあたつてゐませうか。よその國々では河童同士が繩張りあらそひをして戰爭をしたり、昇天しようなどといふ途方もない考へをおこしてたくさんの死傷者を出したり、火山のうへを飛翔して火傷したりしたやうなことも聞きましたが、われわれのところではさういふ事件らしいものはなにもなく、日々はきはめて平和に、單調に過ぎてゆきました。すこし數がまとまつて生活してゐると、えてしてこれを支配しようとか、威張らうとかいふ者が出てきて、いつか權力といふものが生れ、なにかの政治的な體制ができ勝ちなものでありますが、さういふこともなくて、政府をつくらうとか、黨派を立てようといふ野心を抱く者もなく、ただわけもなく雜居して暮してゐるばかりで、日が過ぎました。それはきつと衆にぬきんでた者がなかつたせいもありませう。いづれも似たりよつたり、團栗のせいくらべで、多少圖體が大きかつたり、聲がたかかつたり、腕力が强かつたりで、幅をきかす者がなくもなかつたのですが、衆望が一致して頭目に仰ぐといふほどの者はゐず、まづ長閑なものでした。春夏秋冬の季節の變化も順調で、花や鳥を

相手にたのしみ、太陽も月も適度のうつくしさで生活にめぐみをたれ、食餌も豐富で、なにひとつ不足もないのでした。支那にある桃源境、西洋のユートピアといふものがどういふものか知りませんが、そのころのこの山間の生活はひよつとしたらそれに近いものではなかつたでせうか。さういふ生活がわたくしたちの覺え知らぬ昔から長くつづいてゐたのです。少くとも、わたくしたちが今日の不幸に陷ちた百年前まで。

百年ほど前の或る日、仲間のうちの頭のよい者から、奇妙な申し出がありました。その申し出の斬新さがこのやうな結果を招來しようとはさらに思ひいたらず、仲間たちはたちまちその說に贊同いたしました。いま考へますと、そんな思ひつきがなにから生れたかと腹が立ちます。それは精緻な理論と、明晰な科學的根據をもつてゐて、たしかに學問としての權威すら示してゐたのですが、じつはそれは表面だけで、眞の動機といふのは、たしかにただの退屈にすぎなかつたのです。眼の色を變へて勝敗をあらそふやうな精神の緊張はさらになく、空腹をかかへて食を求める切實さもなく、單調な明け暮れにぶらぶらとただ時間ばかりを消してゐるやうな毎日、權力にたいする反逆もなく、征服にたいする慾望もない、平和な日々、かういふときには、ただ頭腦ばかりが活躍するほかはなく、さまざまの思索がくりひろげられ、强ひて思想と哲學の體系が組みたてられて、したりげに發表されますが、それを仲間たちはただ漫然と眠たげに聞いてゐて、なかなか立派な思想だ、おどろくべきである、などとはいひますが、生活へつながつてくるものは

なにもありませんからすぐに忘れてしまひます。かういふ狀態でありましたから、或るとき、仲間の一人のをかしな申し出が熱狂して迎へられたのでありました。その申し出がただちに行動につながつてゐたものであつたからです。

鼻まがりで嘴が短かく、頭の皿の毛が茶色なので、仲間からは大して重きをおかれてゐなかつた一匹の河童が、その案の提唱者でした。彼はいふのです。科學に革命をもたらす實驗をする時がきた、それは音響に關する物理現象で、諸君の協力なくしては成りたたない、蹶起をのぞむ、と。なにか鹿爪らしい理論と、妙な記號のついた方程式のやうなものを彼はわたくしたちに示しましたが、わたくしたちにはさういふ學問的なものはわからない。また興味もない。にもかかはらずそれに贊同したのはわたくしたちがすでに底知れぬ倦怠に腐りきつてゐたからです。ただ寢そべつたり欠伸をしたり、頭のわるくなるほども眠つたり、用のあることといへば女とのたはむれくらゐのもの、したがつてやたらに子供ばかりを生んでゐるやうな生活、さういふやりきれぬ退屈さ、なんでもかまはないから、その單調を破るものを求めてゐた、そこへその仲間が全部がともかくも一つの行動に出る案を持ちだしたのですから、盲目滅法に飛びついたわけです。またその案を提出した仲間とて同樣で、そんなことは退屈のあまりに考へだしたことにちがひないのです。ところがそれだつて、ただ、この谷の河童が全部揃つて、時刻をあはせて、一齊にどならうといふだけのことでした。これまではあちこちで勝手なことをしやべつてゐる、それを或る時刻

にいちどきにみんなで喚いたら、どういふ聲になるか、音響に關する物理現象の實驗といふのはそれだけのことです。これには多少の反對がなくもありませんでした。しかしそれは學說としてではなく、面倒くさいといふ者と、そんなことをしてみてもつまらないといふ者と、その提唱者を日ごろからこころよく思つてゐなかつた者とで、提案者がすこし腕力が强くて仲間から煙たがられてゐる者を買收して、反對者を說き伏せたので、ともかく全員一致、早速實行にうつることに一致しました。

わたくしにはその日のことが忘れられません。どうして忘れることができませう。傳說のきびしい掟がその日たちまちわたくしたちの運命を轉換させてしまひました。しかも、その悲痛な宿命がきはめて簡單に、あつけないほどの過程で、わたくしたちを今日の羽目におとしいれたのです。

紅葉が谷をあかく染め、蜩ももう鳴きやんで落葉のにほふ秋のある日でした。わたくしたちは谷の窪地にあつまつて、提案者の鞭のうごくのを凝視してゐました。赤毛で鼻まがりの河童は一段たかい丘のうへに立つて、右手に葦の鞭を握り、氣どつた樣子で頃あひをはかつてゐました。千匹ほどの河童たちは、老いも若きも、男も女も目白押しにならんで、奇妙な期待に胸ときめかし、鞭の振られるのを待つてゐました。これまでの退屈を破る試みに有頂天になつてゐました。まだ朝まだきで、木の間越しの陽はさわやかに、しめつてゐる河童たちの靑苔色の甲羅を光らせ、

皿の水に反射して、ぴかつぴかつとかがやきました。千匹の河童が一齊にありつたけの聲をしぼつて怒鳴る、どんな聲になるか？　わたくしは好奇心でいつぱいでした。そして白狀しますとわたくしはそのとき良からぬたくらみを胸に藏してゐたのです。それは自分でぜひその聲をききたいが、自分が怒鳴つたのでは聞くことができない、自分の喚く聲が鼓膜にひびきますから、これは自分は聲をたてないで、全員の合唱を聞いてやらうといふことでした。この思ひつきは大いにわたくしの氣に入りました。千匹のうち自分一人くらゐ默つてゐてもわかる筈もないし、影響もあるまいと考へたわけです。それにしても約束を破ることになるので、すこしは氣がとがめ、きよろきよろとあたりをうかがひましたが、もとよりわたくしのひそかな企らみなどたれも氣づく筈もなく、みな眼をむいて丘のうへの赤毛の河童が鞭を振るのを、ひどく興奮した樣子で凝視してゐました。

やがて曲つた鼻のさきがにぶく陽に光つて、ちよつと背を反らすやうにすると、提案河童はけつといふ鳥のやうな聲を發しました。いよいよ振るぞといふ合圖です。わたくしはこのときこの見榮えもせぬみすぼらしい河童がいまや嘗てない得意の心境にあることを看てとりました。これまでは輕蔑されてゐたのに、いまや千匹の河童の指揮をしてゐる、この鞭一つで全體がどうにでもなる、その得意さはふと傲岸なひらめきと、一種復讐めいた眼の色となつて、物理現象に對する學問的情熱以外の不純なものを、あきらかにその姿態に示してゐました。わたくしはにはか

に反撥を感じて、そのためにも聲を發しまいと思いさだめました。この瞬間の動搖ののち、待望の葦の鞭がかすかに風を切つて振りおろされました。思はずわたくしは息をのみました。全身を耳にしました。

なんといふことでせうか。わたくしはその刹那の恐しい息苦しさをいまでも慄然と思ひうかべます。けたたましく荒々しいどよめきが鼓膜をも破るひびきをもつておこると思つてゐましたのに、その一瞬は世にもめづらしい靜寂のひとときでした。あまりにも巨大すぎる響は無音の錯覺をあたへるとも聞いてゐます。そこでわたくしもひよつとしたらさういふことではないかと息をつめて耳の穴をほじくつてみたのですが、やつぱりその瞬間の逼塞は全然音響のないためのものであることがたしかに解りました。なんといふことか。たれひとり聲を出した者がなかつたのです。あきれたものです。丘のうへにぽかんと嘴をあけて立つてゐる河童の姿ががくんと折れるやうにくづれて、まるで提灯をたたむやうにしぼんでゆくのが見えました。わたくしもそのとき自分の身體の關節がゆるんで來て解體されてゆくやうな、空間に浮いてしまつたやうで、足がなくなつたやうな空虛さを覺えました。そして、頭腦のはたらきも緩漫になつてゐましたが、事態の推移だけはまだ判斷する餘裕はのこつてゐました。團栗のせいくらべであつたわれわれの仲間ですから、考へることも似たり寄つたり、自分ひとりの思ひつきとして得意であつたことが、じつは全部の共通した考へであつたわけです。みんながわたくしと同じ企らみをいだいてゐた、その

結果、荒々しい騒音のかはりに不氣味な沈默があらはれた、それだけのことです。指揮者に對する反撥があつたかなかつたか、それはわたくしにはわからない。わかつてゐるのはたれひとりとして聲を發する者がなかつたといふ事實だけです。そして、それだけで充分でした。全員絶叫のかはりに全員沈默といふまつたく逆の現象、效果、それは別の意味では學問としての價値を生じたかも知れないのに、そんなことなどはもう問題ではありません。この歴史的な一瞬ののちに、ゆるがすことのできぬ鐵の規律、かの戰慄すべき傳說の掟が冷酷にわたくしたちの頭上にくだつて來ました。

この山間の平和な生活はあとかたもなく崩れて、ゆるやかであるが恐しい破滅がはじまりました。違約と驚愕とが精神と肉體とのどちらをも亡ぼして、指揮者をはじめ千匹の河童たちは、そのとき、青いどろどろの液體となつて溶けてしまひ、いつかこの窪地に一つの淵ができてゐたのです。

その時から百年經ちました。からつと明るかつた森の樹々はわれわれの身體から發散する青苔の肥料のために、短時日の間に必要以上の成長を遂げ、枝ははびこり、葉はしげり、毛髮のやうに氣根が垂れて、そこに女郎蜘蛛が巣をかけ、蝶や兎はゐなくなつて、蜥蜴や蛇が巣くひ、陽の光がささぬために羊齒や熊笹のしげつた斜面はいつもじめじめと濕氣があつて、毒茸の發生にはもつて來いとなつたのです。旅人が快適な歩調で通つた場所であつたのに、いまは恐怖を持つて

駈け拔ける不氣味な森林となりました。ごらんのとほり、この淵は千匹の河童が百年前に溶けてできたものですから、水源も出口もなく、重々しく腐るばかりです。さうして嘗ての平和な日のことを思ひおこし、悔恨と悲哀と苦惱と、ただ歎息ばかりをしてゐたわけなのです。

あなたを待つてゐました。聞いて貰へばいくらか胸の苦しみもなごんだ氣持がします。……あなたはなにをなさるのですか。なにをするのです？……おや、これはどうしたことだ？　わたくしはいつたいどうしたのだらう。あなたはどなたですか。……わたくしたちの知己であるとばかり思つてゐたのに、わたくしの錯覺だつたのか。百年の苦痛と沈默とでわたくしの智慧もにぶつてゐたのか。あなたを見そこなつた。……あなたはわたくしたちとは無關係の人だ。知己を求めてゐたわたくしの感傷にすぎなかつた。……あ、この淵のなかに小便をしないでください。小便をしないでくれ。たのみます。たのむ。傳說の掟が恐しい。……なんといふ愚かなことか。……小便をかけられれば俺たちはまたもとの河童に後もどりしなくてはならん。それはいやだ。小便をしないでくれ。……あなたはなにも聞えないのだな。あ、あ、あなたは不具なのだな。もつともらしい樣子に欺された。落ちついた足音に馬鹿な期待をしたのが誤りだつた。落ちついてゐたんぢやない。眼がわるいから急いで歩けなかつたんだ。深刻さうに見えたのは明き盲目だつたからだ。おまけに聾で、鼻も利かないのだな。でなかつたら、この淵の臭氣をそんなに長く平氣で堪へられる筈がない。栗の下の石に腰かけてくれといつたときにそのとほりにしたのは偶然の一

致だつたのだな。……おい、やめてくれ。小便をするな。尿のために原型にかへるのは先祖からのならはしだ。俺たちはもう河童にかへりたくない。またあの單調で退屈な日が蘇るかと思ふとぞつとする。俺たちは百年間、苦しみと悲しみと、回想と希望とですこしも退屈しなかつた。それで生き甲斐を感じてきた。いまのままで澤山だ。……やめてくれ。なんとかいへ。聾のうへに啞だな。……あ、たうとう初めた。もう取りかへしはつかない。……もう取りかへしはつかない。……

海御前

ここは、暗うございますね。たいへん。暗い。あたくしの棲んでゐる海底も、そんなに明るくはないけれども、ここよりはずつと明るい。なんだか異様な臭氣がしますね。息苦しい。なんのにほひでせう？　草いきれのやうでもあるし、饐ゑた土のにほひのやうでもあるし、遠い人間の屍のやうないやなにほひでもある。それに、ひどくじめじめしてゐる。蚯蚓や土龍やがたくさんゐますね。あまり棲み心地のよいところではないやうに思はれますわ。でも、あたくしはうれしいのです。ほんたうにうれしうございますわ。ここがいくらか快適の土地でないくらゐがなんでございませう。すべての環境といふものがそこに棲んだり旅したりする者の主觀によつて、よくもなつたり惡くもなつたりすることは、當然のことではありませんか。あなたがたがここをもつとも棲みよい場所として選ばれたのならば、そのあなたがたをかぎりなく力づよい味方と思ふあたくしにとりましても、同じやうに樂園と感じられます。

でも、正直、はじめ、いきなりここへ引つぱりこまれたときにはびつくりいたしました。あたくしも河童と生まれかはりましてからは、前世の手搦女とはちがつた神通力を得、馬でも機關車

でも川にひきこむほどの膂力を持つやうになつてをりましたのに、油斷でした。油斷といふことはどんな英雄豪傑にもございます。あたくしは日暮れとともに西の空にわきいでた夕燒雲のあまりの美しさに、ただうつとりとみとれてをりましたので、突然、あたくしの足もとから强い力で引つぱられたときは、たわいもなく引きこまれてしまひました。心が空洞になつてゐるときは神をうしなつてゐるときで、やむを得ません。あたくしが夕燒雲に見とれてゐたのは、あたくしが詩人であるとか、あの女學生趣味の感傷にとらはれてゐたのではありません。あの巨大な眞紅の旗、空全體が一旒の赤い旗になつたやうな神祕、奇蹟、憧憬と歡喜、歷史がつねにその眞實としてつたへてきた回想の正しさ、さういふものにあたくしの全精神をふるはせてゐたのでございました。眞紅、赤い旗こそ、あたくしの命です。その昔、あたくしが源氏とあらそつて、つひに力及ばず、一の谷、屋島、壇の浦と西へ西へと逃れたとき、あたくしを守つてゐてくれたのは、平家の象徵たる赤旗でした。あたくしたちはどんなに苦しい戰のときにも、敗北と流竄の境涯におちましたときにも、宗家の旗じるしの眞紅のいろを見ると勇氣が出ました。それははかなくもあたくしたちの一族が壇の浦の海底に沈んで亡びたのちもなほあたくしたちの消えざる矜恃として、今日まであたくしたちの全精神を支へてをるものでございます。さればあたくしが今日のたそがれどき空いちめんを眞紅に染めた夕燒に、恍惚としてをりましたわけを理解下さいましたでせう。不覺でした。そのため通力を使ふいとまもなく、ここへ引きずりこまれましたのは……でも、今

はうれしうございますの。思ひがけなくあなたがたのやうな味方に今日めぐりあへたことは、あたくしの幸福でございます。平家も壇の浦滅亡以來、ちりぢりばらばらになり、源氏のきびしい追討の眼をのがれて、全國いたるところの山間邊陬の地にかくれ棲むやうになつてから、早や數百年が經ちました。時間の魔力が忘却を强いたとて、なんの不思議がございませう。あなたがたがあたくしのことを知らなくなつてゐたとて、お恨みはいたしません。お望みにしたがつて、お話しいたしませう。さすればあたくしの今日までの復讐の悲願も、あなたがたの理解と協力とを得て、さらに力づよいものとなりませう。

あたくしは平家の侍大將能登守教經の妻のなれのはて、いまは海御前とよばれてゐる者でございます。

壇の浦は平家終焉の地として、その名殘りを海底にとどめてをります。榮華をほこり、沈む太陽を扇をもつてよびかへしたほどの權勢に、永い夢を見てをりました平家も、あの關東の暴力團、源氏の理不盡な攻擊に潰えましたが、その無念をばやるかたなく、その怨靈は今日まで、男は蟹となり、女は河童となつてのこつてをります。ところが不甲斐ないことに、かれらはただ現在は關門海峽のはげしく潮流の鳴りはためく海底に、ただ淫逸無爲の日をおくつてゐるばかりでありまして、せつかく怨靈として再生しましたのに、いつかうに雄々しく復讐のためたたかふ氣配もありません。それどころか、あの平家蟹とよばれ、背の甲羅の紋樣に無念の形相をたたへてゐる

男たちは、賤しい漁師の手に埒もなくとらへられ、賣られたり、食べられたり、剝製にされて飾りものになつたりしてゐる始末です。門司の突端、壇の浦口にのぞんだところにある和布利(めかり)神社の境内には、あたかも平家の腰拔けを嘲笑するかのやうに、巨大な平家蟹の剝製が、繪馬堂にたかだかとかかげられてをります。ああ、なにをかくしませう、それこそあたくしの夫、かつてその勇猛をうたはれ、平家の花とたたへられ、壇の浦の合戰においてあの源氏の大將九郎判官義經をすんでのことに生けどりにしようとした能登守教經のかはりはてた姿なのでございます。これを申しあげるのはつらいことです。あのとき義經は八艘とびをしてのがれましたが（ああ、あの飛鳥にも似た義經の姿が眼にうかびます）もしあたくしの夫が義經を生けどりにしてをりましたならば、歴史もまつたく逆轉してをりましたらうか。それほどの無念さでありましたのでございますから、怨靈となつてのちは雄々しく源氏へ復讐すべく渾身の勇をふるひおこすが當然でありますのに、夫はたたかひに倦み、海底に安逸をむさぼつて、あらうことか、下賤の漁師の網にとらはれ、恥づべき見世物となつてしまつたのでございます。

いや、なにごとも隱すまい。歴史の眞實をかたるのはその歴史とともに永く生きた者の義務でございます。壇の浦以來、今日まで生をうけてゐるあたくしをのぞいて、眞相を知る者はない筈です。恥もいとひません。じつは、すべてのことは、戀ゆゑでした。

おゆるし下さい。女の胸の奥底にある不思議な感情、自分でもどうにもならぬ神祕な衝動、あ

たくしも一人の女でございました。はつきり申しあげませう。あたくしはあの憎い憎い源氏、敵の大將である九郎判官義經を戀するやうになつてゐたのでございます。いつのころ、どのやうにしてか、戀のめばえをさぐることなどは思ひもつかぬことですが、あの一の谷、屋島、壇の浦とつづく戰場の中において、あたくしの義經への慕情は、せつなく耐へがたく加速度的に燃えあがるやうになつてゐました。

一の谷で、那須の與市が船上の扇を射おとしたあと、この關東の荒武者は、圖に乘つて、しきりと拍手喝采してゐる平家の一老兵を、つづいて射殺しました。なんといふはしたないわざでありませう。それまで、みごとに扇のかなめを射た妙技に、敵も味方も舷(ふなべり)をたたいてやんやと褒めそやしてゐましたが、このことのために、海上に浮かぶ平家の軍船ははたと沈默し、味氣なく白けはてた空氣のなかに、この弓の名手にたいする輕侮と憎惡の感情がながれました。しかし陸にゐる源氏の軍勢はさらに喝采のどよめきをつづけてゐます。あたくしは夫教經とともに齒をくひしばるやうにして、その光景をながめてをりました。その射ころされた老兵といふのがほかならぬ夫の古く忠實な郎黨であつたからでございます。

那須の與市は意氣揚々として、馬をいそがせ、渚にかへりました。そして肩をいからし胸を張る歩きかたで、大將義經のまへへ伺候しました。さぞかし晴れがましいお褒めの言葉と、なにかのすばらしい引出物でもあるかと期待したものでせう。ところが與市のあてはみごとに外れまし

た。なにぶん遠方なので、しかとしたことはわかりかねましたが、大将の義經がすこぶる不興で、褒めるどころか、したたかに興市を叱りつけたにちがひないことは遠目にもそれと知れました。扇を射おとしただけでかへつて來たならば興市は胴あげされるくらゐに歡迎されたでせうに、大將の義經が興市を武士道を知らぬ者としておこりつけましたために、部下の兵隊たちももはや拍手をするどころか、すごすごと興市が御前を下つてまゐりましても、慰めようとする者すらなかつたのです。あたくしはこれを眺めてをりまして、ああ義經といふのはなんといふ立派な大將であらうかと、思はずためいきが出たのでした。そのあとで夫に氣づかれなかつたかと、はつといたしましたが、夫は淺ぐろい顏にぐりぐり眼をむいて、ふん馬鹿な大將奴、部下の手柄は褒めてやつとけばいいのに、あれでは那須與市は恨みで寢返りをうつだけの話だと、さんざんに嘲り笑つてをりました、しかし那須與市宗高もさすがに音にきこえた武士(もののふ)で、このことを深く恥ぢ、その後は領國にとぢこもつて、後に平家追討がはじまり、與市に、九州日向の椎葉にのがれた殘黨討滅の命がくだつたときにも、自分は遠慮して、自分の次子小次郎宗昌を派遣したほどでした。

義經がながれた弓をひらはうとして、危險におちいり部下からたしなめられたとき、伯父鎭西八郎爲朝のやうな强弓なら、こちらから好んでながして拾はせてもよいが、この弱弓が源氏の大將義經の弓かと笑はれるがいやさに、危險をおかして拾つたのだといふ話をきかされたときにも、あたくしの胸の奥の琴線は不思議な感應をうけて、ふるへるやうに鳴りました。

めざましかつたのは壇の浦でございます。陣頭に立つて指揮する義經のうつくしい武者ぶりを、あたくしはなんど惚れ惚れと眺めましたでせう。あつてはならぬこと、してはならぬこと、敵將へのこのやるせない慕情、あたくしは運命の神をうらみ、身も世もあらぬなげきにいくたびか涙で袖をぬらしました。はじめはなにも知らなかつた夫敎經は、かよわい女であるあたくしがはげしい合戰と敗亡の悲運のなかで、神經衰弱になつたのだときめ、しきりとあたくしを慰めてをりましたが、そのうちにあたくしの眞意を氣づいたやうです。するとはげしい嫉妬が夫をさいなんで、にはかにあたくしに邪慳にあたるやうになつたと同時に、その憎惡が一途に敵將義經ひとりにそそがれるやうになりました。このために夫の勇猛さはさらに加はり、合戰のたびに義經を目がけて殺到しましたので、一時はこのために味方の志氣もふるひたつたほどでした。

あのときの合戰は忘れられません。彼我の軍船は舷を接し兵隊たちの雄たけびと、劍、槍、弓矢などのかちあふ音、法螺貝と陣太鼓の狂ほしい合奏、荒れる壇の浦の海は青く、數十旒の赤旗と白旗とが風にひるがへつて、その凄絶のありさまはとても口では傳へられません。そのとき、愼恚の眼に嫉妬のほむらをたぎらす夫敎經が宿願を達して、目的の義經に近づき、その鎧の鍔(しころ)をつかんだのです、あたくしはそれを見てゐまして、思はず眼をとぢ、舷側に膝まづいて神に念じましたことの善惡、理明、曲直を問うてなんになりませう。それは不倫でせうか。夫ある身が夫の成功を願はずして、かへつて敵の安全のために祈つたとは、しかしそれこそは女の僞はりない

神聖な戀の感情でした。あたくしは義經の勇武のほどをきいてをりましたが、能登守教經の勇猛がそれに倍することを知つてゐましたので恐れたのでした。ふと眼をひらいたとき、青空を背景にして、義經が空間をとんでゐる姿を見ました。美しい飛鳥の姿でした。緋緘の鎧がきらきらと陽にかがやいて、それはあたかも極樂にゐる迦陵頻迦（かりようびんが）かと思はれました。義經は教經の手に鎧の鎹をのこして、別の船にとびうつつたのでした。それは義經の八艘とびとよばれてゐますけれども、多分四五隻であつたでせう。それとも鞍馬山で天狗に飛行の術をならひ、京都の五條橋で欄干から欄干へとびうつつてさすがの武藏坊辨慶をへこたれさせた人ですから、ほんたうに八隻の船をとびこえたのかも知れません。いづれにしろ、義經の安全を知つてあたくしは安堵の胸をなでおろし、神に感謝して舷に身をよせたのです。そのときあたくしは突然はげしい力で舟底にたたきすゑられました。夫教經の怒りのために朱泥となつた顏が眼前にありました。夫はあたくしが敵のために祈つたことを知つて、あたくしを半殺しの目にあはせました。

そして、結末がまゐつたのでございます。亡びた平家は壇の浦の海底に、男は蟹となり、女は河童となつてわづかに殘るだけになりました。そのほか全國の山間僻地にのがれた殘黨は、三族までも根だやしにする源氏のきびしい追討で大半は殺され、その幸運な少數の者が人跡未踏の奥地に哀れな小さな部落をむすんで、世を忍んでゐるにすぎません。さうして、あたくしは多くの女御と運命をともにし、河童となつて關門海峽の海底に棲む身となつたのでございます。

ところが、この海底の生活はまもなくあたくしには耐へがたいものとなりました。源氏への復讐に燃えるあたくしのはげしい氣魄は、もはや氣力をうしなつて安逸にふけるやうになつてゐた同僚のなかでは、かへつてはぐらかされるばかりで、つひにあたくしをこの海底から脱出させるにいたりました。だから、さつき、あたくしが自分の棲んでゐる海底といつたのは、この壇の浦の底ではありません。現在あたくしは企救（きく）郡松ケ枝の大積の海底に居住してゐます。ここがあたくしの復讐の悲願の據點です。

恥のついでに、申しませう。あたくしが思ひ出ぶかい壇の浦をすてた理由のひとつに、うるさい夫の燒き餅がありました。夫教經は蟹となつてからも、しつこくあたくしの不倫を責め、あのとき義經をとりにがして勝利の契機を逸したことがあたくしの罪のやうにいふのです。お前の浮氣が平家を亡ぼしたといふのでございます。そしてそのあとではふいにあたくしの機嫌をとつて、あたくしを求めようとする。あたくしはもうそのうるささ、いやらしさに耐へがたくなりました。夫をはじめとする蟹たちはもう戰ひは倦き倦きしたといひ、かへつて蟹となつて海底で平和の日の送れるやうになつたことをよろこんで、ときにぶつぶつとだらしない泡をふいて、昔の榮華の日を未練がましく語りあふだけです。その不甲斐なさは女であるあたくしの胸をはがゆさで煮えたぎらせるのでした。河童になつた女は女で、三々五々、群をなして陸のうへを遊び呆けることに熱中し、くやしげな澁面を背の甲羅にのこしてゐる男の蟹たちをなぐさめることもせずあちこ

ち飛びまはつてゐますが、秋になるとまつ青な顔をしてふるへながらみんな海底へかへつて來ます。彼女らはなにより源氏の白旗がこわいので、その敵の旗におどろいて逃げかへつてくるのですが、なに、それは敵の白旗でもなんでもなく、蕎麥の白い花なのです。あきれた臆病といふほかはありません。それやこれやで出廬の覺悟がしだいにかたまつて來ましたので、或る日、思ひきつてあたくしはなつかしい壇の浦の海底を脫出いたしました。

あたくしはさうして現在の大積の海底に棲み、阿修羅となつて、源氏への復讐のため方々を荒しまはるやうになり、その勇猛さのために、いつか誰からともなく海御前（あまごぜ）とよばれるやうになつたのでございます。ところが、ここにさすがにそのあたくしをおどろかせたひとつのことがございました。それは、さきほどもちよつと申しあげました能登守教經が下賤の漁師にとらへられて、和布利（めかり）神社の繪馬堂にさらしものになつてかかげられたことでございます。幸ひ、人間どもはそれを教經の化身と知りませんだけにせめてものことで、わかりましたら大騷ぎでせう。すでに他人となつた夫とはいへ、さすがにあたくしはしばらく愁傷のこころに胸をしめつけられて、そのからからに乾いた赤黑い夫の殘骸のまへにしばらく呆然とイんでをりました。背の紋樣の異樣に無念さうな顏つきがあたくしの心をふるはせます。一瞬、ふつとすまぬ氣持もわきます。あとでわかつてみますと、夫はあたくしの出奔以後、魂がぬけたやうになり、失戀したといつてなげきかなしんでゐたとのことです。それでなくては、驍將義經をあはやとりひ

しがんとした敏捷の教經がどうして愚鈍な下賤の漁夫などの手に負へませうか。ふらふらと氣が拔けたやうになつてゐたにちがひません。あたくしはそれを知ると、やむを得なかつたとはいへ、あたくしが自然にいつしかをかしてきた罪といふものを考へずにはをられませんでしたが、それでは罪とははたしていかなるものでせうか。それを斷ずることは神樣以外にはできないことです。失戀ですつて？　失戀といへば、あたくしも同樣です。あたくしの生きる命の灯であつた九郎義經は、兄頼朝からにらまれ、どこか遠い奥羽の方へのがれたきりで、まつたく消息を知りません。殺されたといふ風評もあり、蝦夷地へわたつて蒙古の方へ行つたといふ說もあつて、眞僞のほどをたしかめ得ません。はつきりわかつてゐることは、もう絕對に義經を見ることができないといふこと、あたくしが失戀したといふことです。あたくしはもはや青春を暗黑のそとへ放りだし、いまはただ復讐の鬼となつてゐるのです。

同僚の女河童連中が蕎麥の花におそれるなんて、だらしのない話です。あたくしはそんなものは怖くもなんともありません。いや、あたくしのまへにはなんの障害物もないのです。あたくしは憎い白旗のあるところ、あたくしの敵のゐるところ、縱橫無盡にあばれまはります。このごろはあたくしの猛威におそれ、白旗をそのままかかげず、字をかいたり、日の丸をかいたり、繪をかいたりしてごまかしてゐますが、あたくしはさういふあさはかな詐術にはごまかされません。あたくしは姿をくらますことは得意だし、水中はむろんのこと、陸でも空でも自由に翔ることが

できますし、馬でもトラックでも機關車でも河中にひきこむだけの膂力をもつてゐます。あたくしの攻撃を避けるために、人間どもはさまざまの防禦法を講じてゐますが、そんなものはなんの役にも立ちません。あたくしは草や藁や魚の卵のなかから簇生したやうな卑賤の河童らとはちがつて、高貴の生れと育ちによつて、神格にちかい通力を附與されてゐますから、低級にして通俗的な呪禁(まじない)ごときであたくしの術を封じようと思つたら、大まちがひです。あきれるではありませんか。卑賤の河童を封じる佛飯や久留米水天宮の札、「古の約束せしを忘るなよ、川だち男われは菅原」といふやうな滑稽な迷言で、あたくしの活躍を封じようとやつきになつてゐるのです。

あたくしは自由で、あたくしの復讐の事業は着々とすすんでゐます。

今日もあたくしはこのあたりの蕎麥畑の花を全部むしりとつて、いくらか疲れたので、あの丘へ腰をおろして休憩してゐたところなのでした。そして、夕燒け雲に歴史的古典的な壯大な感慨をもよほし、ぼんやりとなつてゐるところを、不覺にもあなたがたのために、この暗いところへ引きこまれたわけでした。でも、さきほどから申すやうにそれは後悔ではないのです。それどころか、久方ぶりにあたくしはなつかしい味方のなかに置かれて、うれしさでわくわくしてをるくらゐです。

いつ見ても、赤旗はすばらしい。あたくしたちの矜恃の旗、燃える眞紅の旗、名門の名ごりがふくよかにこもる美しい旗、あたくしはここへ引きこまれた刹那に、それを見て、もう歡喜で胸が

ふくれたのです。あたくしは復讐の鬼となつて以來勇氣は凛々としながらも、孤獨のさびしさには折り折りおそはれて耐へがたくなることがしばしばでしたが、今はもう寂しがりません。こんなに多くの味方ができたら、あたくしの復讐の悲願成就も近きにありませう。ふたたび平家の時代のくることも夢ではなくなりました。

え?……自分は平家ではない、つて? それでは、なんです? なんでございますの? そんなに平家の旗じるしをたなびかせてゐるあなたが、平家ではないなんて。それでは、その旗はなんの旗です。

人民の旗ですつて? それはどういふ意味です? あたくしにはわかりません。わかりませんわ。おどろかさないで下さいまし。赤旗は貴族の旗の筈です。平家は教養たかい貴族です。白旗こそ、人民の旗です。源氏こそ關東の野武士、暴力團、みんな無賴漢、いいえ、源九郎義經をのぞいた以外です。……なんですつて? もう一度、いつて下さい。……なに? 源氏などはもうゐない? それはずつと古い時代の話で、とつくの昔に亡びてゐる?……馬鹿な。源氏がいつ亡びたのです?……そんな筈はない。……ほんたうですつて?……ああ、あなたがたは恐しいことをいふ。心臓がわれさうです。もうすこし、ゆつくり話して下さい。あまりびつくりして判斷力がなくなつてしまひました。あなたがたのいふことを復唱しながら、考へます。……ええいつて下さい。源氏や平家がゐたのは、仁安、壽永、建久といふやうな古い時代のことで、すでに七百

六十年も昔に源平時代は終つた。そのあとに、南北朝、室町、戰國、安土桃山、江戸、明治、大正、といくつかの時代がつづき、昭和の現代は高度な文明の世の中になつてゐる。それで、源氏へ復讐するなどといふやうなことは、無意味なうへに荒唐無稽といつてよいほどのことでそのために人民が迷惑してゐるだけのこと。それより、その神通力を別途に有效に使つた方がよい。自分たちは人民の幸福をねがひ、革命を企圖してゐるが彈壓がきびしくてうまくゆかない。それで願はくばその神通力を自分たちに傳授して欲しい。それが赤旗へ鄕愁をかんじ誇りをもつあなたの眞の慰めになるだらう。平家の旗じるしであつた赤旗の勝利はあなたも願ふところにちがひない。同じ追放者のよしみ、これを機會に、あなたの術を……とんでもない。なにをおつしやるんです。もう聞きません。これ以上、無用です。馬鹿なあたしだ。なんといふ愚かなことか。……ここは、いつたいどこです?……地下ですつて?……道理で、土龍だの蚯蚓だのがたくさんゐて、異樣な臭氣がただよつてゐると思つた。失禮します。……いいえ、放して下さい。用がすまないつて? あなたがたにもう用なんかありません。……

なんといふ恐しいことだらう。この數百年間、復讐の悲願にもえ、情熱をわきたたせ、退屈な日を知らずにきたのに。失戀の痛手もそれでわすれてきたのに——源氏などはもうどこにもゐないといふ。とつくに亡びたといふ。さういへば思ひあたる節がある。馬鹿なあたしだ。けふの日まであたしはなにをしてきたのだらう。もうなんだか身體中の氣力が拔け落ちて、頭のなかが空

洞になつたやうだ。どんな河童封じも屁とも思はなかつたのに、歷史といふ恐しいやつにいつぺんでやられた。かうなると剝製になつた夫敎經の方がまだ幸福であつたかも知れない。……もう、企救の大積にかへるのは止さう。あそこは復讐の據點だつたので、すべてを知つた今は居づらい。壇の浦の海底に行かう。古い友だちのをるところへ行かう。たとひ、そこで、倦怠のはて發狂することがあるとしても。

蕎麥の花

川面をわたる風に乘つて、貴船神社の方角から太鼓の音が聞えて來る。盂蘭盆が近づいたので、村の若い男女が社の境内に集まつて盆踊りの稽古をしてゐるらしい。これは毎年のことだから、格別珍しいことではないが、香春街道の出はづれにある庚申淵に棲んでゐるお染河童にとつては、年變るごとの樂しみの一つではあつた。河童も遊ぶことがきらひではないけれども、人間たちのやうにかういふ浮き浮きした度はづれの祭はやらない。ことに、お染をふくむ北九州界隈の女河童は、いづれも源氏に亡ぼされて關門海峽に沈んだ平家の女官であつたから、敗戰と滅亡の悲しみがなほ尾を引き、なにかの歡樂に底拔けにうつつを拔かすといふ氣持になかなかならないのだつた。しかし、樂しいことは好きなので、人間たちが浮かれ騒いでゐる樣子を遠望しながら、すこしでも心を明るくするよすがにはしてゐた。今夜も月のさす土堤に腰かけて、お染は提燈や炬火のきらめく神社の境内の賑はひを眺めてゐたのである。そして、化ける術を知つてゐたならばきれいな娘に變じて、踊の環のなかに加はることができるのにと思ひながら、變化の法を知らないことにさびしさを感じてゐた。

壇の浦で亡びた平家一門のうち、男は平家蟹となり、女は河童となつた。その女河童たちは能登守教經の夫人であつた海御前によつて統率されてゐる。海御前は門司の大積村にある乙女岩に本據をかまへ、ことあるごとに部下を召集して、さまざまの指示をくだす。毎年六月一日には定期總會が行はれた。海御前はそのときどきの情勢にしたがつて、いろいろの指圖をしたが、いつの會合のときにも變らぬことが一つあつた。それは憎い源氏に對する恨みである。日ごろはおとなしい海御前も事源氏に關する話題になると、柳眉を逆だて眼をぎらつかせ、背の甲羅を炎症をおこすほどギスギス鳴らして、

「お前たち、なんでもかんでも源氏につながりのあるものには、かならず仇を討たないと、平家一門の顔にかかはるぞ」

と、まるでヤクザの女親分のやうに、凄い啖呵を切るのが常であつた。

大勢の女河童のうち、海御前から特に愛されてゐた數名が關門海峽の海底から他所へ移された。庄ノ前は筑後川中流の水の美しいところに居をあたへられ、お染は庚申淵に配されたのであつた。庄ノ前は土地ではいつしかションマエ樣と呼ばれるやうになつて、祠を建てられ、今日まで親しまれてゐる。お染のあたへられた庚申淵は長峽川と檢地川との合流點にあるため、つねに水が變り、深さははかり知れないほどになつて、その棲み心地はなんともいへなかつた。水の澄んでゐることは青水晶のやうである。そして、餌は豐富だつた。關門海峽で味氣ない集團生活をしてゐ

たときには痩せてゐたお染は、庚申淵に移住してから一ケ月もたたぬうちに見ちがへるほど肥え太つた。大勢ゐるとかならず起る感情問題やいざこざがここにはなく、のんびりと自由であることが彼女を肥えさせる一因にもなつたであらう。ただ一つの缺點は孤獨であるといふことだけだつた。お染は心のやさしい河童であつたから、夏になつて、長峡川、檢地川、庚申淵等で泳ぐ子供たちがけつして溺れないやうに見守つた。溺れさうになる者があるとこれを助けた。しかし二つの川と一つの淵との全部にはとても注意が行きとどかず、彼女が氣を配つてゐるにもかかはらず、たまに子供が溺れることがあつた。そんなときお染は自分に神通力の恵まれてゐないことを悲しみ、死んだ子供のために涙を流した。しかし、人間たちはそんな彼女の氣持を知らず、河童の畜生奴、子供を引きこみやがつて、と口惜しがつて罵倒するのを常とした。

貴船神社境内の盆踊りは夜更けになつても衰へる樣子はなく、さらに賑はひを增して行くやうである。盂蘭盆には人間には特別の樂しみがある。若い男と女との自由な交歡である。お染も年ごろになつてゐたから、人間たちのさういふ青春の營みを見て心が疼かないでもなかつたが、自省心に富んでゐたので亂れるやうなことはなかつた。太鼓の音はいよいよ高くなつた。人間の歌聲のどよめきとともに、提燈の數も增え、炬火の火花は冴えた青い月を燒きこがすやうに中天に舞ひあがつて、眞夏の夜空に吸ひこまれた。

土堤にうづくまつて、膝をかかへたまま、この光景を眺めてゐたお染は、ふつと妙な物音を耳

にしてふりかへつた。芒のくさむらをかきわけて、一匹の狐がこちらにやつて來るのが月光に見えた。向うではまだ河童に氣づかぬらしい。お染はあわてて土堤のかげに走りこんだ。見られたところでかまはないのだが、狐が奇妙なことをはじめたので、これを見物するために姿を隱したのである。幸ひ風が反對に吹き、河童特有の生ぐさい匂ひが狐の方に行かないことをよろこびながら、お染は眼を皿にして狐の一擧手一投足を注視した。

狐は土堤から川原に降りた。ちよつとあたりを見まはしてゐたが、誰もゐないと安心したらしく、汀で顏を洗ひはじめた。細い手にすくひとつた川水がまるで水晶のかけらをまき散らしてゐるやうに、月光にキラキラ光つた。その何滴かは飲んだらしい。狐はそれから北斗七星をふりあふいで、なにかを祈るやうな恰好をした。次には叢のところに行きしきりに草を引き拔いて自分の身體にくつつけはじめた。草で身體中が掩はれるほどになつたとき、お染河童は瞠目した。もうそこには狐などは居らず、一人の美しい青年が立つてゐるのであつた。元祿繪卷から拔けだして來たやうな若衆であつた。青年は化身を終ると、對岸はるかの人間たちの盆踊りの光景を眺めながら、祭囃子の調子にあはせて川原で踊りだした。その手ぶりや身體のさばきはあざやかで、お染はうつとりと見とれた。そして、ふたたび自分が變化(へんげ)の才に恵まれてゐないことを悲しんだ。お染はたまらなくなつて、土堤を降つて行つた。狐は突然河童が出現しても格別おどろかなかつた。庚申淵に棲んでゐるお染河童のことを知らぬ者はなかつたし、お染が他の河童たちとちがつ

て、性質のやさしい、またみめ形も美しい女河童であることは有名であつたからである。ただ狐は知らぬ間に自分の行動を見られてゐたことを知つていくらか照れた。

「今晩は」

と、お染は挨拶した。

「今晩は、お染さん」

と、狐はニコニコ顔で答へた。そして、くるッと宙返りすると、もとの狐になつてしまつた。みごとな藝である。

「さつきからあなたの姿を感心して拜見して居りました。あなたはどちらの方です」

「草野(くさの)に棲んでゐる者で、與左衛門と申します。どうぞ、よろしく」

「草野の狐さんはあたしみんな存じて居りますのに、あなたははじめてですわ」

「さうかも知れません。つい四五日前、到津(いとうづ)の方から叔父を頼つて草野に參りましたばかりですから。でも、僕の方は到津にゐるときから、お染さんのことは聞いて知つて居りましたよ。一度お逢ひしたいと考へてゐたところでした。今夜はからずもお目にかかれて光榮です。おつきあひ願ひます」

「こちらこそ」

この夜がお染と與左衛門とのなれそめの最初となつた。孤獨のさびしさに耐へてゐたお染は一

擧に與左衛門によつてこれまでの渇を醫(いや)され、男の方も眷屬はちがふが魅力に富んだお染を愛して、二人の仲は日とともに濃厚になつて行つた。その結合は自然であつた。お染はしかしはじめは自分の體臭について思ひ惱んだ。魚のやうに生ぐさい匂ひは河童本來の身についたものなので、これをどうしようもない。芳香のある花や草の汁を塗つてみても、人間の使用する香水をふりまいてみても消え去るものではなかつた。神佛に願がけしても效驗はなかつた。宿命的にあたへられたものを恨んでも仕方はないが、お染はこのいやなにほひのために、與左衛門から嫌はれるのではないかと怖れた。これまでは自分の體臭について反省をしたこともなく、いやだと思つたこともないのだが、戀が彼女を唐突に苦しめはじめたのである。しかし、案ずるほどのことはなかつた。惚れてしまへばアバタもエクボといふ人間の諺は眞實だつた。與左衛門はお染の體臭をいやがるどころか、

「お染さんの身體は全體がまるで伽羅(きやら)のやうですね。實にすばらしいにほひがする」

といつて、いよいよお染を溺愛した。そのにほひはかへつて官能を刺戟するものとなつて、二人の愛慾のいとなみは野放圖なほどだつた。お染はもう盂蘭盆の人間たちの青春圖繪を見ても羨ましがる必要はなくなつた。眷屬のちがふ動物同士の戀の意味や、傳說の掟のきびしさや、先々のことなど、いまはなにひとつ考へることはせず、現在の幸福におぼれきつた。お染には祕密ができたのである。

大積の乙女岩にゐる海御前はつねに部下たちの動勢に注目してゐたが、お染の戀愛についてはお染も親分をだますことが上手になつてゐて、巧妙に虚僞の報告をした。お染が氣立のよい、嘘をつかない女であると海御前は信じきつてゐたので、やすやすと舌の先に乗せられ、お染の一言一句を疑はうとはしなかつた。お染は嘘をつくことがよいこととは思はなかつたけれども、戀のためであればそれを罪惡とは考へなかつた。

「お染さん、御馳走だよ」

與左衛門はさういつて、よくいろいろなものを持つて來た。油揚げ、蓮根、かまぼこ、煮豆、昆布巻き、すしなどである。それはしかし與左衛門がこしらへたり買つたりしたものではなく、庚申塚に供へられたり、人間が好んでやる宴會といふものの歸りに、折詰をぶら下げてゐるのをかつぱらつて來たものである。庚申淵の土堤に獲物をぶらさげて來ると、與左衛門は淵のうへまで枝をさしのべてゐる榎の大木の幹をコンコンと三度たたく、それが訪れの合圖だ。その低い音は青く淀んだ深い淵の水をくぐり抜けて、淵底のお染の棲家まで電報のやうにとどく。お染はおしやれになつた。その音をきいてから大急ぎで頭の髪をかきつけ、背の甲羅をみがき、薄化粧する。嘴にも紅藻の汁を塗り、頭の皿の水も新しくとりかへる。與左衛門の方も同様で、二人

はあひびきのたびに、おたがひがだんだん美しくなるといつてよろこび、さらに慕情を深めあふのであつた。

「與左衛門さん、御土産よ」

お染の方もときどき草野に出かけて行つた。しかしこれはいくらか冒險であつた。庚申淵にはお染以外誰もゐないけれども、草野には狐や狸がたくさん棲んでゐるので、人目(ひとめ)につきやすい。與左衛門もこれを顧慮して、お染に草野には來るなといましめてゐた。しかし、お染は逢ひたくなるとたまらなくなる。それにもう一つは奇妙な嫉妬心もあつた。與左衛門がお染を草野に來たがらせないのは、草野に女房がゐるからではないか。女房でないまでも戀人でもゐるのではないか。しかしそれは杞憂だつた。まつたく露見を怖れてのことであつた。狐の仲間にも異類と交歡してはならぬ掟があつたから、與左衛門はお染との仲がばれることに戰々兢々としてゐたのである。それでお染が、鯉、鮒、なまづ、すつぽん、ハエ、えびなどの豪華な川料理を心をこめて土産に持つて行つても、與左衛門は不機嫌に佛頂面をしてゐた。

「君がこつちに來なくたつて僕が行くよ。危險ぢやないか」

「でも、今日で三日も來て下さらなんだもの」

「そんなに毎晩は行かれん。女はそれしか用がないかも知らんが、男には仕事があるんだ。もう二度と草野には來なさんな。どうやらこのごろ叔父がかんづきかかつてる形跡があるから、……」

さういはれてゐても、一週間も與左衛門が姿を見せないと、お染は矢も楯もたまらなくなつて、草野へ出張して行くのだつた。

そろそろ秋風の吹きはじめたうすら寒い晩のことであつた。四五日前から降りつづいた雨はあがつてゐたけれども、道はぬかるみ、二つの川と一つの淵の周邊にはいたるところに水たまりができてゐた。三日月が出てゐた。

村の青年に化けた與左衛門は檢地堤に腰をおろし、前方から大聲で歌をうたひながら近づいて來る人間を待つた。疑ひもなく宴會の歸りで、醉漢の腰には大きな折詰がぶらさがつてゐる。その中身が近來にない豪華料理らしいことは箱の大きさと紋章つきの風呂敷の立派さでわかつた。きつとどこかの大家で婚禮があつたものにちがひない。調子はづれの野太い聲でどなりながら來るのは五十がらみの百姓親爺だつた。

音頭とる子が橋から落ちて、
橋の下から泣き音頭
サッサ、ヨイヤサ、サノサト……

「おつさん、上手ぢやなあ」

と、與左衛門は醉つぱらひが近づいて來ると、聲をかけた。

「誰ぢや、そんなところに居るとは?」

「貴船の勝太郎ですよ」

「貴船の勝太郎がそんなところでなにしとる?」

「月を見とりますよ」

「月見? ヘン、あんな針金みたよな月を見てなんするか」

さういつた百姓は芯から醉つてはゐなかつたとみえ、急にギョロッとした眼つきになつて、土堤の男を見た。たしかに貴船の勝太郎にちがひないが、その勝太郎は川の土堤に來て月を見るやうな風流な男ぢやない。いま時分は判子を押したやうにこのごろ村にできたパチンコ屋にゐるはずだ。百姓はこの界隈でよく狐から折詰をとられる噂を思ひだした。彼は力自慢で度胸もある男だつたので、この狐をひつとらへてやらうといふ魂膽になつた。それでなにげない樣子で、

「おい勝太郎、高門の祝言でたいそうな御馳走を貰うて來た。ちいと食はんかい」

さういひながら、腰の折詰をはづした。

それでなくてさへ、お染のために折詰を狙つてゐたのだから、與左衛門は渡りに舟と思つた。

「そんならすこしよばれるかな」

といつて、土堤から下の道に降りて來た。無論すこしではなく全部かつぱらふつもりである。

百姓の方は用心しながら、風呂敷包みをひろげる眞似をした。與左衛門は油斷をしてゐた。いきなりつかみかかつて來た百姓のため、わけもなく、そこへ抑へつけられた。おどろいてはねの

けようとしたが、まるで岩がのしかかつて來たやうな糞力だつた。
「おつさん、なにを無茶するのか」
「ワッハッハッハッ、土狐のくせに、無茶が聞いてあきれるわい。貴樣のために、この邊の者がどんなにひどい目に逢うたかわかりやせん。もうかうなつたら百年目ぢや。狐汁にして食うてやるわい」
「おつさん、おれは貴船の勝太郎ぢやよ。狐でなんかあるもんか」
「笑はせるな、尻尾を出してやがるくせに」
おさへつけられた拍子に、神通力がとけてもとの狐にもどつたことを與左衛門は氣づいてゐなかつた。人間は狐をしばるために自分の帶をときはじめた。
與左衛門の頭にぱつとお染の顏が浮かんだ。すると身內に猛然たる勇氣がわきでて來た。渾身の力をふるひおこすと、岩の重しのやうな百姓の身體の下からはねあげた。しかし、相手もさる者だつた。
「逃がしてたまるか」
と喚いて、狐をなほもしつかりと摑んで離さなかつた。脫れようとする與左衛門と逃がすまいとする百姓とは組んづほつれつの格鬪になつた。そして二人ともそこら一面にある水たまりの中をころげまはつてずぶ濡れ泥まみれになつた。一度百姓は狐を深い水たまりのなかに押しこんだ。

窒息させようと考へたのである。與左衛門は水中でもがき、したたかに泥水を飲んだ。息がとまりさうだつた。しかしまたお染のことを考えると、必死になつて暴れ、やうやく百姓の手から脫れることができた。もう折詰どころではなく命からがら草野へ逃げ歸つた。
與左衛門が十日間も姿を見せないので、お染は心配のあまり、禁ををかして草野に出かけて行つた。そして、與左衛門が高熱を發して寢こんでゐるのを見ておどろいたのである。冷い水たまりで泥水を飲んだため、風邪をひき胃腸病にかかつてゐるのだつた。そして、胃腸の方は治つたが、風邪がこじれて肺炎をおこしてゐた。格鬪したときの傷痕が方々にある。與左衛門は痩せ細り、聲にも元氣がなかつた。お染はその姿を見て泣きくづれたが、この災難が自分に御馳走をあたへようといふ戀人の氣持からの出來事とわかると、どんなにしてでも自分が與左衛門の病氣を治さなければならぬと決心した。またお染は戀人につききりで看病がしたかつた。しかしそれは不可能だつた。ふだんでも人目が多い草野なのに、與左衛門が寢こむと、叔父一家の狐たちが入れかはり立ちかはり看病に當つてゐるため、その隙を見て與左衛門に逢ふだけでも大變である。不安と焦躁とにかられながら、お染は容易に病人に近づくことができなかつた。それは與左衛門の方も同じ思ひだ。二人はちよつとの隙をうかがつてはあわてふためいた逢ひびきをした。與左衛門は叔父たちの棲家とはすこし離れた小さい穴に一人で棲んでゐたので、これまではお染がときどき訪れて行つてもわからずにすんでゐたのであるが、今度はうつかりしてゐると發見される